
詩と歌の音

ノリコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩と歌の音

【Nコード】

N0464C

【作者名】

ノリコ

【あらすじ】

詩音と歌音は双子の兄妹。日本国籍を持つドイツ人の父と日本人の母の間に生まれた二人は、二歳で捨てられた事を理解した。互いの味方は世界に互いだけだと信じ、いつ頃からかその想いは恋心へと変化した。けれど純粋であるはずの恋は、世間に不貞な想いとしか認められるはずもなく――歌音は十四歳の時、今から四年前に起こったある事件をきっかけに心を閉ざしてしまう。※縦書表示に適した書き方はしていません。

詩と歌の音―0―（前書き）

同親の兄弟の少し暗めの恋愛話になります。苦手だ、生理的に受け付けないといった方は閲覧をお控え下さいませ。尚、専門的な事に至っては手探りで書いている節が多々見られます。至らない部分が目立ちますが、お許し頂けると幸いです。

詩と歌の音―0―

世界は狭くて暗い。

無理矢理広げてみても光が滲む事は無く、闇がその手を広げていくだけだ。

世界に僕ら、二人だけ。

広くて暗い世界の上に、僕らは二人だけ。

手を繋いで立っている。ただ、立っている。

世界に僕らが二人だけ。

狭くて広くて暗い世界に、ただ二人だけ。

詩と歌の音―1―

> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

陽光が緑の葉を柔らかく包んでいる。> b r <

さわさわと吹き抜ける風が薄茶の髪を揺らし、よく似た顔の二人は小さく微笑い合った。> b r <

> b r <

「あら、今日も来てくれたの？ 毎日熱心ねえ、詩音君」> b r <

> b r <

少年は看護師の声に振り返り、軽く会釈を返すと再びベッドに向き直った。> b r <

口元だけを微笑ませている妹の伸びた前髪を払う途中、「あ」と呟いてポケットを探る。> b r <

しゃりとした感触が指先を擦った。> b r <

> b r <

「ほら、これ。> b r <

前、欲しいって言ってたヤツ」> b r <

> b r <

華奢な鎖で出来たネックレスの先端には、三日月を象った銀色の小さな飾りがついていていた。> b r <

目前にしゃら、と微かな音と共に垂らされたそれを暫く眺め、少女はふわりと微笑った。> b r <

少し肩を竦めた微笑の仕草は、男でなくとも愛らしいと思うだろう。> b r <

男女の差はあるが、兄妹とはっきり判るまでによく似た二人は同じ

ような笑みを浮かべている。> b r <

彼らを見つめていた看護師達は、日常的に展開されるその光景に今日もまた溜息を吐いていた。> b r <

> b r <

「毎度の事ですけど、お兄ちゃんが来ると歌音ちゃん落ち着きますねえ」> b r <

「ホント。」> b r <

まだ喋ってはいくれないみたいだけどね…笑顔が出るだけ前進したって事よ」> b r <

「ここに来た時は、おにんぎょさんみたいでしたもんねえ」> b r <> b r <

うんうんと頷き合うと、「それにしても」と会話を中断し、何を話すでもなくただ微笑い合っている兄妹に目をやって色めいた息を吐いた。> b r <

ハーフである事すら疑わしいほど日本人離れた容姿の二人は、眺めているだけでぼわんとしてしまう。> b r <

人の少ない病棟だけれど、二人見たさに担当でない看護師までもが覗きに来る程だ。> b r <

所謂“癒し系”というやつか。> b r <

> b r <

「うん。」> b r <

やっぱ似合うわ、それ。苦勞して手に入れた甲斐があった」> b r <

> b r <

白肌の上で光るネクレスを嬉しそうに触る妹の頭を撫で、詩音は背凭れに上半身を埋めた。> b r <

空調の風に揺れるレースカーテンの奥、窓の外をじっと見つめる。

> b r <

指を鎖に絡め、しゃらしやらという音を楽しむ姿を視界の端に留めたまま暫く外を眺め続け、ぽんと手を打った。> b r <

> b r <

「外行く？散歩」> b r <

> b r <

微笑ってはいるけれど、言葉が通じているのかは判らない。> b r <
妹は小さく首を傾げ、ゆっくりと目を瞬いた。その不思議そうな仕草を微笑い、くしゃくしゃと頭を撫でる。> b r <

> b r <

「最近俺が忙しかったから、散歩なんてしてないだろ。> b r <
ねえ、田所さん。してないでしょ？」> b r <

「そうなのよー。歌音ちゃん、中々散歩してくれなくて。> b r <
外を歩くだけなら歩いてくれるんだけどね」> b r <

「……それって、散歩じゃないの？」> b r <

「ただ歩くだけじゃ駄目よ。ちゃんと周りを見て、心と一緒に歩いてもらわなきゃ。> b r <

看護師として悔しいけど、詩音君とじゃなきゃ散歩してくれないんだから」> b r <

> b r <

大きく嘆息して言う田所に軽い笑いを返し、詩音はクローゼットを開けた。> b r <

カーディガンを取り出すとそれを歌音に渡し、彼女がもそもそと袖に腕を通すのを見止めながら数足ある靴に手を伸ばす。> b r <

> b r <

「どれ？」> b r <

> b r <

ベッドの端に並べておくと、歌音は暫く間を置いてから真ん中の靴を選んだ。> b r <

淡いピンク色のパンプスだ。> b r <

「うん」と納得したような顔で頷いた詩音は、歌音が靴を履き終わるのを待ってから手を差し出した。> b r <

きゅっと握る細い手を、ぎゅっと握り返す。> b r <

> b r <

「じゃあ、行って来ます」> b r <

「いってらっしゃーい。」> b r <

中庭の蛇の目エリカが咲き始めてるわよ」> b r <

> b r <

二人の看護師に見送られながら、歌音の歩調に合わせてゆっくりと療養所の廊下を歩く。> b r <

暖冬の柔らかな陽光を肌に受けながら手を引く妹は、口元に微笑を浮かべたまま窓の外を眺めて歩いている。> b r <

その表情をちらりと盗み見た詩音は、満足そうに、けれど何処か淋しそうに唇を微笑ませた。> b r <

> b r <

> b r <

歌音が喋る事を止め、感情を棄てたのは四年前。> b r <
彼女は四年前、人を殺した。> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

――四年前> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

同じ胎から、数分違いで生まれた妹。> b r <

そっくり同じ顔で、幼い頃は見分けがつかなかった。> b r <

何でも知っているつもりだった。彼女の好みも、癖も仕草も、痛みや孤独までも。> b r <

胎児の時分から同じものを分け合ってきたのだ。> b r <

何でも分け合い、話し合い、識っているつもりで――。> b r <

> b r <

> b r <

「痛…っ」>br<

>br<

左の側頭部がズキンと痛み、詩音は顔を上げた。目前に、怪訝そうな目が二つ。>br<

>br<

「どーしたの？」>br<

「や、ちよっと…頭痛くて。歌音が転んだかな…」>br<

「はっは、歌音ドジだもんね。詩音とは大違い」>br<

「有里、毒舌…」>br<

>br<

詩音の苦笑しながらの言葉にケラケラと笑う有里は、パックジュースのストローに口をつけた。>br<

甘い液体を吸い上げながら、つい先月ただの友人から恋人に昇格した少年を眺める。>br<

有里にとっては初恋の相手と晴れて付き合えるようになったのだが、詩音にとっては三人目の彼女だ。>br<

>br<

『あんたもすぐアイツに愛想尽かすわよ。何かあったら歌音歌音って。>br<

あの娘がいる限り、誰も詩音の心なんて手に入れられないんだから』>br<

>br<

先月詩音と切れたという先輩の言葉が、有里の心に引っかかっていた。>br<

確かに、彼女の言う通りではある。付き合うようになって一ヶ月経ったが、デートすらまともに完遂した事がない。>br<

詩音は大抵、途中でふらりと帰ってしまう。>br<

一緒に帰る約束も取り付けてさえいなければ妹とさっさと帰ってしまいう「彼氏」は、起き立ての寝惚けた目で、自分の向こう側、窓外の空を見つめている。>br<

その頭の中は、転んだのかもしれない妹の事で一杯だろう。>b r<
けれど、有里は愛想を尽かさないという自信に満ちていた。>b r<
彼らとは小学五年生の頃からの付き合いだし、詩音が過保護な兄で
ある事は昔からだ。>b r<
双子の妹は、聡明で明朗な兄に比べ、少し愚図で身体も弱い。>b

r<
他人の自分でさえ保護者心が疼くのためから、兄である詩音は尚更だ
ろう。>b r<

>b r<

「そろそろ帰る？」>b r<

「んー：帰るのもダルイくらい眠い：」>b r<

>b r<

詩音はそう言いながらもダラダラと起き上がり、背伸びと共に欠伸
を噛み殺した。>b r<

鞆を肩に掛け、夕陽に薄茶の髪を煌かせて笑う。>b r<

人外、という言葉が似合う綺麗な笑顔に数秒見惚れ、有里はぷるぷ
ると頭を振ると立ち上がった。>b r<

>b r<

他愛の無い会話を繰り返し、有里の家の数メートル手前で立ち止ま
る。>b r<

詩音は今日も、自分から手を繋いでくれなかった。>b r<

>b r<

「詩音」>b r<

>b r<

陽が落ち、街灯に光がポツポツと灯っていく。>b r<

呼び掛けに、詩音は穏やかな笑みを浮かべて有里の言葉を待った。

>b r<

感じの好い、けれどやんわりと拒絶するような微笑。>b r<

>b r<

「何？どうしたの」>b r<

> b r <

両手を握り締める有里は何となく縊るような目で見上げたまま黙している。> b r <

言葉の続きを催促したのは、早く帰りたかったからだ。> b r <
妹がもし本当に転んだのだとしたなら怪我をしていないか心配だし、
そもそも左側頭部が痛む時は大抵彼女の身に何かが起こっている。

> b r <

更に眠気を伴うのは、熱でも出したか或いは生理痛か。> b r <

> b r <

「えと：キ、キス：してほしいなあ、なんて：」> b r <

> b r <

有里は頬を染め、おずおずと言った。> b r <

詩音はぽかんと口を開け、それからすぐにいつもの笑みを浮かべると、ぎゅっと目を閉じて待つ有里の頬に唇を掠めた。> b r <

> b r <

「また明日ね」> b r <

> b r <

ムツと目を見開いた有里に手を振り、返事も待たずに駆け出した。

> b r <

ちらりと時計を見ると、もう十八時を三十分も過ぎている。> b r <
最初の痛みがあってから、既に一時間以上経っていた。> b r <

> b r <

この通りから自分の家までは電車を使って三十分かかる。> b r <
走りながら、詩音は有里の事を少しでも考えた。> b r <

可哀想な事をしている、それは解っていた。> b r <

恋愛感情も抱いていないのに付き合って、感情がないからキスは頬にする。> b r <

あの、愕然とした、期待を裏切られたような目。> b r <
可哀想と思いながら、くっと喉の奥で嘲笑った。> b r <

> b r <

いつ頃からか、詩音の中には二つの感情というか、いや多分それよりも多い何かがあるって、それはどんな時にも心の端や真ん中に鎮座している。> b r <

愛想の良い自分、明るい自分、人付き合いの巧い、処世術を心得た多くの自分達。> b r <

幾つもの顔を使い分ける内に、同様の数の影が生まれた。> b r <
そいつらは孤独の中でじっとしていて、暗く淀んで冷淡な眼をしている。> b r <

> b r <

> b r <

自宅に着いたのは、十九時を回り切った頃。> b r <
家の灯りは点いておらず、人の気配も無い。> b r <
そういえば両親は末の妹を連れて立食パーティーだとか何かに出かけると言っていたような。> b r <

玄関の灯りを点けると、靴は歌音の通学用のものしかなく、義兄もまだ帰っていないようだ。> b r <

> b r <

「カノ？寝てんの？」> b r <

> b r <

暗い廊下や部屋の灯りを点けながら声をかける。> b r <

返答は無く、詩音は首を傾げながら歌音の部屋の扉をノックした。

それにも返事が無い。> b r <

益々首を傾げ、そろりとノブを回す。> b r <

> b r <

「カノ…？」> b r <

> b r <

歌音は布団を頭から被り、小さく震えているようだった。> b r <
怪訝に思いながらそっと手を置くと、丸まった布団がびくりと震える。> b r <

> b r <

「…寒いのか？」> b r <

> b r <

風邪でも引いたのかと問うと、暫く経ってから、「うん…」とくぐもった声が返ってきた。> b r <

> b r <

「葉、飲んだ？」> b r <

「…：うん…」> b r <

「飲んでないのか？」> b r <

じゃあ、持ってくるから。あ、お粥も要るだろ？」> b r <

> b r <

歌音は熱を出すと機嫌が悪くなる。> b r <

言葉少ない返事もそのせいだろうと軽く布団を叩き、すくりと立ち上がった。> b r <

直後、バツと細い腕が布団から飛び出し、離れようとする詩音の腕を掴んだ。> b r <

> b r <

「な、何…」> b r <

> b r <

どうしたの、と言いかけた言葉を呑む。> b r <

何枚か服を着込んでいる様子の歌音はカタカタと唇を震わせ、頬を涙で濡らしていた。> b r <

顔色も酷く悪い。> b r <

> b r <

「そ、そんなに寒い…？」> b r <

> b r <

高熱で心細くなっているのかと額に手を当てると、そこは僅かに熱を持っているだけだ。> b r <

兄の呆気に取りられたような目と声の問いに、また暫く間を置いて頷く。> b r <

詩音は笑いながら嘆息し、「待ってな」と妹の頭を撫でる。> b r <

必死に向けられる縋るような目に、後ろ髪を引かれる思いで階下に向かった。> b r <

> b r <
その四日後だ。> b r <

歌音は二つ年上の義兄・司郎を階段の上から突き飛ばし、彼は死んだ。> b r <

更に二ヶ月後、妊娠が判り中絶。> b r <

歌音は精神を患い、現在も療養所に入院している。> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

「お前が気に病むこと、ないんだよ…」> b r <

> b r <

ぽとりと落ちた小さな花を手の甲に乗せ、穏やかな目でそれを眺める妹の右手を握る。> b r <

> b r <

どうして歌音は心を閉ざしたのだろう。> b r <

子供を無理矢理殺したから？> b r <

否、妊娠が判った時、彼女は発狂してしまったかのように泣き叫んでいた。> b r <

義兄を好いていたなどという事は絶対に無い。> b r <
だって、歌音の心は自分のものだ。> b r <

> b r <

事故だったとはいえ、人を殺してしまったからだろうか。> b r <
いいや、あの時、歌音は酷く錯乱していたものの感情までは手放していなかった。> b r <

> b r <

多分、妊娠していると判った時、父親の名前を家族の前で無理矢理自供させられてからだ。> b r <

自暴自棄に司郎の名を叫んだ翌日。> b r <

いつも綺麗に輝いていた歌音の灰色の瞳は死んだ魚の様に淀み、唇は無意味に薄く開いたまま、何も誰も見止めない。>br<

二年前、漸く自分をそこに映すようになってくれた。最近では微かな笑顔も見せてくれるようになった。>br<

>br<
「綺麗…？」>br<

>br<
膝を抱きその上に頬を置いて、左手の甲に乗せた花を見つめ続ける妹に問う。>br<

歌音は微笑んだままゆっくりと頷いた。>br<

>br<
「カノ、俺を呼んで」>br<

>br<
折った膝に頬を寄せ、花を見つめ続ける瞳を見上げる。>br<

同じ顔の灰色の瞳が、優しく詩音を見つめた。>br<

>br<
「ねえ、呼んでよ…カノ。>br<
俺を、呼んで…」>br<

>br<
愛している。同じ胎から数分遅れで生まれた、同じ顔の、双子の妹を。>br<

温かいと同時に冷たい印象を与える眼の際に沿って、涙が――。>br<

>br<
「シノ」>br<

>br<
囁く声の呼び掛けに、浮かんでいた涙がぼろりと落ちた。>br<

>br<
どうしてあの日、気づいてやれなかったのだろう。>br<
歌音は確かに信号を発していた。判り易過ぎる救難信号を出してい

たのに。> b r <

> b r <

膝の小さな山を挟み、間近にある唇へそつと近づく。> b r <

同じ顔。> b r <

幼い頃、養護施設の職員をからかって遊んだ。> b r <

ウィッグをつけて、歌音の服を着る。歌音は帽子で髪を隠し詩音の服を着て、「どっちがどっち？」と問って回るのだ。わざと反対の変装をした事もある。> b r <

それくらい、似ていた顔、声、仕草。> b r <

でも、愛しているのだ。> b r <

> b r <

愛してしまった。> b r <

> b r <

触れただけの唇を離し、溜息を吐く。> b r <

> b r <

「あったかいね…シノ…」> b r <

> b r <

ぽつりと言葉を綴った歌音の瞳から、涙が一つ筋を作った。> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

詩と歌の音―2―

「詩音君…お帰りなさい…」

“家”に帰るのは三日ぶりだ。

目を逸らしながら声をかける母親を冷淡な眼で見、言葉を返さないまま階段を上る。

母親が嫌いだ。

再婚相手に気を遣い、新しく生まれた妹に愛情を与え、自分達の頭すら撫でなかった。

実父が死んで直ぐに施設へ入れたような人間だ。職員は皆優しくかったが、孤独感は拭えなかった。

まるで世界に歌音と二人だけのような。

絶望には程遠いが、二人一緒に孤独だった。

迎え入れられた“家”には既に一つの家族が出来上がっていて、二人の孤独感と疎外感を増幅させただけ。

部屋に入った途端、ピリリリリと単調な機械音が響いた。音源はベツドの上。

暗闇の中でただ一つ光るそれは、三日前に充電したまま放っておいた携帯電話だ。

す、と視線を下げ、液晶の画面を見つめる。

『奥田有里』と発信相手の名前が闇の中に浮かび上がり、溜息を吐いて電話を持ち上げた。

「…もしもし？」

『あー！やっと出た！ケータイまた置いてったの？』

「あー…ごめん。忘れてた。」

で、何？」

『な、何って…。ねえ、また歌音の所行ってたの？』

パチ、と電気のスイッチを押す。

パリパリと微かな音を立て、部屋は明るくなった。

「そうだけど…何？」

疲労の滲む顔でそれを声には出さず、淡々と問う。

電話の向こうで、有里は小さく息を呑んだ。

詩音と付き合って四年。

年々、彼の本性が見えて来るような、どんどん遠ざかって行くような。

四年前からずっと、詩音は自分から行動を起こした事がない。手を繋ぐ、キスをする、セックスだって、ただの一度も。

「ねえ、私の事、好き…？」

一縷の望み。それを捨てられないまま、虚しい言葉遊びを持ちかける。

答えは、解っていた。

『…好きだよ…』

いつも、困ったような声で、いつもと同じ笑顔で。

「……歌音よりも…？」

四年間、ずっと訊かなかった事。訊けなかった事。

意地で、恋人の関係を続けている。

好きで堪らなかった。今でもその想いは変わらない。けれど今では、その想いの大半が意地だ。

沈黙は、何よりも明確な答え。

「…わかった…」

歌音が入院してから、詩音は毎日見舞いに通っていた。

この四年、恋人であるはずの自分の同行は絶対に許してもらえず、病院の名前や病状すら教えてくれなかった。

『……ごめん』

そんな事、少しも思っていない癖に。

有里は何も答えず電話を切り、苛立ちに任せて投げた。

ガンツと音を立て、新機種に変えたばかりの電話は壁にぶつかって落ちる。

どんなに頑張って着飾って化粧をしても、詩音が自分を愛してくれる事はないのだ。絶対に。

二年前、その確証を見失ってしまった。

詩音の後を尾け辿り着いたのは、悠久の森という療養施設。

突然入院すると知らされた歌音が身体の病気ではなく心の病気だと知り、彼女に友情を寄せるこの心は確かに痛んだのに。

遠目に、歌音は感情を失くしてしまったのだろうと判る程、表情がなかった。

手を繋いでゆっくりと歩いていた二人は庭の人気のない場所に腰を下ろし、詩音は一人何か話していた。歌音の反応は無い。細かい砂を細い手に少し掴んで、さらさらと地面に撒く。

その合間に詩音は言葉を掛け、歌音は再び砂を掴んで地面に落とす。それを幾度か繰り返し、詩音は砂を掴み続ける手を握ると、肌に張りついたそれを優しく払った。

妹の手を握る兄は、まるで絵本の王子様がお姫様にするようにその甲へ唇をつけ。

愛おしそうに、彼女の手を自分の頬に当てた。

「好きだったのに！愛して欲しかったのに！！」

枕を引っ掴んで殴りつけ、大声で喚きながらベッドに突っ伏して無き咽ぶ。

大好きで大好きで堪らないあの人は、鏡の中の自分を愛すように不毛な愛情に憑かれたのだ。

「…ごめん、ねえ…」

くつと晒って電話を放り投げた。それはゆっくりと弧を描き、ぽすりと枕元に落ちる。

少しも悪びれていないくせに。

言葉の裏に隠した本心は、やっと面倒な柵から解放されたと思っただけだ。

「サイテー、だな」

この言葉も、自嘲的ではあるが表情が伴っていない。
年々、自分の中の暗い部分が大きくなっているような気がする。

高校へは入学当初から留年しない程度に通い、日々の大半をアルバイトに費やしている。

家に帰りたくないから、友人の家を転々とした。

高校生の分際で三つもバイトを掛け持つのは、家を出る資金を貯めるためだった。

それも、既に十分な額になっている。

「詩音…?」

コンコンと扉を叩く音が響き、詩音はベッドに腰を下ろした。

「何?」と短く答えると、僅かな沈黙の後に扉が開く。

「今日も歌音の所へ行っていたの…?」

「……悪い……?」

機嫌を窺うような声色に、睨みつけながら問い返した。

あなたは、一度も見舞いに行かないではないか。そう、言いたげな眼で。

「そ、そうじゃないの…。」

ねえ、家を出るのは構わないわ…。」

「あの人もそれを望んでるから。でしょ?」

冷めた息子の眼差しに怖気て後退する。

双子は亡夫に似すぎていて、母親はそれを恐ろしく思っていた。

まるで自分の遺伝子が無いみたいだ。それに、ずっと幼い頃から双子は見えない何かで繋がっていて、産みの母親なのに疎外感を拭えない。

現夫は、そんな双子を毛嫌いした。

息子もまた義父を嫌った。多分一度捨てた自分の事も心底から嫌っている。

「そういう事を、言わないで…。

家を出るのは構わないから…大学だけは出て頂戴…？お願いよ…」

いつもおどおどとして、他人の顔色を窺う母親が大嫌いだ。

この人は知っているのだろうか。自分の産んだ子供達が、陰で義理の父親から「お前達はそっくりすぎて気味が悪い」と言われていた事を。

「…ねえ。そんなにあの人が怖いのか？」

母さん、そんなに俺達が怖い？“パパ”を思い出すから嫌なの？

どうして俺の目を見ないのか？どうして歌音を庇わないのか？見舞いに行つてやらないのか？」

問いつける。淡々とした、感情の灯らない声で。

立ち上がり、後退する母親を追い詰めるようにゆっくりと、歩きながら。

「カノがレイプされたって知って、どうして怒らなかった？

腸が煮えくり返るほど憎くならなかった？

アイツが死んでなかったら、俺が殺してたよ。

ねえ、母さん、どうして俺達を引き取ったの？

愛もしないくせに」

たった二歳で、親に棄てられた事を理解した。
施設の職員は皆優しくかった。愛してくれた。愛を教えようとしてくれた。

愛なら知っている。孤独も知っている。疎外も知っている。
全部全部、歌音と分け合ってきた。何もかも。

後退する母の背が扉にぶつかり、止まった。

幽霊を見るような目。恐れの色を一杯に浮かべ、少し震えている。

ダンッと、彼女の顔の両脇に拳を叩きつけた。

眼は、冷然とした、感情の灯らない無色のまま。

質問の残酷さとは裏腹に、揺れてもいない。

「カノは、あんたを欲してたのに。

あんたはどうして、花菜だけ可愛がったの」

この家に連れて来られた時、異父妹は二歳だった。

母によく似た、可愛らしい女の子。

彼女は母と父の愛を一身に受け、家族の愛に満たされていた。

二人は、愛で満たされているはずの家庭という狭い世界に入れられ
ても二人きりだった。

狭くて暗い世界で立っている事、ひっそりと息をしている事だけは、
許された。

家族ではない。

二人一緒に、愛されていない。

「あなたの夫のために、大学に入れたら出てあげる。

長男が死んで、長女は精神疾患。次女は我侭放題の馬鹿。

まともな肩書き作れるの、俺だけだもんね」

数十秒か、数十分か。

沈黙の中、初めて詩音の眼に感情が灯り、母はその眼差しに心をグサグサと抉られた。

冷たい声で言い放ち、柔和な笑顔を浮かべている。

この子をこんな風にしてしまったのは、自分だ。

夫を酷い形で喪って、一人で生きてはいけなかった。

一度は愛した人の面影を濃く残す双子を、真正面から見れなかった。弱すぎる自分が招いた、償いようのない大罪なのだ。

今の夫の息子が死んだ事も、前夫との娘が心を病んだ事も。

その片割れが、正常なふりをしてどこか歪な事も。

「ごめんなさ…」

戦慄きながら呟く母を一瞥し、詩音はずっとその身を離した。

首を傾げ、哀れんだ眼で微笑んでいる。

「家はあるよ。仕送りも要らない。

あの人の事だから、早坂家の子供の肩書きのために、学費だけは出すんでしょう？

それと……」

微笑が消える。

瞼が僅かに下がり、長い睫が白い頬に影を落とした。

「歌音が退院出来るようになったら、俺が引き取るから。

あんたには渡さない。絶対に」

実の母親に向いているとは思えない、禍々しいものを見るような眼

で、言い放った。

——悠久の森、療養棟。

持っていたカルテの束がバサバサと白い床に落ちた。

田所 紗江子は言葉をなくし、隣の鮫島 夕実も同様に立ち尽くしていた。

目の前の少女は口元にだけ微笑を浮かべ、すうっと目線を下げる。

「かかか歌音ちゃん！ちょっと待って！待って？！

えええええー?!」

「た、田所先輩、落ち着いて下さいよー」

「おっ、落ち着けて！あんた何でそんな落ち着いてんのよ！

この子！今！」

「お話してくれましたねえ…」

おっとりした口調でほのぼのと返す後輩にカーッと苛立ちのボルテージを上げたが、視線を彷徨わせている歌音にはっと向き直る。

彼女はついさっき、「田所さん…」と蚊の鳴くような声で声を掛けてきた。

「歌音ちゃん、新城先生を…呼んでも良い？」

四年間たった一度も声を出さなかった患者の急変に戸惑いながら問いかける。

歌音は視線を下げたまま何度かゆつくりと瞬いた後、こくと小さく頷いた。

心療科と精神科が併設されている病棟の、心療寄りの入院棟。四季様々な種類の木や花が植えられ、一年中何かしらの花が咲いている。

この一角は、心療で請け負うには重いが精神科に入れるよりは軽い患者が入院している、療養所の一種だ。

比較的穏やかな時間が流れている病棟の廊下を、バタバタと慌しい足音が駆け抜けて行った。

「歌音が？喋ったって？」

「は、はい……。散歩から帰って、ついさっき……」

「そっかー。やっと喋ってくれる気になったか。」

「詩音は何か言ってた？」

「い、いいえ？『じゃ、また明日！』って帰りましたよ」

三十分程前に帰った彼女の兄の様子に先日と変わったところは何らなかった。

ふんふんと相槌を打ち、新城は「よっころしょっ」と立ち上がる。

興奮した様子の紗江子に、新城 恭一郎はにっこりと笑って見せた。

「はい、君の名前は？」

「……、歌音……」

「うん。よく言えました。はいこれご褒美」

白衣のポケットから飴玉を取り出し、向かいに座る歌音に差し出す。視線を合わせようとはしない歌音へ暫く手を伸べていたが、飴玉を受け取る素振りを見せない彼女に肩を竦めて机の上に置いた。

「どうして、話をしてくれる気になったの？」

「…………シノが…」

耳を澄ませていないと聞き取れないほどの小声で兄の名を呟くと、左下の床を見ていた目線を右へ移す。

頬杖について耳を傾ける恭一郎は、やっぱりか、と目を細めた。

表情らしい表情といえば微笑だけだが、それを引き出したのも彼女の兄だ。

「詩音がどうしたの？」

彼女の症状は外傷性精神障害と診断されている。

食事、入浴、排泄といった生活能力はあるが、コミュニケーション能力、感情を喪失している状態ではろくなカウンセリングも出来ず、最近まではクレヨンを握って紙に何かを描くという行為すらしやうとしなかった。

兄の名を呟いたまま黙り、右往左往と視線を彷徨わせて十分は経っただろうか。歌音は小さく溜息を吐いた。

「…シノ、が…………あったかい…」

ぽつりと呟き、灰色の瞳は机上に置いた自分の手をじっと見つめる。

『信じて良いのは、シノだけだよ』

幼い声が耳の奥にさわりと触れる。

歌音にしか聞こえない声に、歌音は頷いた。

『カノと、シノしかないんだよ』

もう一度頷く。

信じられるのも、心を許して良いのも、詩音だけだ。

世界は真っ暗なのだ。明るいののは、詩音の周りだけ。其処にいれば安全だ。

二度頷いた歌音はゆっくりと目を閉じる。

自分の右手が握る左手は、詩音の手に握られているように温かかった。

遂に目を合わせなかった歌音が不意に目を閉じ、恭一郎はパチパチと目を瞬かせた。

む、と眉を寄せ、静かに顔を近づけてみると、微かに寝息が聞こえてくる。

「先生？」

「電池切れ、寝ちゃった」

「やだ、疲れちゃったんだわ」

やれやれと小さく首を振りながら、浮かせていた腰を再び椅子に落ち着けた。

「シノがあったかい…か。」

この手の病気は何がきっかけに快方に向かうのか判らないもんだけど、今回もまた難題だねえ」

これを切っ掛けにカウンセリングに応じてくれると良いのだが。

二人掛りでベッドに運ばれる歌音を眺め、恭一郎は苦笑した。

詩と歌の音―3―

『シノ。』

これをシノにあげる。

カノにはこれね』

“パパ”はその日、僕と妹を動物園と遊園地に連れて行ってくれた。朝から晩まで遊び倒して、妹は眠そうな目で差し出された封筒を受け取った。

僕にくれたものは、四角いお菓子の箱。

『シノ。約束だよ。』

それは十八歳になるまで見ちゃ駄目だ。

それに、絶対誰にも渡しちゃ駄目だよ』

『ママにも?』

『うん。ママにも。』

忘れないように、箱の中に約束を書いた紙をちゃんと入れたから』
『パパ、カノは?カノの見ちゃだめ??』

妹は目を擦りながら聞いた。

“パパ”は微笑って、『いつでも見て良いよ。二人でね』　そう言
った。

次の日、“パパ”がいなくなった。

“ママ”は僕たちを棄てた。

僕らは、二人だけになった。

車の排気音で目が覚め、詩音はぐつと背を伸ばした。いつにもまして眠った気がしない。

欠伸を噛み殺しながら生活臭のない部屋を見渡すと、緩慢な動作で机の引き出しを開けた。

元々出て行くつもりだった生活拠点でないこの部屋は、十五歳の頃から必需品以外がダンボールの中で眠っている。

“パパ”が好きだった菓子箱。十八歳になった先月、箱の中にある日記帳を見てみた。

三年ダイアリーのそれは全てドイツ語で書かれていて、何がなんだか分からずに終わっている。

せめて英語だったら読めたのにといいながらも、ドイツ語を習う気もない。

開けてはいけないパンドラの箱のような、妙に不安感を煽る物体だ。

軽く嘆息し、寝癖のついた頭を掻きながら欠伸を噛む。

その途中でピカピカと点滅する光を見つけ、携帯電話を取った。

思ったより深く眠っていたのだろうか。着信履歴が十五件も更新されていた。

三日間放置していたのだから当たり前か。

内一つは歌音の主治医、残りは全てバイト先の社長からだ。

先にどちらと連絡を取ろうかと迷い、十件以上も履歴を残している社長に決めた。

『詩音?! あんたねえ! あれ程留守電設定しなさいって言ったでしょ?!』

っつーかこのご時世に忘れないでよ面倒臭い!』

「あー、あはは、怒鳴らないで下さいよ。俺寝起きだからさー」

『んあ?! あら、あんたにしちゃお早い寝起きねえ。』

午前様かと思ったのに』

「でしょー?」

『じゃなくて!!!』

低いくせにキンキンと響く声に耳元から電話を離し、詩音は乾いた声で笑った。

現時点での収入の柱はモデル業だ。六歳の時にスカウトされ、もう十二年になる。

『早速で悪いけど、明日空いてる?』

急に雑誌の撮影入っちゃってー、先方があんたじゃないと嫌だつてダダこねてんのよー』

「明日? うん、別に良いですよ。」

学校も卒業確定したし。後は受験日だけ空けてくれたらいつでもオッケーオッケー。

昨日で他のバイト辞めましたから」

『あらそう、良かった。やっとウチ一本に絞ったのね。じゃあ明日十五時に事務所。』

それからあんたまだタレントに移る気ないの? あんたならモデルやるより儲かるわよー?』

「んー: 人前出るのあんま好きじゃないし。」

月四、五回撮るだけで三十万も貰えたら十分でしょ。高校生の分際で」

『将来的によ将来的!』

他メディアの前に出ないのかって毎日電話来るあたしの身にもなつてよね。

それとさあ、アタシの歌音の復帰は未だ駄目?』

不意に、女言葉を喋るデカイ図体の男を本気で怖れていた歌音を思い出してしまった。

彼女も入院する十四まではモデルをしていて、一度きりだったが二人でコマースヤルに出た事もある。まるで他人事だが、大層な反響だったのだそう。

詩音は微笑いながら息を吐き、ギツと音を立てる椅子に座った。

「当分判りませんよ…こればかりは」

『そうよねえ…あーあ！ウチの看板商品はあんた達だけだねえ…』

「って、俺一人じゃ駄目みたいな」

『駄目なのよ！あんた達が揃って最高の出来になるって川添さんも言ってるんだからー』

子供服のカメラマンだ。

子供服を着れなくなった今でも良くしてもらっている。

「酷いなあ、川添さんも社長も」

『まあ、それだけあんた達は二人で光るって事よ。』

じゃあ明日、忘れないでよ？』

「はいはい、三時ですね。じゃあ、また明日」

キィキィ喚く社長に軽く笑いながら電話を切る。

お早い寝起き、と言われて目覚ましを見ると、朝の六時半。

あの人は一体何時に寝て何時に起きてるんだろう。とても寝起きとは思えなかった声の調子に、呆れを越して尊敬の念を抱いてしまいうになる。

もう一方の履歴の主は医者だからもう起きているだろうと発信ボタンを押すと、十回目のコールで『…眠い！』と唸る声が電話口に出た。

「ひょっとして…寝てました？」

『十分前までね。わざわざ掛けなおしてくれたんだ。珍しい』

「先生から掛けてくる方が珍しいでしょ？」

それに歌音の主治医なんだから、何かあったのかって思うじゃないですか」

至極当然の反論に、恭一郎は寝惚けた声で『そうねー』と答えた。

『あのさあ、昨日歌音が自分から喋ったんだけど、君、何かした？』

それか、と、目の前に恭一郎がいるわけではないのに目を逸らす。キスは二人の間でさして珍しい行為ではなかったが、世間からすると異様な光景だろうし異常な行為だろう。

暫く沈黙した後、詩音は口を開いた。

「手、握ってましたけど」

『それだけ？何か言ってやったりしなかった？』

「あー…：：～」

『ふうん…：：：：：：：：：～』

ああ、詩音、今日も来るだろ？』

「そのつもりですけど」

『よしよし。来い来い是非来い。そして俺のカウンセ』

「カウンセリングは受けませんかね。俺には必要ないでしょ。

つと…：：：それより先生」

ガラ、っと引き出しを開ける。

解説不可能な、実父の三年ダイアリー。

パンドラの箱を開けてはならないと頭の端が訴え続けて一ヶ月。

それでも“パパ”は『十八になったら読んで』、と言いたげなニュ

アンスで約束を取りつけた。

「先生のカルテってドイツ語でしょ？ドイツ語って読める？」

『えー？ドイツ語ー？？何となく読めるけど、ちゃんと読めるのは医学用語だけだよ。』

あ、でも待てよ…？夕実ちゃんが読めたような…確か前にドイツ文学専攻してたって。

ゲーテがどうのロマン主義がどうのテオドールがどうの…って、何で？』

「いや、別に…ちょっと訳してもらいたいもんがありました。っていうか、鮫島さんって益々謎だな…」

『夕実ちゃんは不思議ちゃんだからねえ。』

で、何訳すの？気取って原版の本買ってみたけど読めなーいって感じー？』

寝起きだと呻いていた割りに恭一郎は饒舌で、朝から気だるくなる。ケラケラと軽く笑いながら一昔前の若者口調で喋る医者に嘆息し、詩音は箱の中で眠る日記帳を取り出した。

「……違いますよ。」

日記です日記。実の父親の」

『ああ、そーいやお父さんドイツ人だって言ってたっけ。』

何？息子のお前が読めないの？』

「俺達は日本生まれの日本育ちです。」

今日鮫島さん出勤ですか？」

『うん。朝勤だよ。八時から六時まで』

「俺も今日一日フリーだから、朝からそっち行きますね」

『詩音くーん、俺のカウン』

「じゃあ、また病院で」

にこつと笑い、詩音は躊躇無く断話ボタンを押した。

恐らくあの医者とは思えない医者は電話の向こうで齒軋りしているだろう。

パンドラの箱かもしれないものを、開けるのだ。少し緊張する。

「……パパ……」

歌音に託された封筒は、今パンドラの箱と一緒に菓子箱の中に入れている。

色褪せたそれに入っているのは、遊び倒したあの日の写真。

ブロンドの青年は、彼によく似た二人の子供を抱いて楽しそうに笑っている。

確か、通りすがりの人にシャッターを押してもらったのだ。

日記の一番最後のページ。暮野 零人という名前だけが、日本語だった。

面会開始時間の十時を前に病棟へ入れてもらって夕実に日記を渡し、その足で歌音の部屋へ向かう。

既に朝食を済ませていた彼女は、詩音の姿を見つけて嬉しそうに微笑った。

「……シノ……」

表面に浮かべた表情とは裏腹に、幼い子供が親に指されたものの名前を言うようにぼつりと詩音を呼ぶ。

それでも、か細い声で呼ばれた詩音は擦ったような笑顔を浮かべた。

「カノ、調子はどう？」

「……大丈夫……」

「朝御飯、嫌いなもの出なかった？」

「……うん……」

「ちゃんと全部食べた？」

「……少し、残した……」

「んー……じゃあ、昼は残すなよ？」

今日は俺、一緒に食えるから」

こくんと頷く歌音に、詩音はふつつつと湧き上がる感動に口元を緩めた。

言葉を投げると答えが返ってくる。形だけだとしても、歌音と会話をしている。

何て楽しいんだろう。何て嬉しいんだろう。

顔に浮かぶ微笑に、感情はないけれど。

「詩音となら会話成立、と」

「うわっ、吃驚した！ちゃんと気配出して来て下さいよ……」

ぬっと背後から顔を出し、カルテにさらさらと記入する恭一郎に眉を寄せた。

詩音の不平は聞かなかった事として、パタンとカルテを閉じる。

「さてと。詩音。おいで」

「い、嫌だ」

「お・い・で」

メールだったら語尾にハートマークがついただろう。

満面に柔らかな、けれど強制的な何かをを匂わせる笑顔を浮かべ、恭

一郎はパチンと指を鳴らした。
扉口に待機していたのか、古株の看護師と屈強な看護士がザッと現れた。

「はい、第一診察室に連行ー」

「了解です！新城先生！」

「ちょっと待てよ何だこれ！

ああーっ、田所さん助けてー！」

がし、がしつと両脇を掴まれ悲痛な声を上げる詩音に、通りかかった紗江子は瞬いた。

が、その後ろで人差し指を振る恭一郎を見つけて嘆息する。

「詩音君……ご愁傷様……」

「いやーっ！！！」

少年の抵抗は虚しく、彼はずるずると引き摺られて階下へ消えた。
突然の拉致に、不思議そうにゆっくりと瞬いた歌音が、「シノ……」
と小さく呟いている。

ベッドに座り兄の消えた扉口を見つめる彼女に苦笑して見せ、紗江子は付属している机を引き出すとその上に絵本を置いた。

「何もしないと暇でしょう。

読めると思ったら読んでみてね」

相変わらず目を合わせてくれない歌音の頭を優しく撫で、数冊の絵本をタイトルが見えるように並べ直した。

歌音は暫くそれらを見つめ、こくんと小さく頷いた。

――第一診察室

「さーてと。尋問に入るか！」

「カウンセリングでしょ！」

「あら、認めるの？詩音くーん」

「……こんなの絶対医者じゃない……」

てきばきと手際よく椅子に固定され、詩音はブスツと唇を尖らせた。抵抗できないようにロープで縛るなんていつか訴えられるぞ、と思ったが、新城にこんな荒業をさせるほど、詩音は彼の興味を惹いているのだ。

「まあ、世間話って事で」

「暇なんですか？この病院」

「んー、この病棟は比較的ね。」

知らない？一昨日一人退院して、入院してるの歌音入れて四人だけなんだよ」

歌音の入院から四年目にして、詩音は初めてこの病棟の人の少なさに納得した。

医師らしい恰好の人間は常勤の新城を入れて三人しか見た事がないし、看護師だって併設されている精神科に比べればそう多くない。というより、棟自体が隣の精神科に比べるとかなりの小規模だ。

「儲かってないんですね」

「失礼な。僕は療養棟の担当ただけであって心療科は儲かってるもん！」

ふんつと唇を曲げて言う恭一郎に「はは」と乾いた笑みを漏らす。
ぶんぷんと首を振りながら、恭一郎は酷く冷めた様子の詩音の目を見止めた。

ずつと不審に思ってたが、やはりこの子は何処か変だ。

「詩音、子供の頃の記憶って、何歳くらいからある？」

「…信じます？」

「信じるよ？この分野は信頼関係が一番だからね」

さつきとは違う真剣な目に、詩音は嘆息した。

誰も信じないから、同様の内容を含んだ話題が出ると「五歳くらいから」と言っているが。

そもそも、彼には嘘を吐いても直ぐバレるような気がする。

「生まれる前から」

パチパチと恭一郎の目が瞬いた。「わお」と言いたげな表情だ。

「へーへーへー！すっごいなそれ。」

もしかして歌音もそう？」

「ご明察、そうですね。二人して胎人中から聞いてた両親の会話も覚えてます」

「うわあうわあ希少！お前ら超希少！

そっかそっかー。胎児の時の記憶があんのかあ…羨ましいなあ。
じゃ、次」

感動の割りにあっさりと話題を変更した恭一郎に、彼の後ろに立っている看護師はガクつと肩を落とした。

詩音を取り押さえた二人の内の一人である彼は興味津々と目を輝か

せていたのだが。

「自分で思うトラウマと違ってある？」

「トラウマ……？……トラウマ……」

遊園地と動物園、かなあ……」

「あら珍しい。楽しいじゃない。僕、奥さんとよくデートするよ？」

「……楽しいけど……楽しかったけど……そんなのは一時の感情でしょ？」

窓の外を見つめてぽつりと言う。

酷く冷めた目だ。苦い思い出の残る遠い過去を振り返る人間の目。

ふむ、と、恭一郎はペン先の蓋に唇を当てた。

「じゃあゲームしよう。連想ゲーム。僕の言う単語に直感で答えてネ！」

黄色は？」

「バナナ？」

「バナナ……と。じゃあ赤は？」

「夕日……」

「ふむ、次は……日本」

「日本？相撲？」

「でかいよねー力士。見た事ある？超デカイよ。」

「じゃあー、世界」

ぐん、と、詩音の目が見開いた。ような気がした。

詩音は浅く息を吸い、深く吐き出した。

「……暗くて、狭い……」

「……ふむ……」。

次、恋」

「……叶わない」

「愛」
「：消耗品」
「仕事」
「金」
「勉強」
「建前」
「資格」
「肩書き」
「性欲」
「本能」
「母親」
「裏切る」
「父親」
「届かない」
「家族」
「贗物」

どんどんとテンポの速くなる問答に、待機する看護師は「う」と息を呑んだ。
恭一郎のペンはさらさらと進み止らない。詩音の眼はどんどん見開いていく。
いつも見る穏やかな目元と口元はなく、ゲームが進む毎に無機質なものになっていった。

「病院」
「薬くさい」
「教師」
「偽善者」
「黒」
「優しい」

「青」

「怖い」

「動物」

「汚い」

恭一郎が言った言葉は全て、双子の母親や調査の結果判った彼に身近な言葉だ。

数あるキーワードの中で、タブーに最も近い言葉を、

「歌音を取る人間」

放つ。

詩音は無機質な眼をそのままにピタリと黙った。

知らず知らず、彼はトランス状態に入っている。

柔和で人懐っこい笑顔の裏に貼り付けたもう一つの貌。

「殺す」

すう、と眼を細め、詩音は微笑って言った。

いつも浮かべている笑顔。それに酷似した、全く別物の、笑顔。

恭一郎はぐくりと生唾を飲み、微かに震える手で答えを記入した。ふ、っと詩音の身体から力が抜け、瞼が落ちる。

がくんと机に向かって落下する頭を、寸でのところで受け止めた。

「先生……」

慌てて介助に走り寄った看護師が啞然とした表情で呟く。

恭一郎は大きく溜息を吐いた。

「今がこの子の本来の姿…かな？本来じゃあないか…」

「多重人格…ですか？」

「いや…そこまで重くはないけど、多分、詩音は自分の裏面を自覚している。」

やだなあ、難しいな…治療も必要だけど、こういう自覚のあるタイプが一番厄介だ。

多分ね、この子は裏の自分と共存してて、理性を失くすタイプじゃないよ。逃避しないタイプだ。

正常に近いけど、やっぱちょっと違う」

空きベッドに寝かすよう指示を出し、恭一郎は益々大きな溜息を吐いた。

実父が自殺している事、その前日の楽しい思い出、父親の死後直ぐに養護施設へ入れられた事。

施設を去る一ヶ月前に作られた文集の、五歳の子供が書いたとは思えない文章。

厄介なものに興味を抱いてしまった。

その頃、「暇だったら優先的にやったげて」と上司に言われ、淡々と日記帳を訳していた夕実は、ページの中程でキーボードを叩く手を止めた。

「こんなの…見せちゃ駄目だと思っただけだなあ…」

双子の実父が書いたという三年ダイアリー。

『愛してるよ。詩音、歌音。』

でもパパには、ママだけなんだ』

そこで止めた文の続きを、困惑しながら打ち始める。

『だから、

パパは、

ママを許せない。

大嫌いだ』

詩と歌の音―4―

「やーっぱカッコイイよねー、シオン！
表紙だったから思わず買っちゃった！」

ジャンツと男性ファッション誌を差し出す友人に、艶々とした黒髪の少女は呆れ顔で嘆息を返した。

「何よー、花菜ってばその反応。シオンだよ？シオン！
最近私ら向けの雑誌に載ってくれないもんだからシオン切れなの
ー！」

高飛車風の大きな目を半眼にした花菜は、ぷくりと頬を膨らませる友人を鼻で晒う。

「そんなもの買わなかったって、花菜は本物見れるもん」

「えー？またまたあ、嘘ばっかりー」

「ホントよ。」

シオン、花菜のお兄ちゃんなんだから」

ふふんと得意気に笑う。

実の所、ここ一ヶ月その姿を見ていないが。

「嘘嘘、絶対ウソ！」

「ホントだってば。美由紀って案外疑り深いんだね。」

証拠見せてあげるよ。多分、今頃はあそこにいると思うんだ」

ニツと笑う可愛い顔に、美由紀はきょとんと目を瞬かせた。
大量のストラップが揺れる携帯電話を片手に、花菜は目的地とは逆
の方向へスタスタと歩いて行く。

「え？ ちょっと待ってよ花菜！ 内田くん達との約束はー？！」

「パスパス！ 美由紀だって見たいでしょ？ 本物のシオン」

「え？！ マジ？！ 本当にホント？！」

「大マジ。良いからついてきなって。」

花菜も久しぶりにお兄ちゃんに会いたいし」

一度だけ行った事のある病院。

母に連れられて見舞った異父姉はただでさえ陰気だった雰囲気を増
していて、二度と行くものかと思ったものだが。

昨晚兄が帰っていたと知ったのは今朝の事で、その時既に彼の姿は
無く。

「こうでもしないと会えないしね」と一人呟くと、その歩調を速め
た。

『なあ、俺達はどうすれば良いんだろうな』

笑顔を識らない詩音が呟いた。

『適当にすれば良いんじゃないの？』

笑顔だけの詩音が答える。

『カノはちゃんと生きていけるのかな』

『生きていけるよ。だって、俺達がいるんだからさ』

裏側の詩音は、歌音以外に攻撃的だが、歌音にはとても優しい。

表側の詩音は、誰にでも優しいけれど、歌音に対しての束縛性が強い。

どうしたら良い。

いっその事、籠の中の鳥のように、誰にも何にも見つからない場所へ隠してみるか。

けれど、それは歌音の自由と人格を奪う事になる。

でも、そうしないと全てのものから歌音を守れないような気がする。どうすれば良い。

『なあ、俺達はどうすれば良いんだろうな…』

笑顔を識らない詩音が呟いた。

笑顔だけの詩音は淋しそうな笑みを浮かべ、何も答えなかった。

眩しい。

瞼の裏が疼き目を開けると、白電灯の無機質な光が天井を明らせていた。

此処は何処だ。思いながら頭をもたげる。乳白色の壁を見つめ、療養棟だと思い出した。

何故寝ていたのだろうと首を捻ると、頭がズキンと痛んだ。

ピリピリと痺れる痛みを頭部に感じながらのそのそと起き上がり――

「うわっ」

床に置かれている靴に足を突っ込もうとした所で、ベッドに自分のものではない髪が散らばっている事に気づいた。

「カノ……」

驚愕に早鳴る心臓を押さえ、ぐっすりと眠っているらしい妹の額を撫でる。

長い睫に覆われた目は安穩とした形で閉じていて、詩音は一人ふと微笑った。

自分の女版である顔に対して「可愛いなあ」と思うのはナルシストのようで嫌な感じだが、可愛らしいと感じるのだから仕方がない。床に下ろしかけていた足をベッドの上へ戻し、胡坐をかいた腿の上に頬杖をついた。

正午を少し過ぎた冬の午後の陽光が、カーテンに遮られながらも柔らかに室内を暖めている。

「覚えてる…?」

両手について上半身を折り、穏やかな寝息を立てる歌音の耳元へ唇を近づける。

ギツと、ベッドが軋んだ。一人用のパイプベッドは狭くて堪らないはずなのに、何処よりも広い空間のように思えた。

「カノと、シノしかないんだよ…?」

ゆっくりと、囁く。

ぴくりと歌音の指が微かに動き、白い瞼が持ち上がった。薄く開いた妹の目が、鈍く光る兄の目を見つめている。

「ねえ…花菜あ、ここ…ってさあ…」

スタスタと病院の敷地を歩く花菜の背に、美由紀は不安気な声をかけた。

勝手にスタジオかロケ現場へ連れて行ってくれるんだと勘違いしていた自分も悪いが、目的地と思われるこの病院は普段馴染みのない類のものだ。

「心配しなくてもシオンはどこも悪くないよ。悪いのはお姉ちゃんだから」

淡々とした声に、数回瞬いた美由紀は黄色い悲鳴を上げる。

「お姉ちゃんって、もしかしてカノト?！」

私カノトも大好きなのー! ねえねえ、雑誌載らなくなったのって、どっか悪くなったから?」

数年前まで、ティーンズ向けファッション雑誌の表紙の殆どを双子のモデルが飾っていた時期があった。

ジャンルを問わず着こなし、それに合った表情を造っているのではなく自然と出している様子が、同年代の少女達の間で爆発的な人気を呼んだのだ。

カノト一人が突然誌面から消えた今でも、二人のファンや彼女のファンは多いのではないだろうか。

うつとりと手を握り合わせていた美由紀は、数秒経っても何も返してこない花菜へ目をやった。

花菜は形の良い眉をぎゅっと寄せ、数部屋ある病室の内の一室を見ている。

怪訝に思いながら習って視線をやると、何もない部屋に置かれたベッドの上で、男が少女の肩口をぽんぽんと寝かしつけるように軽く叩いていた。

「うわあ、うわー！あれってシオンとカノトだよね…?!」

美由紀は思わず歓声を通り越し奇声を発しそうになった口元を押さえ、小声で問う。

つんつんとコートの袖口を引っ張る感触に、ぼうつとしていた花菜ははっと目を瞬くと振り返った。

「そ、そうだよ。詩音と歌音。花菜のお兄ちゃんとお姉ちゃん」

「うわー…超感動だよお…！花菜ほんつとありがとう！」

「ね？嘘じゃなかったでしょ？」

興奮を抑える友人にふふんと鼻を鳴らし、花菜は得意気に口角を上げた。

「あれ？君達、何？診察は別棟だよー」

そろそろ詩音を起こそうかと病室に向かっていた恭一郎は、場にそぐわない二人の少女に眉を寄せた。

右手に持っていたファイルをトントンと肩に当てながら声をかける。

「あ、す、すみません。私達診察に来たんじゃなくって…」

「お見舞いに来たんです。お姉ちゃんの」

慌てて両手を振る少女とは対照的に、ツンツンとした印象の少女が堂々とした態度で言葉を引き継いだ。

その少女に何となく見覚えのあった恭一郎は、ファイルを脇に戻しながらきよとんと首を捻った。

ピュウヒュウと冷たい風の音が聞こえてきそうな空をレースのカーテン越しに眺めていた詩音は、微かに聞こえる廊下の騒めきに気づいて目を向けた。

もう一人の妹である少女が、友人らしい少女を連れて何か言っている。

詩音はあからさまに表情を不機嫌にし、小さく舌を打った。

「カノ、腹減った？」

普段とは違う棟内の変化を見ないものとして、まどろみながらも眠る気配のない歌音に問う。

歌音は顔を上げ、数回ゆっくりと瞬いてから小さく頷いた。

「食べに行こうか」

「うん…」

声を出して答えた歌音の頭に軽く手を置いて靴を突っ掛ける。

歌音はのそのそと起き上がり、反対側のスリッパへ同様に足を入れて立ち上がった。

そのままぼうつとした様子で外の風景を眺める細い手を取り、詩音

は不機嫌を露に病室の扉を開ける。

「あ、詩音。何だ起きたの？」

「お兄ちゃん！花菜もお見舞い来たのよ」

「うわああ…ほ、本物だあ…」

三つの声が綺麗に重なり、詩音は益々不快そうに眉を寄せた。

普段から利用者の少ない療養棟の食堂は、この日異常な賑わいを見せていた。

一方的に詩音へ喋りかける花菜、それに短く答えるだけで会話を続けようとはせず歌音の様子に気を配る詩音、のそのそと無表情で昼食を口に運ぶ歌音と、双子を飽きもせずぼーっとした目で見つめ続けている美由紀。

賑わいは花菜のキャイキャイとした十代の女の子らしい声が殆どだったが、愛妻弁当を突く恭一郎は興味深げにその一団を眺めていた。

「先生、これ、訳し終わりましたあ…」

一団から離れた所で弁当を広げている恭一郎の前に、弁当袋と日記、プリントアウトした紙の束を持った夕実が座る。

「うわ、早いねえ。さすが夕実ちゃん」

「でもお、これえ…あんまり双子ちゃんには見せない方が…」

「何で？」

「過激っていうか…三年ダイアリーなんですけどお、ちゃんとした日記になってるのは一年くらいでえ…」

むっと眉を寄せる夕実は、普段よりもトロトロとした口調と小声で喋りながら弁当の米を突いた。

「取り敢えず先生が見て下さいよお。」

詩音くんはしっかりしてるから大丈夫かもしれないけどお……歌音ちゃんには絶対見せちゃ駄目ですよお……」

「ういーっす」

歌音に見せてはいけないのなら、詩音には尚更見せられない。

恭一郎は箸を噛んだまま了解を返し、束の紙を受け取った。

多分二人は父親が自殺した事を知っているだろう。

胎児の記憶があるというのだから、過去の出来事を覚えていやすいタイプに違いない。

ある程度の量とはいえ、妙に重く感じる紙束を大きな封筒に入れ、しっかりと封をした。

「花菜、うるさい」

「ねえお兄ちゃんお兄ちゃん、お兄ちゃんったら！」という呼びかけを五回程繰り返した花菜は、漸く返ってきた反応にむすりと唇を尖らせた。

相変わらず冷たい目で軽く睨まれるだけだ。司郎はあんなに優しくかったのに、詩音には一度も優しく接してもらった覚えがない。

それもこれも歌音のせいだ、と思いながら姉を見ると、彼女はもそもそと口を動かしながら窓の外を眺めていた。

兄とよく似た顔の姉の目には生気がない。

幼いながらに彼女が何をされたのか何となく判り、彼女が大好きだ

った異母兄を殺してしまった事も解った。

心の病気になったのだと母は言ったが、本当だろうか。

もしそれが本当でも、自分の都合の良いように逃げただけに過ぎない。

花菜はじつと姉を見つめ、軽く息を吐いた。

「うわっ、内田くんからメール入ってる…怒ってるよー。

ねえ花菜、今からでも行こうよ」

歌音が最後の一口を飲み込んだ所で、美由紀は「ああっ」と素っ頓狂な声を上げた。

「えー？やだよ。花菜ここにいる」

「一緒に帰れ」

焦った様子で携帯を突きつける美由紀に花菜は眉を歪めて首を振ったが、詩音は目も向けずに彼女の言葉を煽る。

そこへ、昼食を終えた恭一郎がニコニコと人の良さそうな笑みを浮かべて近づいて来た。

「詩音、終わったら続きな」

「はあ？またですか？嫌ですよ」

「嫌よ嫌よも好きの内って言うじゃない。」

って事で、花菜ちゃんだっけ？詩音と大事な話があるから、今日はちょっと君との時間を取れないと思うんだ」

「えー?!何それー!」

ぎゃあぎゃああと喚く花菜と、それに気圧されて乾いた笑い声を立てる恭一郎を見比べた詩音は怪訝そうに目を細める。

まさかとは思うが、助け舟を出してくれたとか。

花菜のマシガントークを笑顔で受ける恭一郎の目は笑っておらず、更にそのこめかみに微かな青筋を見つけた詩音はその考えを払拭した。やれやれと首を振りながら歌音の手を取る。

「部屋、戻ろう」

詩音に習って立ち上がった歌音は、小さく頷いた。直毛の長い髪がさらりと揺れる。

「ちよまーっ！詩音、ちよ、お待ち！」

我俁、と額に堂々と書いているような花菜の文句の羅列に早くも参り始めていた恭一郎は、この場を救済してもらう意味合いも含ませて詩音を呼び止めた。

嫌そうに眉を顰めた顔が振り向く。

「何ですか？」

「すぐにカウンセリングの続きです。君は第一診察室へ直行するように！」

「ちよっと、歌音は？」

「歌音は君よりもこの院内に詳しい子です。一人で帰れるよな？歌音」

ふい、とそっぽを向く歌音に、恭一郎はがっくりと項垂れた。

詩音は嘆息しながら腰を屈め、歌音の視界に移動する。

「一人で帰れる？」

長い前髪に隠れた目を見つめて問うと、歌音は少し淋しそうな目をして頷いた。

「第一診察室だかんね！」としつこく呼び掛ける恭一郎に手を振り、詩音は歌音に苦笑して見せると「出口まで一緒に行こう」と食堂を出た。

「先生、お姉ちゃん喋れるんでしょ？」

「んあ？まあ、詩音とならコミュニケーション取れるかな」

とは言っても微笑っているだけで、声と言葉に感情は無いが、取り敢えず会話は成立している。

自我の強い少女に多少ビクつきながら答えると、花菜はむっと眉を寄せたまま唇を尖らせた。

「私とは話せないの？」

「へ？そりゃ、どうかなあ。俺とも未だ話してくんないからねえ、あの子。」

でもまあ、詩音と話せるようになったんだし、お互いに努力すれば君とも話してくれるようになるんじゃない？その内」

「ほんとに病気なの？」

「ええ？そりゃ、病気じゃなきゃ入院しないでしょ。」

って事で僕はお仕事に行かなければならないので、気をつけて帰るんだよ」

ピッとロボットののように手を上げ返事を待たずにスタスタと立ち去る恭一郎の背に、花菜は立てた親指をガッと地面に向けて振り下ろした。

「花菜、急いでー！早く行かなきゃ」

「だから、花菜は行かないってば！美由紀一人で行ってきなよ。」

花菜は急用出来て行けなくなったって言うといってくれば良いから」

「ええー！？ダブルデートなのに？！」

「良いの！じゃあね！」

ぷりぷりと肩を怒らせる花菜は、ダスダスと足音も煩く食堂を後にする。

一人ぽつんと残された美由紀は「うえー」と情けない声を上げたが、ブルブルツと震える携帯電話に「ああー！」と叫びながら病院を後にした。

一度来たきりだが、大して広くもない、むしろ狭い療養棟で、歌音の病室を見つけるのは思いのほか簡単だった。

淡色の壁紙に彩られた部屋は見るからに清潔そうで殆ど物が無い。壁面収納型のクローゼットと小さな三段の靴箱、本の無い本棚やベッドに洗面台。生活に必要な最低限の家具ばかりだ。

そういえば、自宅の兄の部屋やそのままにしてある姉の部屋もこんな様子だ。ただそこに生きているだけのような、感情や個性の見えない部屋。

大きな窓に向かってベッドに腰を下ろし、歌音は絵本をパラパラと捲っているようだった。

数分その姿を眺め、花菜はノックもなしに扉を開ける。開閉の音が聞こえているはずなのに、姉は振り向きもしない。

「お姉ちゃん」

背後から声をかけると、絵本を捲る手がぴたりと止まった。

何だ、やっぱり聞こえているじゃないか。そう思いながら、歌音の前へ回り込む。

「本っ当にお姉ちゃんはずるっ子だね」

窓の手前に置いてあった椅子にどかりと腰を掛けると、歌音と丁度同じ目の高さになった。

ふい、と目を逸らす姉を、腕を組んで睨みつける。

小さい頃から、姉の持っているもの全てが欲しかった。そうしたら、同等になれると思ったからだ。

「お姉ちゃん、聞こえてるよね？」

病気なんかじゃない。

司郎を殺した現実から、一人勝手に逃げているだけなんだ。

花菜は大きな目に愛憎を滲ませ、目を逸らせる歌音の視界へ移動した。

逃げてもずっと身体を曲げて視界に割り込む花菜に歌音は立ち上がり、膝に置いていた絵本がバサリと落ちた。

おずおずと後退する姉に花菜も立ち上がり、その軌跡をゆっくりと辿る。

「演技なんですよ？お姉ちゃん」

あまり広くない病室。

歌音の背は冷たい床にぶつかった。

“妹”の、目が、怖い。

詩と歌の音―5―

私のものは何も無い。何一つ私のものじゃない。
名前は五歳で消えた。身体は十四歳で消えた。
心も私のものじゃない。

二歳の誕生日は特別で――パパがくれた最後のプレゼントは、とても大切な宝物になった。

子供が抱くには少し大きな可愛い熊のぬいぐるみ。
ふわふわしていて、抱き締めると凄く安心出来た。

『お姉ちゃん、それ、かなにちょうだい』

嫌だと言ったら妹は大泣きしてしまって、両親に叱られた。

『あなたはお姉ちゃんになったんだから、妹には優しくしてあげて』

ママだった人がそう言って、パパに貰った“レイちゃん”は妹のものになった。

白くてふわふわしていて、施設の先生に洗濯してもらっていたから、毛並みだって凄く綺麗だった。

いなくなったパパの代わりに、私を抱き締めてくれるような、大事な、宝物だったのに。

『お姉ちゃんになったんだから』

私はいつお姉ちゃんになったんだろう。

妹は新しい物を沢山持っているのに、どうして私のものばかり欲しがるんだろう。

妹のものになったレイちゃんは泥だらけになって、塵置場に座っていた。

私はいつお姉ちゃんになったの？

泣いたって、パパもレイちゃんも帰って来ない。

誰も何も無い。

私を見てくれる人、解ってくれる人、愛してくれる人は、広い世界に詩音だけ。

詩音だけ。

「演技なんでしょ？お姉ちゃん」

妹の眼が怖い。

バクバクと上がる心拍数に反して歌音の体温は少しずつ下がり、目の奥が眩み始めた。

吐き出す息は震え、乳白色の壁に添える指先も小刻みに震えている。花菜と二人きりだという状況に気づいた歌音の緊張はピークに達していた。

「ホントはちゃんと喋れるし、自分がどうしてこんな所にずっと

入院してるかも解ってるんだよね」

そうだ、どうして、こんな所にいるんだろう。

姉の額に滲む汗に気づかないまま、花菜は喋り続ける。

自分の持っていないものばかり持っている姉が大嫌いで、好きだった。

嫌なのだ。幼い頃から、自分を見ると怯えて目を逸らす仕草が。どうしようもなく苛めたくなってしまう。

「お兄ちゃんの気を引きたいからワザと病気のフリしてるんでしょ？」

花菜の眼が怖い。声が怖い。

刃物や銃を向けられた方が、きっとまだマシだ。

あれは身体を傷つけるだけだから。血が噴き出たとしても、傷は縫合出来るしその内治る。

でも、心臓の横を抉られる痛みは、何年経っても治らない。消えないのだ。

「……ちが…けて」

「…何？」

はつきり言ってよ。そんな声じゃ聞こえないよ」

目の奥の眩みが強くなる。

怖い。

頭の隅々が痺れ、床が波打っているような気がする。

怖い怖い怖い。

背中に当たる冷たい壁がボコボコと動いているような気がする。

怖い怖い怖い怖い怖い。

この部屋が、どんどん狭くなっているような。

花菜が、近づいてくる。その背後に、また別の誰か、が――

「つきゃあああ!!」

突然叫び声をあげた歌音に、花菜はびくりと肩を強張らせた。

見ると、姉の目玉は虚ろな色を浮かべたまま忙しなく右往左往動いている。

細い身体をくらくらとよろめかせ、壁に背を押し当てて更に奥へ奥へ逃げようとしているようだ。

「お、お姉ちゃん?」

「嫌だ、やだ、来ないで!」

来ないで来ないで来ないで来ないで!!」

「花菜だよ?! しろ兄じゃないよ! 花菜だってば!」

「やだあ!! 来なっ、たすけて! シノシノシノ!!」

パニックに陥った歌音に狼狽えた花菜は、自分よりも細い手首を掴もうと手を伸べる。

歌音は更に絶望的な悲鳴を上げ、近づけた手は彼女のものとは思えない力で撥ね退けられた。

母に連れられ一度だけ訪れた見舞いだったから、彼女が本当に重症なのだとは思わなかった。

母が一度だけで見舞いに行かなくなった理由も、何となく判った。

歌音はきつと、片割れ以外を認めていないのだ。

「なあ、詩音。少しは歌音を自由にしてやったらどうだ？」
「自由？」

カウンセリングの続きだったはずだが。

諦めた詩音が素直に席に着いていると見止めるや否や、恭一郎は素っ頓狂な事を言った。

詩音は怪訝そうに、どこか不思議そうに眉を寄せる。

「俺、別に歌音を束縛なんてしてないよ。

兄妹で束縛するとかしないとか、変じゃないですか」

「……そう？」

「何か先生の言い方だと、束縛の強い彼氏みたいな感じ」

冷やりとしたものを感じながら、詩音はわざと触れられたくない可能性を口に出した。

法律、道徳、倫理、世間体、色々なものが純粹であるはずの想いを阻んでいる。

動揺の欠片も見せず軽く笑いながら言った詩音に、恭一郎は唇を曲げて鼻息を吐いた。

妹へ向ける愛情にしては、彼のそれや保護観念は重く、どこか歪んでいるような気がしたのだけけれど。

こうさらりと、冗談を笑うような口調で返されては本心を量りきれない。

「さっきのカウンセリングだけど、内容覚えてる？」

「んー……実はあんまりよく覚えてないんすよね。」

赤は夕焼けとか言ってたような気はするんですけど」

「そっかそっか」

「別にオカシイ所なんてなかったでしょ？俺普通だもん。
倒れたのだって多分、最近寝不足だったせいだと思うし」

だらりと椅子に腰掛け、ブツブツと不平を漏らす口調で言い訳染みた言葉を繰り返す様を注意深く見つめる。

普通なら、ただ妹を取るかもしれないという仮定の話で「殺す」などという物騒な言葉は使わない。

しかも微笑って、至極当然だという風に軽い調子では言えないはずだ。

「歌音の事好き？」

「そりゃ、妹ですから。それも双子の」

「家族として？」

「わかんない人だなぁ。家族として好きじゃなかったらどう好きなんですか。」

それに俺、彼女いますよ」

昨日、終止符を打たれたけれど。

体の良いカモフラージュと言い訳にしか使わなかった、可哀想な女の子。

ちらりと有里の顔が脳裏を掠め、詩音は思わず自嘲染みた笑みを唇に浮かべた。

「いるんだ彼女！何で紹介してくんないのよぉ」

「そうやって干渉されるから嫌なんです」

「冷たいなぁ、詩音君は：四年の付き合いだったのにさぁ」

「あーもー：カウンセリングしないんだったら俺帰りますよ？暇じゃないんだから」

「あーっと冗談冗談待ってよう！折角捕まえたのに離すわけ無いでしょ！

今日は朝まで飲もうぜ詩音！」

「……じゃあ、失礼します」

「イヤー！待ってー！！」

ガタンと席を立ち丁寧に頭を下げた詩音の動きは、ノブに手をかけたところでピタリと止まった。

ワシツと背後から彼の服を掴んだ恭一郎は、中々返ってこない反応に首を傾げる。

「詩音？」

「い！！たい…っ」

くしゃりと髪を握り潰し、左即頭部を押さえ、詩音は呻いた。

恭一郎は思わず掴んでいた服を離し、偏頭痛でも起きたのかと詩音の顔を覗き込む。余程の激痛なのか、彼は眉間に深い皺を刻みギリと奥歯を噛んでいた。

「詩音？どうした？」

「カノ…が！」

まさか今朝のカウンセリングが障ったのか、と不安になりながら問うと、詩音は肩に置かれた手を乱暴に払って駆け出した。

痛みに歪んでいた顔はそれとはまた別のものに蒼白になり、眼は確かな焦りを孕んでいる。

迷わず歌音の病室へ向かう詩音の後を、恭一郎は首を捻りながらも追った。

「カノ！？」

ボタンツと大きな音を立てて開いた扉に驚いたのは、花菜一人だった。

歌音は部屋の隅に逃れ、小さく蹲ってガタガタと震えている。

二人を見比べた詩音は、眼にあからさまな敵意を浮かべて花菜を睨みつけた。

「花菜、何もしてな」

「帰れつつただろ」

「お姉ちゃんと話してただけだもん！」

「話せるわけないだろ！」

「お兄ちゃんとは話したって先生が言った！！」

「俺としか話さないんだよ！！」

花菜は大きな目に見る見る涙を溜める。

姉の主治医だという先生は、「詩音と話せるようになったのだから、努力すれば君とも話してくれるようになる」と言ったから。

詩音はギリリと目元を歪めて花菜を睨みながら、部屋の隅で震える歌音の肩にそうっと手を置いた。びくりと細い身体が震え上がる。

「さわっ、やだ！！シノ！助けっ」

「カノ、シノだよ。シノだから、ちゃんと見て」

細い両腕を盾に更に隠れようと縮こまる歌音の顔を無理矢理持ち上げ、ぐっと額を寄せる。

花菜へ向けていた憎しみの色は消え、優しいながらも寂しさを滲ませる目が歌音の目の前にあった。

鏡を見るように同じ灰色の目。

「し…っ、しのん……」

「…そう、俺だよ」

わなわなと唇を戦慄かせ、幻の世界から現実の兄を見つけ出した歌音は声を上げて泣き始める。

宥めようと背を撫ぜる詩音に縋りついて泣く姿と声は、まるで親とはぐれた幼い子供のようだ。

息を切らせながら追いついた恭一郎はその様子に呆氣に取られ、花菜は遣る瀬無さそうに眉を歪めて拳を握り締めた。

「帰れよ。二度と来るな」

歌音の腹底からの泣き声は暫く続いたが、今はひくひくと喉を痙攣させる程度に治まっている。

ずっと穏やかに平行線を辿っていた感情が爆発した、と恭一郎は頭の中のカルテに書き込みながら、詩音と花菜へ目をやった。

彼は歌音と同じはずの実妹を見ているとは思えない冷たい目を彼女へ向けている。

花菜は拳を握り締めたまま、唇をぎゅっと噛み締めて双子の兄妹を見ている。

「花菜は、お姉ちゃんの邪魔なの…?」

「邪魔だよ。お前は、カノのものならなんでも欲しがらるだろ」

「もう、欲しがらないよ。お姉ちゃんがほんとに病氣なんて知らなかったんだもん！

知ってたら、知ってたら」

「お前は、母さんの大事な一人娘だろ？」

俺達には必要ないから、帰れよ」

にっこりと、優しい笑み。初めて向けられたその顔は、今まで向け

られたどの冷たい顔よりも一層冷たく思えた。

泣き出したのを抑え、花菜は乱暴に病室の扉を閉める。

家族が増えた事が単純に嬉しくて、一度に出来た兄姉が美人だった事が嬉しくて、自慢の一つになった事が本当に嬉しくて、歌音のようになれない事が物凄く悔しかった。

司郎とは違うタイプの新しいお兄ちゃんはお姉ちゃんとしか遊ばない。

お姉ちゃんにしか優しくしない。私だって同じ妹なのに、いつもイエスカノーの反応ばかり。

歌音のようになれば、お姉ちゃんのようにになれば、同じ妹として接してくれると思ったのに。

だから、歌音のものばかり欲しがった。欲しがる度に、手に入れる度に、歌音も詩音もどんどん遠ざかってばかり。

「お姉ちゃんの事、大好きだよ…」

二人は自分を見てくれないのだ。

二人は自分を家族だなんて思ってくれていないのだ。

特に歌音は、姉のくせに怯えた目で見える。

大好きで、大嫌いだ。お姉ちゃんなんていなくなればいい。

「自分が奪ってきたものへの復讐」などと、人が良くて自分の意思のない姉がそんな事を考えつくわけもないだろうけれど。

司郎という兄を奪い、詩音という兄を独占する歌音が、憎くて大嫌いで——けれどやはり、大好きだった。

「ほんとに、大好きだよ…」

もう二度と、こんな所へ来るものか。

花菜は寂しさを大きな瞳一杯に映したままそう決意し、療養棟を見

上げて呟くと、さっと背を向けた。

「歌音、俺、帰らないと…」

面会時間の終了規定時間は午後八時だ。三十分前にその時間は過ぎた。

夜勤の者との引継を終え帰る準備をしつかりと整えた恭一郎も、詩音と同じく困り果てた顔で歌音のベッド脇に立っていた。

「歌音、詩音ならまた明日来てくれるよ」

恭一郎の言葉にぶんぶんと首を振る。

「お」と、歌音が反応した事に恭一郎は眉を跳ねさせた。鼻筋まで布団を被った歌音は、右手でしっかりと詩音のコートを握り締めている。

専属モデルをしている雑誌が特集した人気ブランドの秋の新作だったコートにはベルトが沢山ついていて、歌音はそれの一つにぐるぐると手を巻きつけているのだ。

泣きじゃくった歌音は直後に眠ったのだが、二時間前に目を覚まして以降は詩音にベツタリだった。

「せんせー：俺、泊まってっても良いかなあ…」

「えゝゝ？なら俺も泊まるー！」

「…何で。」

ふざけてんじゃなくてさ。歌音、可哀想じゃん」

花菜によって恐怖という感情を爆発させた歌音は、微笑以外は無表情だった顔に変化を見せている。今はむっと眉を寄せ、縋るような

目で詩音を切々と見つめていた。

切っ掛けは恐怖というあまりよくないものではあったものの、ずっと閉ざしていた感情そのものを見せ始めているのだ。

少し幼児退行の毛色はあるものの、良い傾向も確かに出て来ている。

「あーあ、楽しそうだなあ、お泊り…」

「って事は、オッケ？」

「あーあーあーあー楽しそうだなあ！お泊りー！」

「先生は可愛い奥さんが待ってるんでしょ」

「はっ！そうだった！菜々ちゃん！」

って事で、平沢くんには伝えとくから、後で付添宿泊の手続きし
といてー」

「あ、はい。じゃあおやすみなさい」

パジャマパーティーに参加できない中学生のように唇を尖らせる恭一郎は、小石を蹴る真似をしながらぶっすりと唇を尖らせて「おやすみ」と恨めしそうな声を返した。

二度目のカウンセリングと称して核心をついた質問をされた時は肝が冷えたが、こうあっさりと宿泊を許してくれるのだから妙な疑いは晴れたのだろう。

とぼとぼと扉を閉める後姿に手を振り、詩音は軽く息を吐きながら歌音に目をやった。

「いて…くれる…？」

「うん。」

明日は仕事入ってるから、昼飯食ったら行くけど…今日はずっと一緒にいられる」

おずおずと問う歌音の目には遠慮という感情があった。

詩音は昨日の紗江子の言葉を思い出し、こういう事かと納得する。

歌音の破片と、四年ぶりに再会しているのだ。

コートのベルトに絡まっている手を解きながら腰を屈め、詩音は熱くなる涙腺を抑えて微笑った。

後は、面倒なああの医者をごにかして騙せれば、それで良い。

何をするでもなくただ手を繋いでぼんやりと過しながら、詩音はそんな事を考えていた。

自分でも、異常なのだと解っている。

常軌を逸した過保護だというわけでもなく、心配で堪らないからというわけでもない。

ただ、好きなのだ。

それを見抜こうとしている恭一郎が怖い。あの若さで何千という人間を診てきた医者之眼は、包み隠した嘘の皮をゆっくり確実に剥ごうとするのだ。

胸の中央で疼くこの感情を自覚してから、想いの正体が露見して引き離される事を恐れている。

どうやって騙そう。どうやれば、勘と理論を兼ね備えているあの医者を騙せるだろう。

「シノ…」

繋いだ手をそのままに身体を捻った歌音は、ぼんやりと壁を見つめる詩音の前髪に反対の手で触れた。

「私、死ねば良いって、思ったの…。

あの人…だけじゃなくて、母さんも、父さんも、花菜も、いなくなれば…良い…って、ずっと…」

ぽつぽつと喋る声に、詩音は壁から歌音へと視線を移した。
繋いだ手の肘をつき、上半身を浮かせて話す歌音は何処となく呆けた目をしている。

「腕、掴まれて、怖くなって、振り解いたら、あの人、落ちてった」
「歌音…？」

「あの人、謝ろうとしてた…でも、怖くて、怖くて、怖くて怖くて怖くて怖くて！！」

呆けていた目の中の感情が膨らみ、恐怖を思い出した声は震えながら音量を上げる。

落ちていく司郎の、呆気に取られた顔。

完全に落下するまで数秒しか掛からなかったはずなのに、数十分も掛かったかのように克明に脳裏に焼きついている。

頭が地面に着く間際、司郎は絶望を孕んだ目で自分を見た。

つもりがなくても、殺したのだ。この手で。この手が。

死ねば良いと思っていた、この手が、意識が。

「カノが殺したんじゃないよ」

震える妹の肩を抱き、詩音は至極優しい声で囁いた。

「あの中は、運が悪かっただけ。

自分の罪を自分で償っただけだから、カノは気に病まなくて良い。
だから、こんな所早く出よう。早く出て、二人に戻ろう」

胎の中から二人きりで、外へ出てもすぐに二人きりになった。

四年も離れ離れだったから、元々歪だった心はどんどんその歪を拡

げたような気がする。

「シノは、私がいなくて淋しかった…？」

「今も死にそうなくらい、淋しい」

「ごめんね…シノは、一人が嫌いなのにね…」

「…うん。」

だから、カノ、二人で先生を騙そう」

細い手を兄の白い頬に添えて、感情の一片を取り戻した妹は微笑う。縋りつくように抱き締めるように首に腕を回し、寄り添って目を閉じた。

一つだけ、在った。

自分のもの。

誰にも奪えない、自分だけのもの。

当然だというように、詩音は歌音の唇を食んだ。

甘いのに何処か苦いキスに身体の自由を奪われながら、歌音は一人微笑う。

詩音の心は、歌音のもの。

歌音の心は、詩音のもの。

何を奪われても、これだけは、互いが持つ誰にも奪われない唯一つの、もの。

詩と歌の音―6―

何も無い広い処に立っている。

広いというのは、ただ広いとだけ、実のところ周りを透明の硝子に覆われているだけだ。

それを、ただ只管に割る。我武者羅に割る。割れていく硝子の破片が両手に突き刺さり、入出の動作で皮膚が引き裂かれる。当然、血は噴き出るのだけれど不思議と痛くない。

だから、我武者羅になりながらも何処か漠然とした気持ちで只管硝子を割り続けるのだ。

硝子の向こうに立っている、歌音に触れるため。

歌音に近づくために、割れては再生する硝子を何十何百と割っていく。

白い肌が真っ赤になり足元に夥しい血が流れ、漸く一枚隔てた傍に近づいても、いつもその一枚が割れない。

歌音が呼んでいるのに。

まるで柔らかいプラスチックを殴るように、鈍い音だけが返ってくる。

歌音が割れないガラスに手をつけて、泣きながら呼んでいるのに。いつも。いつもいつもいつも。

びく、と肩を竦め、詩音は目を開けた。

狭いベッドに無理矢理入り、二人きりで眠るのは何年ぶりだろう。歌音が入院してからだから、四年ぶりか。

頭の芯が溶けるような口づけを繰り返しながらよく自制出来たものだ。溜息を吐き、身体を丸めて眠る歌音の肩口を撫でた。

ふと時計を見上げると未だ午前の七時前。

よく眠っているらしい歌音を起こさないよう、そうっとベッドを抜け出してはみたものの、彼女の手はしっかりと詩音の服を握り締めている。

四苦八苦しながら漸くその手を解くと、努力も虚しく歌音は薄っすらと目を開けた。

「…シノ、ありがと…」

「何、起きて早々」

くてりと身体の力を抜き、目だけ向ける歌音は心の底からリラックスしているようだ。

くすぐったい疼きに手の平を痺れさせながら、詩音は微かに頬を染めて問う。

今更のように汗を掻く手の平と、ドキドキと煩い心臓が邪魔だ。

「我慢、したでしょ…?」

「……恥ずかしいから、言うなよ。」

あーあ。風呂入って来る。平沢先生に許可貰ってくっから、お前まだ寝てろよ」

目を逸らしながら戸惑いがちに言われ、耳まで赤く染め上げた詩音はそっぽを向いた。

がしがしと頭を掻きながら、四、五日分の衣類を詰め込んでいたバッグを引っ掴む。昨日は此处ではなく、事務所に近い友人の家に泊

めてもらおう予定だったのだ。

羞恥心を隠したいのか、多少荒々しい仕草で部屋を出た詩音に、歌音は嬉しさと切なさにきゅうと胸を締め付けられた。

血の繋がった兄妹間での性交渉は異常で、常識外れなのだと思う。

それも、同じ顔の一卵性双生児同士でなど、他人に知られると気味悪がられるに違いない。

でも、寂しさを埋め合うのに、それは丁度良い行為だった。

それが持つ本来の意味も良く判っていない時分からその兆候はあり、初体験は多分人より数年早い。

歌音は詩音の事が好きだった。

兄としてか、それとも恋の相手としてかは未だよく判らない。

けれど、世界には自分達二人だけだと信じていて、それはこれから先もずっと変わらない。

互いを縛るのは、互いだけだからだ。

それでも詩音が誰かと付き合っていると知る度、心は醜い嫉妬の嵐に吹き荒れ、誰かに優しくしている詩音を見るとどうしようもない苛立ちが募って仕方なかった。

もやもやとした不快感を覚えながらも、歌音は知っている。

誰と付き合ってもそれは世間を欺くための道具でしかなく、感情を突き動かす心は歌音の手中にあるのだから、彼の“世渡り”に感情は無いのだ。

詩音は世渡りが上手だから、歌音はいつも彼の影でじっとしているしかない。それが心地良かったし、詩音は「それで良い」と言った。

四年前、まだ正常だった頃、

『男って下半身と心が別の生き物なんだってさ』

と、未確認物体を見たような目で言った詩音に、歌音は笑って『羨ましいな』と答えた。

詩音以外の誰かと時間を共にするなんて、まして身体を分け合うなんて、考えられない事だったから。

だから必死になってレイプされていたという事実だけは隠し通そうとしたのに。

胎の子の父親が誰なのかと、母親の夫は家族の前で敵将の首を取ったように取調べを始めた。

『言えないくらい恥ずかしい相手なのか』と晒いながら言われたから、復讐の意味も込めて父親の名前を言ってやった。
私を犯したのは、お前の死んだ息子だと。

身体を分け合うのは、同じ血と肉と骨を分けて出来た詩音だけだったはずなのに。

詩音の冷えた怒りの目を見た瞬間に、彼の手の中にある自分の心が砕けていくのが判った。

あの時司郎が生きていたら、間違いなく詩音が彼を殺しただろう。それを防げて、それだけは良かったのかもしれない。

この四年、ぼんやりとしていて思い出そうとしても思い出せなかった記憶が蘇り、歌音は微かに震える息を吐いた。

病室の冷えた空気が白く正体を現し、すぐに消える。

正常な振りをしなければ。

詩音の傍にいれば、何も考えなくて良い。詩音の思うようにしていれば、何も怖がらなくて良い。

詩音の傍は明るいから、何処よりも安全だ。

「おーとーまーりーたーのーしーかぁーったぁー??」

「うっざ、マジウザい」

「だあってさぁー、だあってさぁー！」

俺、歌音の主治医よ？それでも一応さぁ！」

熱い湯で寝惚けた意識を大分すっきりさせ病室へ戻る途中、詩音は恭一郎に捕まっていた。

肩口に顎を乗せ、耳元でダラダラと不平を言い続けている。

入院患者は少ないといえど療養棟の廊下、しかも朝っぱらからの言い合いはぎゃあぎゃああと余計に煩い。

二人は背後から近づく足音に気づかず――

「黙れヤブ医者」

背中をガッスリと蹴られた恭一郎は、詩音の背でぐったりと口を閉じた。

「よっちゃん…蹴りは酷いよ…ヤブ医者はまあ良いけどさぁ…」

「よっちゃん言うな名前負け」

「ぎゃー!!それ言うとな僕泣いちゃうよ?!」

よっちゃんは良いよ…平沢芳雄だから、振り仮名振っても七文字じゃない。

僕の振り仮名、一文字ずつ分けて書かなきゃなんない用紙だったら十三文字よ？よっちゃんのほぼ倍だよ!??」

「あーはいはい。黙れ名前コンプレックス。

お、略すとナマコンだな。生コン」

「ひっ、酷い…よっちゃんは僕の事嫌いなね…っ」

「ああ」

「!!!!」

午前七時三十分過ぎ。

引継ミーティングをしているかと思えば痴話喧嘩に精を出している医者二人を、出勤した紗江子は冷めた目で見つめていた。

「あ、おはよーサエちゃん。聞いてよよっちゃんったら酷いんだから!」

「おはようございます。田所さん」

「…おはようございます。

朝っぱらから何やってるんですか。お二人とも。昨日は異常無かつたんですか?」

はあ、と溜息を吐きながら紗江子も腰を下ろした。

大学時代の同期だったという全くタイプの違う二人は、これでも良い関係を築いているのだろう、とは思う。

クールな看護師に恭一郎は切なげな溜息を吐き、芳雄はすいっと夜間日誌を差し出した。

「異常は無かった。と、思うんだが」

「思う、とは?」

「うーん……自分で言うのも何だが、僕は恋愛事情に疎くてね」

「「は?」?」

確かに芳雄は仕事一筋生真面目人間だが。

眉を寄せ考え込んでいるような表情で唐突な言葉を吐いた彼に、二人は怪訝に満ちた声と目を返した。

「昨日、見回りの時に偶然見てしまったんだが…」

「はあ」

「何を?! 何々?! 幽霊!?!」

「新城先生、煩いですよ」

目をキラキラとさせて問う恭一郎に紗江子は軽く眉を寄せた。

「あの双子は、双子だよなあ?」

「そりゃあ、あんなに顔似てるんだし。あれで他人だったらドビツクリよこちら」

「だよなあ…いや、キスをしていたように見えたんだが」

「ふーむ」と難しげに考え込む芳雄の放った一言に紗江子は目玉を引ん剥き、恭一郎は「ぶっ」と飲んでいたお茶を噴き出した。

あのガキ…と机の下で悔しさに満ちる拳を握り締める恭一郎は、同僚二人の非難視線の対象である噴き出たお茶をそそくさと拭く。

「チュウしてたって、どんな感じで?」

「どんな感じと言われても…暗かったし、見間違いかもしれないだろう。」

何せ兄妹なんだし」

「良いから!」

チュウって感じ?それともブチュウって感じ?それとも」

「新城先生!! それ以上言うとかセクハラで訴えますよ?!」

平沢先生の見間違いですよ。確かにあの双子ちゃんは仲良いですけど、微笑ましい兄妹じゃないですか!」

非難轟々、バシンと頬を叩き挟まれた恭一郎はジンジンと痛む患部を押さえ、漸く黙った。

多分、詩音が歌音へ寄せる感情は自分の勘が訴える通り、兄の粹を完全に逸したものだろう。

二人が身を寄せていたという施設の文集。五歳の子供が綴ったとは思えない短文を、両頬の痛みに耐えながらふと思い出した。

——せかいに　ぼくらはふたりだけ。

うまれるとき　てをはなしたから　ぜったいはなさない。

せかいは　くらくて　ひろくて　せまいけど　かのんがいるから　あかるいんだよ——

歌音の作文は確か、『しのん　だいすき。ぱぼもだいすき。れいちゃんもだいすき』という物凄く短くも五歳児らしいものだった。

「兄妹で、恋愛感情なんて…もし本当だったら…」

「異常、だと思う？」

複雑そうに眉を寄せて言葉を呑んだ紗江子に、恭一郎は呑み込まれた続きの言葉を躊躇なく吐いた。

普段と変わらない柔和な表情で何の戸惑いもなく言い放たれ、益々複雑になった紗江子は散々迷ってから小さく首を縦に振る。

「そうかなあ。異常かなあ…」

恭一郎はぽつりと呟き、ペットボトルのお茶を飲んだ。

彼らには、彼らしかいなかったのだ。双子の世界の中に、互い以外存在していなかったのだ。

そんな環境を作ったのは彼らの父親であり、母親であり、新しく出来た家族。

恋愛感情と家族愛を擬似て重ねているのかもしれないが、詩音は多分はつきりとした感情を歌音に向けているだろう。

詩音が歌音を愛し、歌音が詩音を愛してしまった事。

正常であるはずの世界が正常でなかったのに、二人が持つ互いへの感情を異常と言えるのかどうか。
乾いていない喉へ無意味に茶を流し込んだところで、確たる答えが出るはずもなかった。

「先…生…、おはよう、ございます…。」

うろうろ、と視線を床に這わせてはいたが、「やつほー！おっはよー！」と飛び込んで来た恭一郎に、歌音はもぞもぞと朝の挨拶を返した。

まさかきちんとした返答があるとは思ってもいなかった恭一郎は、口をあんどりと開け目玉を引ん剥いて歌音を見つめている。

「しししし、かかかが、ここここ」

「……気持ち悪…っ」

「って何だその反応！」

うわあうわあ超ウレシー！歌音、おはよ！ってもっかい言ってみる？」

「お、おはようございます……」

「うふあー！しっ、幸せ…！」

今度はおずおずと顔を上げ、少し怯えながらもきちんと目を見て答えた。その反応に恭一郎はがくりと崩れ落ち、おいおいと肩を震わせて咽び泣いている。

歌音はドキドキと緊張しながらも、上手く正常な振りを出来た事に小さく息を吐いた。

入院している間の事はよく覚えていない。だから、恭一郎の事も、紗江子や夕実の事も実のところよく分からない。

「はい、歌音ちゃん朝ご飯ですよー」

「いった！サエちゃん今蹴ったでしょ！」

「え？何の事ですか？」

あ、詩音くんは朝ご飯どうする？食堂もう空いてるけど…こっちで食べる？」

「いやー…あっちで食べます。歌音、田所さんと話してみたいらしいし」

詩音の言葉に歌音を見ると、彼女は少し頬を染めてこくこくと頷いている。

愛らしい仕草にキュンと胸を鷲掴みにされ、紗江子はほくほくの笑顔で盆を机の上に置いた。

「皆、俺の事完全スルー…？」

まあ、良いよ。人生こんなもんだから…って事で詩音。飯食いに行くか！」

「は？！せ、先生仕事は？」

「良いの良いの。どうせ今日も暇だから」

それは医者としてどうなのだ。と思いつつ、詩音は仕方なく彼と共に食堂へ赴く事にした。

他の入院患者三名を知る限り思い出してみたが、内二人はカーテンで内部が分からないくらい完全に部屋を閉じ切っているため顔もよく分からない。

もう一人は歌音と同じような状態の男の子だ。確か、母親とその再婚相手に虐待されていたと聞いた事がある。身体中痣だらけでニコニコとしていて、その表情以外は棄ててしまったらしい。

余所者だという雰囲気と言葉に暴力が加わっていれば、二人揃ってあんな状態になったのだろうかと考えた事があったが、多分そう

る前にあの家に火を放っていただろう。
ぶすぶすと風呂吹き大根を箸先で刺しながら、詩音は思いついた結果を思い出しふと微笑った。

「なー…単刀直入に訊いても良い？」

「はあ…何をです？」

二人以外の人気はなく、狭い割りにガラリと広い印象を残す食堂で、恭一郎は声を潜めて言った。
チャラチャラとした印象の顔が真剣そのもので、詩音は訝しげに眉を顰める。

「あのさ、異常だと思ってる？」

「…はあ？」

「好きなんだろ？歌音の事」

甘い味付けに胸が焼けるのか、それともまた見破られそうだからか。詩音は言葉にして返す事が出来ず、思わず恭一郎を睨みつけていた。

「独占欲の延長線上で恋愛感情が芽生えたのか、それとも環境のせいか。

どう思う？自分の感情。

それを隠さなきゃならない世の中だから広いくせに狭くて暗いのか？」

「……………」

「歌音もお前が好きなんだろ？」

俺は別に異常とは思っちゃいないんだけど、さ」

食べる事を止め、むすりとした目で斜め横を睨みつけていた詩音の片耳は、恭一郎の一言にぴくりと動いた。

異常じゃない？

この、醜くて純粋な想いの塊と、どうしようもない欲求が。

「先生は、俺たちが十三でセックスをしたって知っても…異常じゃないと思いますか」

ぶっと噴き出しそうになるのを押さえ、恭一郎は目を瞬くと「それが？」と言いたげな表情を取り繕った。

思わぬ告白に、背中には冷や汗が流れている。

「…最初は、淋しくて堪らなかったから。

でも、俺は…一線を越える前から好きだった。

世界はどんどん広がっていくのに、歌音がいないと意味なんて無いし…何も感じない。

歌音は双子の妹で、異常だって解ってるから、これは勘違いだっ
て思おうとしたけど…」

結局は無理だった。

だって、症状が同じなのだ。

誰かを好きになったという友人達と。

歌音を見ていると、ドキドキと早鳴る心臓に押された心が浮ついて
落ち着かなくなる。

頭の前から足の先まで痺れて、おかしくなってしまうようになる。

同じ家について同じ学校に通って同じ空間にいるのに、もっともつと
歌音の心の奥底まで識りたくなる。

嫉妬に心は荒れるし、よく判らない温もりに安堵もする。

表裏一体の感情に、人間は恋という名前を与えた。

ただ、その相手が血を分けた双子の妹だっただけ。

だけどそれは、殊更異常な事。識っている。解っている。
でも、この想いだけはどうしようもないのだ。

「だから、束縛したいの？」

「…自分でも、どうすれば良いのか判らない。

束縛もしたいし、あいつが思っただけに感じる通りに生きれたら良いとも思ってる」

「でも、歌音が自分の意思で動き始めたら、棄てられるんじゃないかって、怖いんだろ？」

詩音は不思議そうな目で恭一郎を見つめた。それから、小さく頷く。白い頬が微かに赤らんでいた。

「何で判るんだって思っただろ」

「……うん」

「俺は人生の先輩よ？っていうか俺も似たような道通ったし」

「え？」

「俺の奥さんね、従妹なの。」

五つ下だからそりゃー小さい頃から可愛がってね。苛める奴は片っ端からぶん殴ってた。

完全に妹と同じ感覚で接してたから、自分の気持ちに気づいた時は焦ったよ。

自分が気持ち悪かったしね。顔も少しは似てるわ血は繋がってるわ妹同然だったわで」

はあーっと溜息を吐きながら言う恭一郎の表情に嘘は見当たらず、朝食を忘れ去った詩音は真剣な目で彼を見つめた。

恭一郎は十年前を振り返っているのか、目を細めている。

「でも…好きなんだよな。頭ぶっ壊れそうで、まともに物事考えられなくなるくらい。

だから、何となくだけど、解るよ。そりゃあ、俺はお前より楽な

道だったかもしれないけど。

だからまあ、医者としてって言うよりは兄貴分として、詩音が自分の気持ちを俺に認めてくれたのが嬉しいの。誰かに言うと、ほんの少しでも軽くなるだろ？ 悶々としてるもんがさ」

ニツと歯を見せて笑う恭一郎に、詩音はおずおずと目線を下げた。ほんの一瞬でも頼れる兄貴分的な感情を抱いてしまった自分が恥ずかしい。

どう反応して良いか解らない詩音が黙々と白米を突いていると、満足そうに笑う恭一郎のポケットからピーピーという呼び出し音が鳴った。

「うお、ちょっと行ってくるわ。」

あ、歌音の部屋じゃないから、心配しないでゆっくり食べな」

小さな電子器具をポケットに戻すと、恭一郎は早足で食堂を出た。詩音はすっかり冷えてしまった白飯の一塊を二度三度箸で転がし、持ち上げて口に含む。

「歌音が、いなくなったら……」

もし、もしも、歌音が自分の世界を広げ、もしも、好きな人を見つけてしまったら。

「俺…どうなるんだろう……」

考え、口にするだけでもぞつとする。

時々デパートで見かける、聞き分けのない子供のように「嫌だ」という言葉が溢れて止まらなかった。

本当にどうなるんだろう。

今以上に狂って、きっと何を仕出かすか、判らない。
笑って認めるなんて、絶対に出来ない。

「壊れる…かな…」

ぽつりと眩き、ふと微笑った。

壊れた方が、案外楽なのかもしれない。

そう思いつくと、可笑しくて、ほんの少しだけ哀しかった。

詩と歌の音―7―

「はいよー、タッチ交代！」

歌音ちゃん、診察の時間ですよー」

「体温等、異常ありません。状態も落ち着いています」

絵本を数冊広げて小さな声で紗江子と話す歌音に、恭一郎は晴れ晴れとした声をかけた。

呼び出しのあった患者に付いて二時間は経っている。詩音はもう仕事へ行ってしまったようだ。

紗江子からカルテを受け取り、報告に軽く頷きながら歌音の前に腰掛ける。

「調子はどう？」

「良い…と、思います…」

「うんうん。いきなりで吃驚したけど、大分回復してくれて良かった。

あ、それ、可愛いねえ」

「あ…はい…」

三日月のネックレスを指して笑う恭一郎に、歌音も照れくさそうな微笑を返した。

ただ浮かんでいるだけではない、感情を伴ったそれにつられて恭一郎も微笑む。

「詩音に貰ったの？」

「はい…。」

四年、くらい前に…一度だけ、欲しいって言った事があって…」

特に高価なものではなかったが、露天商で売っていたものだから、同じものを見つけるのは苦労しただろう。

詩音は歌音にとって太陽のような存在で、歌音は自分を月のようなものだと思っている。だから、三日月に寄り添う小さな太陽が象られた珍しい形のこれに惹かれた。

「優しいね、詩音は」

「はい…」

「詩音の事、好き？」

「え…」

「詩音は、君の事好きだよ。」

妹っていう簡単な括りじゃ整理できないくらい、真剣に君の事を愛してる」

かあっと、歌音の白い頬が赤くなる。

慌てて周囲を見渡すが、室内には恭一郎と自分以外の人影はない。

突然言い当てられた常識外れの感情と関係に、歌音はうろろと視線を彷徨わせた。

「詩音にも言ったけど、俺は君達の関係を異常だとは思わない。」

人間が勝手に作った法律と、植えつけられた道徳観念に感情まで奪われる筋合いは無いでしょ？」

俺は味方だ、という意味合いを強く含めた口調で言った。

歌音はぎゅうと手を握り締め、うろろと視線を彷徨わせながら俯

いている。

かなりの沈黙の後、微かに震える唇を漸く開いた。

「…でも、世間は、許してくれません…。」

私が、どんなに、シノを愛しても…結婚なんて、出来ないし」

「女の子だねえ、歌音は」

「…え？」

「いやね、憧れてるのかなあと思ってさ。ウェディングドレスとか。じゃなくても、結婚は確かに一番手っ取り早い独占の形だしね。」

何かあつたらまず配偶者に連絡行uksi、時間だって他の誰よりも長く共有してられる。

でもね、一枚の紙とそれに纏わりつく法律と、君達の世界って、そんなに狭いもの？」

恭一郎は穏やかな目をしている。そこに嘘はない。

けれど、その目に言いようのない焦燥を感じ、歌音は薄く唇を開いたまま言葉を吞んだ。

こんなシュミレーションはしていない。

ただ問いかけに答え、正常であるふりをしていれば良いものだと思っていたのに。

私達の世界はどんなものだった…？

言葉を吞んだまま自問してみる。

終わりの見えない白黒の、灰色にも見えるただっ広いステージを歩き続けてきた。

その途中で景色や季節を覚え、感情を拾い集め、手に入れたものをパッチワークのように継ぎ足して継ぎ足して、歌音と詩音が出来上がった。

そこには法律も道徳も倫理もなく、ただ二人のルールのみが存在している。

『手を離さない』

それが、二人のルールだ。

繋いだまま、絶対に離さない。母胎にいた頃からずっと寄り添っていた。

世の中に引き摺り出される時、触れていた身体と手が離れ――だから、もう二度と離さない。

私達の世界には、二人だけだ。

二人だけのはずだった。

「歌音？」

「好き：好きです、好きなの！駄目って解ってる！」

お母さんは私達を気味悪いって言った！

お父さんになった人も気味悪いって言った！！

お前達は零人に似すぎてるから気持ち悪いって！でも私はシノが大好きなの！

シノが誰かに奪られたら：っ、私、だから！パパがつ、カノはシノで、シノはカノで、二人はパパだって：っ」

「歌音？歌音！」

膨大な記憶と感情の群が、決壊して押し寄せてくる。

その波に飲み込まれ、歌音は立ち上がって頭を抱えた。

これは、怖いのだろうか。髪と指の向こうに見えるパパは、優しい顔で笑っている。

「歌音！！！」

支離滅裂に叫ぶ歌音の手を取り、恭一郎は怒声にも似た声で呼び掛

けた。

歌音は継る対象を求め、怯え竦んだような目を向ける。

「パパは私達を愛してたの…？」

ママへの復讐に使っただけなの！？

詩音は私を愛してくれてるの？！私がつ、こんなに、愛してるのに……っ。

シノが、いないと、私は歌音じゃなくなるのに……っ」

白衣の胸倉を掴み、歌音は泣き叫んだ。

恐怖ではなく、不安だ。絶望に近い不安を感じ、歌音は泣きじゃくりながら恭一郎に継りついた。

誰かに助けてもらいたい。詩音に、大丈夫だと微笑って言ってもらいたい。

結婚が、世の中を渡る上での合理的で合法的な手段である事も知っている。

だから、兄妹であるこの血が憎いのだ。そっくりな顔も、仕草も、

片割れの思考が判る能力も。

世渡りが上手で道具を巧みに扱う詩音の心を、この手から誰かに奪われたら。

誰のものでもない自分だけの、たった一つのものを。

確かに、暮野零人の日記をそのまま双子に見せるわけにはいかないだろう。

二人が完全に落ち着くのは、一年後か十年後か、もしかしたら一生見せずに終わるかもしれない。

重度の鬱病にかかっていたと思われる暮野零人の日記は、確かに家族への愛情が溢れていた。

けれどその途中から、特に妻の不倫を知ってから愛憎が入り乱れ、

今の歌音のように支離滅裂で、日本人夫婦に引き取られるまでの孤児時代のトラウマや孤独感が目立ち始めるようになった。

『詩音と歌音は僕の生き写しだから、圭子は二人を見る度に怖ろしくて堪らなくなるだろう』

そんな一文が占めるようになっていた。

元々躁鬱の激しい性格が感情のせめぎあいになえ切れず、自殺という道を選んだのだろう。

喉と身体を痙攣させて咽ぶ歌音の背を落ち着けるように軽く叩きながら、恭一郎は軽く息を吐いた。

感情も記憶も、その殆どが歌音の元へ還って来た。

依存し合って生きてきたのだろう二人が、その関係を変えられるかと問われれば。

その可能性は限りなくゼロに近い。

「し・の・んぐー!!」

「うわっ、しゃ、社長…今日はまた物凄い恰好ですね…」

「まあね。今朝見た夢がキャンディとピクニックに出掛けるって夢だったから。」

「どう？全身キャンディワールド風ファッションで決めてみたの。っておいコラ」

バシッという音が聞こえてきそうなウィンクに軽く笑いつつ、撮影用の衣装に着替えた詩音は溜息を吐いた途端、口淋しく啜っていた煙草をバシンと叩き落とされる。

「二年早いっつーの。あんたまだ止めてなかったの？」

知名度あるって、好い加減自覚なさい」

「ふあーい」

「全く。で？部屋決めたの？卒業前に出るんでしょ、あの家」

「大体は決まっています。」

ただほら、未成年だから親の了承とか得なきゃいけないでしょ。

それが面倒でっていうか嫌で」

「あら、保証人だったらアタシになってあげるわよ？」

「マジっすか？やっりー」

「そのかわりい」

バシバシバシと瞬いて、ジェーンはにんまりと笑う。

何か企んでいると分かり易過ぎるほど顔に出して笑まれ、詩音は思わず、と身を引いた。

「歌音、復帰させてよぉ」

「……だから、まだ退院の目処も経ってませんってば」

「ううん解ってるわよお！でも退院したら一緒に住むんでしょ？」

あんな家に置いとけるわけないし。

それに、歌音が復帰しても良いって言うてくれたらで良いから」

「はあ…まあ、あいつがやりたいってんなら、良いですけど、別に…」

常軌を逸しているジェーンだけが、二人の家庭の内情と関係を知っている。

男でもなく女でもないと言い張る彼は、二人の強力な味方だ。

幼い頃から面倒を見てもらっていたため、歌音が自分以外で唯一懐いている相手でもある。

「はい、シオン君、行けるー？」

「あ、今行きますー！」

「ま、軽く考えといてネ、詩音」

「はいはい言っときます。ていうか見舞い来て下さいよ。」

カノ、大分回復したから。社長来たら喜びますよ！」

手を振ってセットへ走って行く詩音に、ジェーンは「イヤーン」と気持ちの悪い声を上げて身体をくねらせた。

周囲の人間があまりの気味悪さにススと遠ざかったが、彼は何の反応も見せず、巨体に似合わぬ軽やかなスキップでスタジオを後にした。

日本人離れた双子の噂話が持ち上がったのは、十二年も前の事だ。身体に不釣り合いな大きなランドセルを背負って、いつも手を繋いで登下校しているらしい。

先見の目というよりは本能的な何かを感じ取ったジェーンは、「噂ですよ?!」と制止する秘書を無視して現場へ急行した。

目撃情報の多い箇所を一週間張り込み続けて、一度警察に通報された事もある。

が、双子を目の当たりにしたジェーンは、諦めないで良かったとガッツポーズを取った。

くりくりと大きくそっくりな瞳は灰色で、髪はさらさら直毛の薄い茶髪。白い肌もさる事ながら、幼いながらに二人の顔立ちは完成された綺麗なものだった。

そっくり同じに綺麗な顔が二つあるのだから、ちょっとした畏怖めいたものも感じたが。

母親も父親も二人には似ておらず、あろう事か自分の子供だというのに大した興味も無いようだった。

それから少しして、彼らの置かれた状況を知ったのだが。

事情を知ってから数日後、幼い歌音は首から垂らした巾着袋を大事そうに開き、実父の写真を見せてくれた。

あの時の嬉しそうで幸せそうな顔と言ったら、十二年経った今でも忘れられない。

優雅な仕草でワイングラスを傾け、当時の歌音の笑顔を思い出したジェーンはふと微笑った。

歌音が入院してしまってから、詩音は極端に仕事を減らしている。専属モデルをしている雑誌二社と、あとはどうしても断り切れなかった依頼主の仕事のみ。

それ以外は高校生らしいバイトを二つ掛け持ち、空いている時間には妹の病院へ。

よく身体を壊さなかったものだ。

「お、お待たせしました……っていうか、ほんと目立ちますよその恰好」

「あらあ、意外に早かったのね。恭ちゃん」

「まあ、ウチは暇なエリアですからね。」

で、今日はどうしたんです？あ、生一つ」

隠れ家風のバー、『狸の居眠り』の一席に訪れた待ち人に、ジェーンはひらひらと手を振った。

ド派手なピンククロリータで身を包む彼に、恭一郎は度肝を抜かれながらも座る。

感情を手離した歌音を恭一郎に紹介したのは、双子の両親ではなくジェーンだ。

「経過をあんたの口から聞きたくてね。」

大分戻ったって事は、詩音から聞いたわ」

「ええ、経過は良好ですよ。一昨日からね。」

でも何分、ゆっくり取り戻すつもりだった記憶を急激に思い出しちゃったもんだから、多少錯乱気味ではありますけど…」

「あの子、本当に大丈夫なの？」

「歌音は…、彼女自身が思っているより、我々が思っているよりもずっと強い子ですよ。」

個人的に心配なのは、どっちかっていうと詩音の方で」

「そうねえ…小さい頃から固執してたから。」

それに男だから、余計に重いし一途だし…依存度も強いんでしょ
うねえ」

ふーっと紫煙を吐き出し、ワイングラスを傾ける。

運ばれてきた生ビールに口をつけ、恭一郎はうんうんと頷いた。

「恭ちゃんは病氣の一環としてみてるの？」

「何をです？」

「とぼけちゃって。知ってるんでしょ？あの子達の、関係。」

詩音から聞いたんだから」

ふふ、と妖艶に微笑うジェーンに気圧されながら、恭一郎は「何だよー」と唇を尖らせた。

四年かかって漸く、ほんの僅かなものでも信頼関係を築けたと思っていたのに、ジェーンには包み隠さず報告しているのかと思うと何となく淋しくなる。きっと自分を取り戻した歌音の懐きようも相当なものだろう。

見舞いには絶対来るな…という怪電波を発しながら、恭一郎は頷いた。

「聞きましたよ。想い合ってる事も、身体の関係がある事も」

「で？医者としてどう思うの？」

「難しいところですよ。人間の感情ってもんは。

個人が当然だと思ってるならそれは異常じゃなくて正常なんだし。

医者じゃない意見だったら、俺は別に良いんじゃないかと思っ
ますしね。

医者としてって言われたら：まあ、互いに依存し合ってるから、
どっちかがいなくなった時にヤバイんじゃないかなあ：と、思っ
てはいます」

「何よ。相変わらずハッキリしない男ねえ：」

「う：じゃ、じゃあ山梨さんはどう思うんです？」

二人が小さい頃から親同然に面倒見てたんでしょ？」

「そうねえ：」

ふう、と溜息と共に紫煙を吐き出し、ジェーンは目を伏せた。長い
付け睫が間接照明に照らされて濃い陰を落としている。

呟いて以降、黙々としている彼に、恭一郎はやきもきしながらビー
ルを飲んだ。

「アタシは、普通に恋愛してきたんだと思うわよ。

詩音が歌音に恋してますビームを向け始めたのは八歳くらいかし
ら。歌音はその二年後くらい。

元々ただのお兄ちゃんにしてはかなり過保護だったし、甘やか
してたとは思うけど：その位から詩音の目は完全に兄って感じのも
のじゃなかったわね」

短くなった煙草を灰皿に押しつけて潰す。

会った当初から仲の良い兄妹だった。どうやら不審人物として学校
に触れが回っていたらしい自分から歌音を守ろうと、果敢にも飛び
蹴りを食らわしたような子供だ。

きつと自我が芽生えた頃から、歌音が可愛くて仕方なかったのだろ

う。

「詩音から直接、歌音を好きになっちゃったって聞いたのは、十三歳くらいかしらね。」

セックスしたって、いきなり告白されたのよアタシ。

どうしてしたの？って訊いたら、何て言ったと思う？」

「へ？さ、さあ…」

「淋しくって堪らなかった、って言ったのよ。」

それと、歌音と他人だって漸く判って嬉しかったって」

「他人？」

「そ。他人。同じ顔で同じ体型でおんなじような名前で。」

二人揃って時々判らなくなるんだそうよ。どっちがどっちなんだろうって。

僕は詩音？それとも歌音？私は歌音？それとも詩音？

セックスをして初めて判ったそうよ。遺伝子は同じだけど、詩音と歌音は別人。それが解って、淋しくなくなった。やっぱり僕の世界には歌音しかないけど、それで十分だ…ってね」

物思いに耽るジェーンの溜息を聞きながら、恭一郎はむうつと黙り込む。

仮定を一つ思いつき、煙草に火をつけるジェーンに目をやった。

「あの二人、小さい頃同じ恰好をしてたりしてました？」

「みたいね。施設に預けられた頃は髪型も服も同じだったみたいだから。」

混乱を防ぐために歌音が髪を伸ばすようになったって詩音が言っていたわ」

「子供特有の悪戯をしたり…とか」

「例えば？」

大人とコミュニケーションを取れるようになった子供は、必ずといって良いほど悪戯という遊びを覚える。

自分に瓜二つの外見を持つ兄弟がいたとしたら何をしたらだろうと考える、

「わざと服を入れ替えたりとか、傍目にどっちがどっちか判んなくなるような悪戯」

そう言うと、ジェーンはパチパチと瞬いた後ニツと目を細めた。

「さすがね。その遊び、かなりハマってたみたいよ」

「…やっぱねえ。俺でもやっちゃいますよ、多分」

「それがどうかしたの？」

子供が考えたただの悪戯、遊びだ。

普通の、極一般的な家庭環境だったなら、それで済んだだろう。

「自己暗示ですよ。彼らにとって心を許せるのは片割れだけだったでしょう？」

無意識に自分は歌音だ詩音だって思い込みながら変装して、大人をからかっていたはずです。

子供のただの遊びが、心の中では暗示になってしまっていて、成長しても時々自分が何者なのか判らなくなる。恐らくそういう状態でしょう。

それに恋心が重なって、他人であれば良いのという願望が生まれる。

だから二人は別人という言葉ではなく、他人という言葉を使ったんです」

恭一郎の説明に、ジェーンは「ああ…」と納得した面持ちで何度も

小さく頷いた。

普段ヘラヘラしているために医者である事を疑ってしまうが、話を聞いただけで納得できる推理を言っただけのけるとは。

「確かに、他人って言葉はおかしいわね。別人ならわかるけど」

「そうです。血を分けた兄妹で他人という言葉は、本来ならおかしいはずです。

でも彼らの場合、そこに許されない感情があったから、その言葉に固執したんでしょう」

そっくり同じ顔で、違いは髪を結っているかズボンを履いているか、それだけ。

いつも手を繋いでいて、申し合わせたように不意に目を合わせて笑い合う。

二人が子供服のモデルを始めた頃、歌音の相手役が熱を出し、急遽詩音が女の子用の服を着る事になった。

『あのね、私達を見分けられたのはね』

『パパだけだったんだよ。ママは間違えたのに』

『パパは私達が騙してもね』

『パパは騙されなかったんだよ』

歌音と同じような髪形のウィッグをつけ色違いの服を着たその姿は、撮影現場のスタッフ全員を混乱に陥らせるほど全く同じで、「ああーっ、どっちがカノトちゃんだったっけ?!」と慌てふためくメイクスタッフに、二人はそう言った。

よく似た声で、まるで打ち合わせでもしたかのようにスラスラと。

撮影が無事終わり、双子を着替えさせようとジェーンが近づくと、二人はスタジオの隅で向かい合って座り込み、腕を伸ばしてぴたり

と手の平を合わせていた。

鏡の中の世界、もしくは絵の中の幻想。

二人は同じ瞳でじっと見つめ合い、やはり申し合わせたように同時に唇を開いた。

『歌音…?』

『詩音…?』

魅入られたように、食い入るように、じっと互いの眼を見つめ――
ぽつりと、囁いた。

服は色違いだったのに。

よく見れば地毛とウィッグの見分けなどつくのに。

その時、ジェーンはどちらがどちらだったのか、全く判らなかった。

「山梨さん？」

頬杖をつくジェーンは、テーブルに視線を落としたまま暫く呼び掛けに答えなかった。

煙草のロゴまでジワジワと燃え始め、恭一郎は慌ててジェーンの腕を揺する。

振動にはっと目を開け、ジェーンは「ホホホ」と笑顔を取り繕いながら煙草を消した。

『ねえ、どっちがどっち?』

悪戯に引つかかる大人をからかって遊ぶ。

どっちがどっちか、本当に判っていなかったのは、自分達だと知ら

ないままに。

詩と歌の音―8―

詩音を初めて怖いと思った日は、同時に激しい愛しさを覚えた日でもある。

兄は、別人だったのだ。

たまに判らなくなる。他人が聞いたら鼻で笑われるような、微かな不安。

「僕は、歌音？」

「私は、詩音？」

本当に時々、二人で判らなくなっていた。

髪のがさが違うだけで、身体の細さが違うだけで、後は全部同じだと思っていた。

考えている事が判るから、頭の中身さえも同じなんじゃないかと。

「ああ：他人だったんだね、俺達」

保健の授業で習ったセックスという言葉の中身を知って、詩音は呟いた。

何でもない事を言うように、けれど、声に嬉しさを混ぜて。

「他人だったんだね…」

歌音は身体の痛みさえも甘く感じながら、トロトロと眠そうな目と声で復唱した。

「一人で…同じ人間だったら、出来ないよね」

詩音は歌音の指に指を絡めながらくすくすと微笑った。

嬉しそうに、楽しそうに、擦ったような笑顔で。

同じ笑顔で、歌音も頷いた。

その行為が何のためのものかを知っていて、それでも流れるように墜ちた暗闇の淵は、何にも替えがたい答えを与えてくれた。

他人、別人。

違う意味の二つの似た言葉は、何よりも安堵できる、確かな間柄。

初めて身体を重ねた日の夢を見た。

歌音は起き上がり、ぼんやりとした頭で詩音を想う。

確かな答えを手に入れた翌年のあの日、あの夜、詩音に告白すれば良かっただろうか。

そうすれば、彼は義兄を葬る以外の道を見つけてくれただろうか。

でも、言えるはずもなかった。大好きで堪らない人に、「私レイプされたの」などと、どんな顔でどんな声で告げろと言うのだ。

言えば、詩音は間違いなく司郎を殺しただろう。じわじわと、痛めつけながら。

自分のせいで詩音の手が汚れてしまうのは、自分の手が汚れるより嫌だ。

母はどうして、自分達を引き取ったのか。

どうせ愛してもらえないのなら、施設の優しい職員に囲まれていた

方が良かった。

あの人達の方がよっぽど本物らしい愛をくれたのに。

ダイニングの双子の席は大きなテーブルの端。

リビングでは端に追いやられ、団欒する一家をぼんやりと見つめた。学校のイベントは、共に家族から離れて行動した。

だから、小学校時代までは苦痛だった。ジェーンが現れて、モデル業に誘ってくれた事が唯一の逃避場所だった。

二人を真正面から捉え、理解し、一緒に受け止めてくれる唯一の大人。

「ハロー、歌音っ。会いに来ちゃった」

だから、切ない夢を見たその日の午後、がらりと開いた扉の隙間から派手なアイメイクのウィンクを受けた歌音は、心の底から歓声を上げる事が出来た。

「ジェーン、ジェーン、会いたかった!」

「あらあ、アタシもよ!

もうもうもう、あんたまた痩せちゃって…ちゃんと食べてるの? 好き嫌いしてない?

やだ、詩音ったらメイク道具も持ってきてくれてないの? 女の子はお化粧が命なのにねえ」

屈強な腕にギュウウと抱き締められ、歌音は身を振りながら擦った。そんな声で笑う。

その様子を、恭一郎は僅かに開けた扉の隙間からジイイと覗いていた。

「：何してるんですか、新城先生」

「ちよつと、サエちゃんも見てよ：あの二人。歌音がキャツキヤ言ってるんだよ？」

「親同然の方なんでしょう？詩音君も懐きようが半端じゃないって言っていましたよ」

「あーあ：俺も女装すれば警戒心解いてもらえるのかなあ……」

「……。あ、鮫島さん。斉藤さんの様子どうだった？」

くすんと鼻を鳴らしたがあっさりと無視をされ、恭一郎は下唇を突き出して「ふんだ」と呟いた。

カウンセリング時の歌音の様子は、はっきりとした受け答えが見止められるが何処となく不自然な箇所が多い。答えに数秒要する事もあり、どうやら自然であるようにと務めているようだ。

それはイコール、主治医である自分に対して警戒心に満ち満ちているという事。

「きゃーっ」と、至極嬉しそうな悲鳴が漏れ聞こえ、恭一郎は余計に面白くなかった。

「あれ？先生不細工な顔してどうしたんです？」

「不細工は余計じゃない！テエメエー、あんだけ山梨さん連れて来んなったじゃない？」

「ああん？」と斜め下から睨み上げる恭一郎に「ははは」と詩音は肩を竦めて笑う。

「見せ付けられるから嫌なんでしょ？それは医者としてどうなのかなあ」

「ふんっ！医者だってヤキモチ妬くわよ！

何？君のその余裕は何？ジェーンに歌音取られても知らないんだ

からっ」

ブリッとぶりっ子の演技で腰をくねらせる恭一郎は、詩音を試してみようと内心で謀りながら言った。

詩音はきょとんと目を丸くし、小さく唇を開け、

「ふっ」

と、数秒の間を置いて嘖き出した。

「何：何でそこでも可笑しそうに笑うんだよ」

「だ、だって、社長が歌音取るって…っ」

「…君、もしかして、本気で笑ってない…?」

「せんせ、面白い人って思ってたけどさ!」

けらけらと身を折って笑う詩音を見た紗江子と夕実は、「おおー」

と小さな歓声を上げながら恭一郎に向かってパチパチと手を打った。

歌音もそうだが、詩音もこの四年、心底から笑っていると思える顔を見せた事がない。

恭一郎の意図には掠ってもいないが、本当の笑顔を引き出したらしい医師に、看護師二人はある種の尊敬の眼差しを向けた。

一頻り笑った詩音は涙を拭いながら深く息を吐き、紗江子と夕実がナースステーションに戻って行くのを見止めて表情を元に戻す。

いつも他人の前で浮かべる、柔和でバリアに満ちた笑顔。

「先生、さっきの、カマかけたんでしょ?」

「バレた?」

「カウンセリング受けて俺が倒れた日…。」

あんま覚えてないけど、多分、先生、裏っ側の俺、引き出したんでしょ?」

僅かに目を伏せ、視線を床に逸らして言う。病室からは相変わらず、楽しそうな歌音の笑い声が聞こえてくる。それが、心地良い。

「やっぱり、自覚してるんだな」

「参ったなあ…あれ、歌音の前でしか出さないようにしてるんだけど…」

「あんなヤバイ顔すんの？歌音の前で」

「ヤバイ顔？」

獲物を狙う猫が瞳孔を開くような、それでいて空虚な目。

空虚なくせに、自分達の世界以外は否定する憎しみに満ちた、澄みながら淀む眼。

淡々と進めた連想ゲームの時の様子を思い出し、恭一郎は微かに身震いした。

「お前、連想ゲームの時、歌音を取る相手って言葉に「殺す」って答えたんだよ」

またあの詩音が出るかもしれないと思いながらも、詩音が気絶する切っ掛けになった掛け合いの内容を告げる。

詩音はパチパチと瞬き、「ああ…」と呟いて微笑った。

「それ、地の俺だ。裏じゃない」

あの時とよく似た笑顔で、詩音は言った。

「遅かったわねえ、詩音」

「あー、さっきそこで新城先生に捕まっちゃって」

「まーた恭ちゃんに口説かれてたんでしょ。

ほら歌音、詩音が来たわよ。いつまで笑ってんのこの子は」

「何、そんな可笑しいの？」

「あのねあのね、ジェーンがね！あーっ、もう駄目！」

「やっだ、完全にハマっちゃってるわこの子」

「何やったんですか社長」

和氣藹々と、いつになく盛り上がる病室を背に、恭一郎は立ち尽くしていた。

あれが、地？いや、地ならば、自分の想定に間違いはない。

他人に見せる柔和な貌と、歌音だけに見せる嘘の無い貌と、その二つを綺麗に混同した素顔。

とすると、詩音は正常なのだろうか。いいや、正常であるはずがない。

「詩音…」

わっと湧く室内の閉じた扉を振り返り、恭一郎は呟いた。

彼の妹への依存はきつと治せない。精神科医としての自信は、さっきの一言で打ち崩れた。

詩音はあれで正常なのだ。だから、異常であったとしても社会生活に支障など感じていないし、よっぽど注意していないと周囲もそれに気づかない。

けれど、歌音がもし、詩音の手から離れたり、いなくなったとしたら。

彼は恐らく――。

「でも、随分元気そうでホントに安心したわ」

「シノがいてくれたから」

ぎゅっと詩音の手を握り、歌音はふわりと微笑った。

恋をしている少女特有のキラキラとした閃光、合わせて恥ずかしそうにそっぽを向く同じ状態の少年。

眩し過ぎる光景に、ジェーンは「ああ…っ」とよろめいて見せた後、その逞しい腕で二人を力強く抱き締めた。

「良い事？世間に負けちゃ駄目。」

そりゃ、実の兄妹で恋愛ってのは世の中の常識としちゃオカシイわよ。

でもね、それに負けちゃ駄目よ。あんた達は、負けちゃ駄目。アタシは負けたから、同じ想いをあんた達に感じて欲しくないの」

バシバシバシッと瞬き、ジェーンはしっかりと二人の手を握り締めた。

いつになく真剣な様子に、二人は神妙に頷く。

「アタシは何度も恋をしたけど、中でも誰にも替えられないくらい愛した人がいるの。」

その人と手を繋いで歩いただけで白い目で見られるのよ。その人、男だったから。

同棲もしたけど、毎日毎日嫌がらせの手紙とか電話とか、酷い時には投石だってあった。

気持ち悪いから出て行けなんてのは聞きなれちゃったわ。この人がいれば、何でも耐えられるって思ってたし。

…でも、あの人は耐えられなかった。女の恋人を作って、結婚しちゃったわ。今じゃ三人も子供がいるそうよ」

歌音は思わずジェーンの手を握り返していた。

辛いだろうと思つての咄嗟の行為だったが、半分伏せられているジェーンの目は優しげな光に満ちている。

その目色と表情が不思議だ。

「凄く凄く好きな人だったから、幸せそうでアタシも嬉しいわ。でも：時々物凄く悔しくなるの。

アタシが女だったら、アタシが離さなかったら、アタシは今でもあの人の隣にいられたかしら。

考えたって無駄だって解つてゐるのに、ね」

「ジェーン：」

「やだ、泣かないでよ歌音！アタシ泣かせるために話したんじゃないんだから。

だからね、詩音、歌音。絶対に離しちゃ駄目。

詩音は世渡り上手だから、そこところ巧く出来そうだけど：でも、お互いの存在を当たり前だと思っちゃ駄目。

あんた達が兄妹だって事は変えようのない現実だけど、障害は数え切れないくらいあるけど、それに負けちゃ駄目。

解ったら返事なさい？恋における駄目の三原則」

歌音の涙につられて潤んだ目元を拭うジェーンに、二人は悲しそうに目を伏せて頷いた。

握った手を絡め、強く強く握り締める。

好きな相手が幸せだったらそれで良いなんて、そんなのは偽善だ。ジェーンが今でも時折過去の恋に苦しんでいるのは、その偽善があるからだ。

詩音はそう思いながらもジェーンに感心する。

彼は生まれつき心が広いのだ。生まれつき心の狭い自分には到底真似できない。

涙を拭う歌音の頭を撫で、自分の器の狭さを心で晒った。

――早坂邸、リビング。

姉を見舞って一ヶ月。

花菜は家の中でも学校でも、めっきり大人しくなってしまった。明るい笑顔を見せはするものの、ぼんやりとしている事が多い。

花菜はこの一ヶ月ずっと考えていた。双子の兄と姉がこの家に来た経緯、彼らが何故この家で浮いていたのかという理由。

今広げているのは、五、六年前のアルバムだ。

写真屋で貰う薄っぺらいそれに、双子の姿は殆ど無い。あっても、写真の隅に小さく写っているだけである。

父と母と司郎、もちろん花菜も家族らしい笑顔で写っているのに、双子だけがそこにいない。

この十五年、自分が構ってもらう事に一生懸命で、どうして突然異父兄姉がこの家に来たのなんて考えた事もなかった。

どうして兄はあんなにこの家族を嫌うのか、何故姉は母を慕わないのか。

花菜にとっての母親は、若くて美人で優しくて気立ての良い、世間一般の理想の母の姿なのだけけれど。

そういえば、その理想の母は、双子に対して母らしい態度を取っていただろうか。

父親が違うといっても、自分が産んだ子供のはずだ。

「花菜？帰ってるの？」

「うん…」

「学校で嫌な事でもあったの？あなた、最近塞ぎがちよ？」

「ううん…学校は楽しいよ。」

ねえ、お母さん…」

「なあに？」

一度だけ、両親が喧嘩している声を聞いた事がある。

喧嘩といっても、父が一方的に母をどなりつけているだけで、母は何も言っていなかったけれど。

『どうしてあいつ等はあの男にそっくりなんだ！

あんなに似てなければ、俺だって可愛がれる。お前もそうだろう？！』

あの男って、誰だろう。

見た事もない、兄と姉の本当の父親だろうか。

「しの兄とかの姉のお父さんって、どんな人？」

ぺらぺらとアルバムを捲る手を止め、花菜は振り向かずに関った。圭子は娘の発した言葉に息を呑み、微かに手を震えさせながらコートを脱ぐ。

「どう…したの。急に、そんな事」

「…あたし、ちょっと前にかの姉のところに行っただの。」

かの姉、喋れるようになってたよ…。お母さん、行ってあげないの？」

買い物袋をテーブルに置いた。

動揺しながら置いたそれはくしゃりと崩れ、玉葱と林檎がゴロゴロ

と床に転げ落ちる。

かたかたと震える手を押さえながら一つ一つ拾い集めようとしたが、一つ取っては一つ手から逃げた。

「どうして、行ったの…」

「だって、しの兄に会いたかったし、かの姉にも会いたかったから」「あなた、嫌ってたでしょう。あ、あの子の事」

「…違うよ。……懂れてたんだもん…」

「も、もう、行っちゃ駄目よ…花菜、行かないで」

一つ手に入れたら、一つ零れ落ち、それを拾うとまた別のものが逃げて行く。

『圭子、詩音と歌音をちゃんと見るんだよ』

零人の声が耳の奥に蘇った。

幼い頃の双子の顔が脳裏にドンと焼きつく。

「…行くつもりないけど。お母さん、おかしいよ。」

お母さんはお父さんと違ってお兄ちゃんとお姉ちゃんの本当のお母さんなんですよ？

しの兄とかの姉の家族なんですよ？」

「やめて!!!!」

叫び声に合わせて、思わず林檎を床に投げつけた。

砕けた林檎と、絶叫した母親に驚いた花菜は思わず身体を竦めた。

『君が僕を裏切るなんて、思わなかった。』

僕は君を裏切ろうなんて、一度も思った事ないのに』

綺麗な人だった。世間知らずの潔癖なお嬢様が、火遊びに惹かれるような恋。

暖を取るだけの軽い気持ちの火遊びは乾燥した大地を焼いて燃え広がりが、過ちだけが、償えない罪になって残った。

愛したかったから、引き取った。愛せると思った。だから引き取った。

親の責任を取ろうとした。一度は愛した人との子供だから、愛せると思った。

世間知らずのお嬢様が売れ始めたミュージシャンに恋をして、そのミュージシャンも穢れを知らないお嬢様に恋をして、燃え上がった恋は二つの形を造った。

愛せると思ったから、愛せないはずがなかったから、産んだ。

産んだところで、何も知らないお嬢様は子育ても出来ず、結局何もかもソツなくこなす夫が双子の赤ん坊を育てた。

だから、愛せるはずだった自分の子供達は、裸にしなければ見分けられもしない。

綺麗な顔の父親、彼に、彼だけに似ている双子。通じ合う三人。

一人、孤独を感じるようになった。

大嫌いだったはずの婚約者と再会し、その器の大きさに癒され惹かれるようになった。

自分が癒された分だけ傷ついた夫は、ビルの上からひゆるひゆると落ちて呆気なく死んだ。微笑いながら死んだ。

落ちていく零人と目が合ったのだ。綺麗な顔に浮かんだ、優しい笑顔。

詩音がよく浮かべるあの、微笑っているだけの顔。

「愛せないのよ！あの子達は、私を責めてる！

パパを返せって、あの人と同じ眼で、顔で、声で!!」

「お母さん…?」

「花菜、花菜…っ、あなただけが私の本当の子供なの。」

あなただけなの、私を責めないでいてくれるのは、あなただけなのよ…っ」

『おかあさん』

ママと呼ぶことを止めたのは双子。

ママと呼ばせなかったのは母親。

『ごめんなさい、お母さん…ごめんなさい…』

歌音はよくそうやって謝った。何を謝っているのか判らず、余計に苛立った。

『歌音に触らないで』

詩音はそうやって歌音を庇った。何故庇っているのか判らず、苛立ちが増した。

苛々する分だけ、花菜に愛情を注いだ。花菜は、愛情を注げば注ぐ分だけ素直に愛を返してくれたから。

『圭子、詩音と歌音をちゃんと見るんだよ。』

そしたら、違いなんてすぐ判るから』

『ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…っ』

『歌音に触らないでってば!好きじゃないくせに!』

何を、何処でどう間違えたのだろう。

引き取らなければ良かった。知らないふりをすれば良かった。
愛したいと暴れる心を抑え、知らないふりをすれば、楽だったのに。

世間知らずのお嬢様は、とことん世渡り下手だ。

詩と歌の音―9―

有里は、呆然としていた。

手に持っているのは、ドラッグストアで買った妊娠検査薬。

大学受験日まであと一週間というのに二ヶ月も生理が遅れている事に気を取られ、冗談半分気休め程度の心持で試しただけなのに。

見下ろす検査結果は、縦線の入った陽性。

愕然としながらも、有里は沸々と沸きあがる二種類の喜びを感じていた。

一つは単に、子供がいると知った女特有の喜び。

もう一つは黒々とした、独占欲と束縛欲。

諦めたはずの意地が、愛の大半が意地である事に疲れていたはずなのにまたその意地が、沸々と。

――療養棟、歌音の病室。

ジェーンの訪問がよっぽど活力剤になったのか、それとも安定剤になったのか。

恭一郎から「びっくらこくほど落ち着いてるよ」と言われた詩音は、退院も近いのかと密かに心を躍らせていた。

「どうしたの？ シノ、嬉しそう」

「そう？」

「うん」

冬にしては春色の濃い花束を持って現れた詩音に、歌音は「柄にもない」と思った。派手な外見に花束は似合うのだが。

詩音は繊細そうな雰囲気には似合わず、細々としたものの世話や作業が苦手だ。

今も妙に上機嫌で、「うわっ」とか「あー…」などの所謂失敗時の声を漏らしながら花瓶に花を生けている。

「私、やるよ？」

「いーの。俺がやる」

「…変なの」

「そう？」

「うん」

ベッドの上で膝を抱きながら言う歌音も、詩音の雰囲気につられてニコニコと笑っている。

外では寒々しく雪が積もっていたが、暖房の力だけではない暖かさを感じて胸が疼いた。

「シノ、大学の受験終わったの？」

「あー、うん」

「自信ある？」

「うん。」

受かってない自信がある」

「ええ？ 受けたんでしょう？」

結局水を張った花瓶にブスブスと生けただけの花は、かなり不恰好

な見てくれのままベッドサイドのミニデスクの上に置かれた。

詩音の答えと、花の不恰好さを笑いながら問う。

歌音の心地良い笑い声に、詩音も目を細めて微笑った。

「座ってただけだもーん」

「…答えてないの？」

「イエス。めんどくさいし、最後の反抗。」

これで受かってたら、素直に行きますよ」

笑いながら歌音の隣に腰を下ろすと、パイプベッドはきしりと音を立てた。

欠片も悪びれた様子のない態度に歌音は呆れたような笑顔を浮かべ、くすくすと笑っている。

抱いた膝の上に頬を乗せ、ふと笑い声を止めた歌音は幸せそうな目で詩音を見つめた。

笑える日が来るなんて、自分で閉じ込めた自分を取り戻せる日が来るなんて、思っていなかった。

眠る度に現れる義兄の幻影は怖ろしくとも、愛してくれない母親の影が哀しくとも、詩音がいれば安心できる。

「愛してる？」

「誰を？」

「うーん……俺？」

顔を寄せ合い、くすくすと囁き合う。

その姿は普通の恋人そのもので、偶然通りかかった恭一郎は、自分に気づいていない様子の双子を眺めて苦笑した。

歌音の状態が本当に安定しているのだとすれば、遅く見積もっても春頃には退院できるだろう。

歌音の脇腹を擦る詩音は心底笑っているようで、それを数秒見つめ

た恭一郎は苦笑の嘆息を漏らして歩みを再開した。

「コーヒー飲みたい」

「私も」

「やっぱ？」

「だって、シノが擽るんだもん」

「カノが意地悪言うからだよ」

「だってシノが擽るからーっ、も、もうやだったらーっ」

昔から弱い脇腹を再び攻めた詩音は、涙を零して笑う歌音の頬にキスをして身を起こした。

歌音で遊ぶのはもう止めにして、渴きを訴える喉を潤してやろうと立ち上がる。

笑いすぎて息を荒げる歌音は、むっとした目でこちらを睨んでいた。

「へーへー、もうしませんってば。」

「コーヒー買ってくっから待っててね、お姫様」

むすっとしている唇の上、鼻頭をむぎゅっと摘んだ詩音はくっど喉の奥で笑いながら出て行った。

その後姿を目で追い、歌音は大きく息を吐いてベッドに倒れ込む。正常なふりをして恭一郎を騙す作戦は、彼の思わぬ先手で大した成果を見せていない。

詩音は「あの人には殆どバレてるような気がする」と言い、歌音もそれに同意した。

彼は、父親の死も知っているような気がする。嘘を吐いたところで全くの無駄。

けれど、ジェーンが訪ねて以降の歌音は、不安や恐怖に苛まれる心

が大分落ち着きを取り戻しているような感覚を覚え始めていた。それからだ。恭一郎の目をちゃんと見て、素直な受け答えを返せるようになったのは。

自分でも驚くほど、四年前の事件の時の心境や、抱えている不安と恐怖を冷静に見つめられるようになった。

眠る度に頭部を血まみれにした義兄の幻影は現れるけれど、夢を見ては愛してくれない母親の影に泣きたくなるけれど、取り戻した自分と共にその心が詩音の手の中に戻っていると実感して、以前のような絶望だけの不安と恐怖は感じなくなった。

どうしようもない問題は、未来に向けて山積みになっているのに。歌音は幸せで幸せで、堪らない。

胸が疼いて、幸せを感じる度に涙腺が緩んで何となく、切なかった。

——療養棟、玄関前。

有里はなけなしの勇気を振り絞ろうと、ぎゅうと強く拳を握り締めた。

詩音に別れを告げて一ヶ月。その間、彼が学校に現れたのはたったの二日。目が合うと、少しだけ申し訳なさそうに、けれどいつもの笑みを浮かべる。

自分と別れた事で、詩音が傷つくはずもない。理由がない。

奥田有里は、双子の妹の身代わりだったのだから。

いや、きつと、身代わりですらなかったのだ。

「すみません。見舞いの者ですけど、早坂歌音さんの病室は…」

「あら、お友達？一〇五号室よ」
「ありがとうございます」

どうして来たんだろう、と思いながら綺麗に磨かれた乳白色の長廊下を歩く。

電話で適当な喫茶店にでも呼び出せば済むのだけれど。
パサ、と、枝に積もった雪が落ちる音がした。

胎に眠る子は、百パーセント詩音の子供ではないだろう。

わざわざこんな所まで足を運んだのは、それに対する罪悪感を抱いているからだろうか。

それでも、騒ぎ始めた意地という名の執念は、詩音を取り戻せと煩く囁くのだ。

取り戻すために、史上最大の嘘を吐く。詩音が少しでも怯めば、付け入る隙は出来る。

黒々しい野望を胸に秘めながら、野心とは不釣り合いなとぼとぼとした足取りで病室に向かう。

「…有里？」
「しの…ん」

第一診察室と一〇三号室の前を通り過ぎた所で、有里は足を止めた。缶コーヒーを二つ手に持った詩音が、吃驚したのか目を丸くしてこちらを見ている。

「何で、ここ…」
「…花菜ちゃんに、聞いたの」

嘘だ。二年前から知っている。
有里の答えに、詩音は小さく嘆息した。

「何？」

「詩音に、話があつて…」

「話？」

「コーヒー置いて来る」と病室に向かった詩音を、有里は中庭のベンチに座って待っていた。

目の前の、あの大きな木の下だ。二年前の秋、二人はここでただの兄妹ではない雰囲気醸し出していた。少なくとも、詩音は。

「話って？」

有里を見つけた詩音はベンチに座らず、彼女の前に立って問った。
僅かに目を伏せ、ポケットに手を突っ込んで暖を取っている。

「こんなの、ヨリ戻す手段みたいで、聞こえ悪いんだけど…」

「良いから。直球で言つて」

やはり、怒っている。

ここは多分、詩音にとって病院である前に歌音と二人で過せる場所なのだ。

だから、自分以外の誰かがここに訪れる事を極端に嫌がった。

「あ、あのね…私、妊娠してる…かも、しれないの」

「…ふうん」

「それだけ…？」

詩音はまるで他人事のような溜息を吐いただけで、ずっと鼻を吸った。

嘘を吐いているのは自分で、その非は確かに自分にあるのだろうけれど、詩音のあまりに薄い反応に有里は呆然と立ち上がると、思わず詩音のコートを掴む。

陽性反応を見た時、愕然としながらも密かに勝ち誇ったような感覚を覚えた。

これで詩音を取り戻せると、到底母親になるかもしれない女が考えるとは思えない、子供をダシにする事を思ってしまった。

だって、歌音は詩音の子供を産めない。所詮彼女は妹なのだから。

簡単に嘘を見抜かれた羞恥と、勝手な自尊心の欠損に腹の底が熱くなる。

「詩音の、子供かもしれないんだよ？」

「かも、だろ？可能性はゼロだよ」

「何で？！それじゃ、あたしが他の誰かと」

「したんでしょう？それ以外有り得ない。」

「だって俺、酔ってても絶対着けるし」

有里はかっとな顔を赤くし、ふらりとベンチに座り込んだ。

寂しさを埋めるため、詩音以外の男と幾度か寝た。

彼の友人で、自分の友人でもあるクラスメイト。

詩音との事で相談に乗ってもらっている内に、なんていう、有り触れた行きずりの。

「違う！この子、絶対あんたの子なんだから！」

「産むの？」

「証明してやるんだから……！詩音の子供なんだから！」

詩音は冷え冷えとした目で汚れた雪を見ていた。

折角柵から解放されたのに、また面倒な事を。溜息を吐くと、何となく腹の底から可笑しくなった。

自分のような最低な人間に興味を抱かなければ、有里は真っ当で真っ直ぐな少女のまままでいられたのに。

「なに…？」

肩を震わせていた詩音は、次第に身を折って笑い声を立て始めた。可笑しさが込み上げたのは、ほんの少しだけ、母親と有里が被ったから。

“哀れ”

有里は浮き上がる涙に歪む視界で、笑う詩音を見つめるしかない。

「産みたいなら、産めよ。」

子供使って証明したいならしろよ。

でもさあ、愛せもしないのに産むんじゃないよ」

「しの」

「母親に要らないって言われるの、どんな気持ちか解る？」

お前、産んでどうすんの？絶対俺の子じゃないのに。

「ああ違った、じゃあ要らない」って捨てるの？」

「ちがっ」

「十八で育てる自信あるの？道具だからどうとでもなるって？」

「違う…！」

こんな詩音は知らない。

声は笑っているのに、笑い声は確かに聞こえるのに、詩音の顔は少しも笑っていないかった。

ずっと綺麗だと思っていた灰色の眼は鋭く淀み、徐々に近づくそれから顔を背けられない。違う、知らないんじゃない。有里は、悪意も何も無いがらんだものの眼に、見覚えがあった。

『お父さんと同じ顔で見ないで!!』

要らない、そう言われたと同じだった。

歌音はそれから母親と目を合わそうとせず、優しい母親を夢に見ては泣いた。

愛せもしないのに、何故引き取ったのだ。どうして産んだのだ。

“哀れ”

誰が？

有里が、母親が、否、自分が。

「私、違う…そんな気持ちもあったけど、でも、妊娠が嬉しいのも事実よ!」

「…ふうん…」

堪らず有里が叫ぶと、詩音はすつと身を引き、初めと同じ反応を返した。

その目は既に歌音の病室がある辺りを見ている。

ほら、勝てるはずなかった。

「どうして、歌音なのよ…」

度の過ぎるシスコンとブラコンとだと思っていた。二年前の秋までは。

歌音はフラフラしていて大人すぎるほど大人しく、地味でいようとしているのに妙に目立つから、ただの兄でなく双子の兄である詩音は心配で堪らないんだろうと、そう思うようにしていた。彼を好きになった頃から。

「何で歌音なの?!

私、勝てるわけじゃない……っ」

良い意味で目立つのは詩音で、その双子の妹はいつも悪い意味で目立っていた。

言ってみれば、明るくてリーダーシップのある兄の影。

それでも派手な苛めがなかったのは、いつも詩音が妹の盾になっていたからだ。

誰にでも優しく、明るくて、リーダーシップがあって、誰にでも好かれる詩音が、たった一度だけ見せた事のある、樹の虚のような眼。

六年ほど前、確か、小学六年の頃だ。

昼休み、校庭で遊んでいた詩音は突然、「頭が痛い」と言って屋上へ駆けて行った。

保健室ではない場所へ駆ける時は大抵彼の妹が転んだり泣いていたりする時で、今回も例に漏れず歌音が屋上で泣いていた。

ただいつもと様子が違っていたのは、歌音の膝近くまであった長い髪が背中の中程まで短くなっていた事。

歌音は、無理矢理切られたらしい自分の髪を持って、蹲ってしくしく泣いていた。

それを見つけた詩音は、焦りと怒りに「誰がやったのか」と追及するクラスメイト達とは違い、ゆっくりと落ち着いた雰囲気で瞬いた。その時の反応はそれだけだった。

首をぶんぶん横に振るだけで犯人の名前を言おうとしない歌音の

頭を優しく撫でると、妹を囲む輪から一人離れ――。

次の休み時間、隣のクラスで悲鳴が上がった。詩音はその手に鋏を握り、どうやって見つけ出したのか歌音の髪を切った三人の髪を引っ掴んで切っていた。淡々と、虚のような眼で。

「おかしいよ、詩音」

有里はぽつりと呟いた。

詩音は雪の黒く汚れた部分を見つめながら、ベンチの端に腰掛ける。

「歌音の事、好きなんでしょ…。」

歌音は、妹だよ？それって、異常だよ…？」

「…知ってる」

「同じ顔だよ…」

「運が悪かった」

「…異常だよ」

「そうだね」

きつと、多分、詩音も心の病気なのかもしれない。有里は鼻を吸りながら思った。

そういう理由をつけないと、有里には理解出来ないからだ。自分の兄や弟を男として好きになれるかと考えてみても、気持ち悪いだけで想像も出来ない。それが、多分普通の感覚だ。

「私に、ちょっとでも悪いって思ってるなら…私の四年間潰した事、ちょっとでも悪いって思うなら…。」

「…こっぴどく振ってよ。そしたら、あんたの事嫌いになれるから…。」

「…うん」

意地だけでしがみついたくせに。
奪ってしまえるほど強くない。

歌音から詩音を取り上げたところで、詩音から歌音を奪えるわけではない。

優しいだけで心の無い人を愛し続けられるほど自分は強くないと有里は識っている。

もっと図々しく、ふてぶてしく、そうだ悪女に育っていれば良かった。

「私の事、身代わりだった？」

「カモフラージュ」

「ちよつとでも、愛してた？」

「…全然」

「馬鹿な女って思ってた…？」

「可哀想、って、思ってた…」

「…詩音って、最低だね…」

「解ってる」

「…：最っ低だよ。男のクズだよ。」

頭オカシインじゃないの…：こんな可愛いコ、そうそういないのにさ…」

目尻を真っ赤にした有里を見る詩音のいつもの笑顔は、少しだけ、柔らかな温かみを孕んでいた。

有里はずっと鼻を嚙り、むっと眉を寄せて詩音の肩口をドンと殴る。

「…有里は好きだよ。歌音に優しかったから」

「そうでしょうね。」

最低のフラレ方だわ」

「…ごめ」

「言うな。謝らないで。謝られたら、詩音の事殺しちゃいそうだから。」

もう良い…これで、お互い、漸く解放されるんだよ…」

有里はドロドロの、意地と嫉妬だけの疲れる感情の塊から。

詩音は求められても返せない愛情を疎む気だるさから。

「もう会わない？」

「会いたくない…」

「…歌音にも？」

「歌音には、十年後なら会えるかな…」

「オバさんだな。そんな頃には」

「あんただってオッサンよ。」

私を傷つけまくったんだから、若ハゲにでもなってモデルなんか出来なくなったりゃ良いのよ」

有里が立ち上がる。

詩音はその後姿を眺め、素直な気持ちで微笑った。

四年間傷つけて傷つけて傷つけた少女に、今初めて心からの罪悪を感じている。

子供、どうするの。

遠ざかる背にそう問おうとして、その資格すらない事に気づいた。

「…男じゃなくて、人間のクズだよ」

よりによって実の妹を本気で愛した上に、その愛を世間の目から隠すために人を道具のように使う。

どうせなら猿に生まれていたら、もっと楽だっただろうに。理性と社会性なんて、身につけるもんじゃない。

詩音は溜息を吐くと、自分の理性も社会性も取り繕っているだけの贗物だという事を思い出し、軽く笑った。

生まれた時から人間の道を外れているクズは、たった一つの拠所へ還る。

同じ想いを抱えているはずなのに、その拠所の事をクズだとは思えなかった。

初めての恋だった。

悲しい事に、それはただの恋だったのだ。
愛ではなかった。

圭子は幼等部から高等部が一環したエスカレーター式の学園で学生生活を過ごした。

友人も多くそれなりに楽しかったが、小等部から高等部までは男女別の校舎で、異性に対する免疫対象といえば、免疫対象にもならない父親と教師のみ。

圭子の思春期は、淑やかで上品な者の多い世界にどっぷりと浸かったまま終わるはずだった。

自分とはかけ離れた世界の住人である零人と知り合ったのは、そんな世界も後数ヶ月という冬の頃。

過ちは、友人の一人ではあるがあまり良い噂のない少女の「最後のテストくらい良い点を取りたい」という嘘から始まった。

家庭教師のつもりで友人の家へ行くと、彼女は勉強もそこそこに自室からの脱出を計り、圭子を連れて夜の街へと繰り出す事に成功したのである。

ほぼ引っ張られる形で着いた先は小汚いライブハウスだった。

酒と煙草の煙が充満した小屋ともいえる部屋の照明は濃い紫や緑といった奇抜な色のものばかりで、ちらちらと見える壁は酷い落書き

だらけだ。

騒音に圭子の呼び掛けは次々と掻き消され、やっと友人が振り向いたところで耳を劈くような轟音が狭い室内の床と壁を揺らした。

音楽はクラシックしか聴いた事がない。それ以外といえば、祖父が愛聴している演歌くらいのものだ。

とにかく、第一印象は恐怖だった。

黄色い声援と野太い掛け声を浴びる男の髪は見事もないような鮮やかな金色で、足の裏から頭の先まで引き裂くような音渦の中で喉が裂けるのではないかと思えるまでの大声で歌っている。

歌っているというよりは、喚き散らしているようにも聞こえた。流暢な英語は早口なので何を言っているのか全く判らない。

その歌っているのか叫んでいるのか判らない声から感じたのは、激しい怒りに似た怒涛の感情で、周囲の絶叫も加わり圭子は立ち尽くすしかなかった。

おまけに、パフォーマンスなのか曲が終わるごとに徐々に服を脱ぎ始め、最終的に彼はステージ上で上半身裸だった。

これを恐怖といわずして何と言うだろう。

別世界に迷い込んだと同然の圭子はライブが終わると同時に友人に引っ張られ、わけもわからない内に楽屋へと連れ込まれていた。

「実南ちゃんの友達？よろしく」

あの狭いステージで鬼のような形相で叫びまわっていた男は、同一人物かと疑ってしまいたくなるほど柔和な笑顔で非常にフレンドリーな挨拶を寄越した。

明るい照明の下で見る彼はとても魅力的で、圭子は簡単に恋に落ちた。

友人がドラム担当と付き合っていたと知ったのは、翌日の事。

高校を卒業すれば一年間の花嫁修業を経て婚約者の元へ嫁がなければならぬ。

何もかもを決められた人生に希望の無かった少女に、零人という男の刺激は強すぎた。

二つ年上で優しくスマートな彼は圭子の知らない事を沢山知っていて、容姿もずば抜けて美しい。

淡淡とした冷たい印象しかなかった婚約者とは天地の差だと、世間を知らない少女は初めての恋に溺れた。

ただ、恋をしていたのだ。

女を惹きつける強大な魅力を持つ零人の子を身籠った事が単純に嬉しく、勘当され婚約を破棄されても、彼となら幸せになれると思っていた。

常識で考えれば、知り合って一年未満の何もかもをすっ飛ばした結婚生活が早々巧くいくわけなどない。

花嫁修業前の圭子は当たり前前に自炊などした事もなく、その生活は不便で不自由だらけだった。あんなに産みたいと思った子供は、中々懐いてくれない。

友人たちは今頃十九という歳を満喫しているだろう。

大学に通っているか、はたまた自分も従事するはずだった花嫁修業に精を出しているか。

どちらにしてもその周囲には親しい同年代の友人が溢れている事だろう。

だが自分はどうか。

内気な自分ひとりではママ友達を作る事すら出来ない。

零人を取り巻く人間は男女共に大抵が粗忽で下品。

生まれた子供は双子で、精一杯の愛情を注いでいるつもりなのに自分の腕では泣き止んでもくれない。

父親が抱けばあっさりと眠るのに。

孤独だろうか。生まれた子供達が何とか言葉でコミュニケーションを図り始められた頃には、言いようのない虚しさが山のように積もっていた。

かつての婚約者と再会したのはそんな頃、猛暑だった。

一郎は圭子との婚約を破棄した後に見合い結婚し、既に一児を設けていたが妻を亡くしたばかりだった。

「俺は、本当に君を愛していた。

顔に出ない性分だから、君は俺を嫌っていたようだが」

初めて受けた印象と変わらない、冷静で淡々とした口調だった。

孤独を埋め合うための嘘だったのかもしれない。

それでも、彼の耳朵が微かに赤いと気づいた時、確かな愛おしさを感じた。

不器用な人だったのだと思うと、あんなに嫌いだった彼を堪らなく可愛い人なのだと思えた。

零人に抱いた感情と、似ていて非なるもの。

いけないと思いつつも誘いを断れず、逢瀬を重ねる度に一郎が見せる不器用な優しさに惹かれていった。

零人と別れてくれと言われたのは、秋が深まり肌寒さが目立ち始めた十一月の初旬。

子供も引き取って、五人で新しい生活を始めようと言ってくれた。明確な答えを返せないまま数日が過ぎ、双子は二歳の誕生日を迎えた。

家族揃って迎えた双子の誕生日、詩音には当時人気のあった機関車

の玩具、歌音には真っ白いテディベアを贈っている。

この頃零人のバンドはメジャーデビューが決まり、彼は多忙を極めていた。

一方で圭子は双子を早くから寝かしつけると一郎と会い、早朝にはアパートへ戻るといふ生活が続けている。

そうまでしても一郎に会いたかった。

圭子の孤独を埋めてくれたのは、同じような孤独を持つ一郎だけだった。

段々、子供も夫も疎ましく思うようになっていた。

自分の選んだ道を真っ向から否定する考えに浸る度、そんな自分が怖ろしくなったけれど。

それでも気持ちを抑える事は出来なかった。

双子の誕生日から十日ほど過ぎたある日の早朝、アパートの古びた扉に嘆息し鍵を開けると、玄関から見える位置で眠っているはずの双子の姿が無かった。

普段なら一つの布団でぎゅうぎゅうにくっついて眠っている時間帯だ。

ぞっと背筋が寒くなり、靴を脱ぎ捨てると玄関の扉も閉めずに部屋へ上がる。

布団は何となく温かく、少し前までいたのだという痕跡があった。嫌な予感にぞわぞわと鳥肌を立てながら脇の机を見ると、紙切れが一枚置いてある。

昨夜はなかったそれに眉を顰めながら目を走らせ、ほっと息を吐いた。

紙切れは零人の書置きで、内容は二人を遊園地へ連れて行くというものだった。

双子のために用意していたコンビに弁当は、炊事場のゴミ箱に捨てられていた。

零人が自殺したのはその翌日。

愛されている事は、知っていたのだ。

圭子はそれに応える愛情を零人に抱けなかった。

バンドが所属する事になった馬鹿でかい会社のビルに圭子は呼び出された。

零人はどこことなく淋しそうな目で、

「君が僕を裏切るなんて思わなかった。

僕は君を裏切ろうなんて、一度も思った事ないのに」

ぽつりとそう言った。

零人は自分の過ちを知っていたのだと分かると、腹の底からカツとした羞恥が湧きあがった。

それでも動揺を隠そうと手を握り締め、「何の事？」と問い返す。自分でも呆れるほど、その声は震えていた。

零人の嘆息が斜め上から微かに聞こえた。

「良い。

圭子がそれで幸せなら、もう良い」

何が良いのだ。

圭子は俯いたままそう思った。

零人は全身全霊をかけて自分を愛してくれたのに、自分はそれを知っていたのに、裏切ったのだ。手前勝手に被害妄想的な独りよがりの孤独を理由に。

殴られても文句すら言えない状況を作ったのだ。
何が良いのだ。

圭子は、零人が抱える闇を識らなかった。

彼が起こす詩は、大抵が抗いようのない孤独や理不尽な世界への怒りだ。

零人が本当は誰も愛せない事を、圭子は識らなかった。彼の抱く愛情が歪だという事も、識らなかった。

零人が珍しく歌う優しい歌といえば、双子を寝かしつける時に歌う日本語でも英語でもない言語の曲だけだ。

二年間と少し共に暮らしていながら、圭子は零人の育った境遇を知らない。

零人は決して一定以上の距離から他人が踏み込むことを許さず、圭子が彼の抱える闇を知り得るはずもなかったのだが。

「これからの事、話そう。コーヒー買って来るから、そこ座ってて。

大丈夫、全部巧くいくよ。全部、丸く収まるから。

ああ、外、綺麗だよ。社長自慢の、景観」

顔を上げると、零人は怒った様子もなくただ微笑っていた。

言われるがままベンチに腰を下ろし、混乱した頭を静めようとガラス張りの窓を見つめる。

確かに素晴らしい警官だった。周辺の街の様子が一望出来る。

それは、一瞬だったはずだ。

落下する速度はとてつもなく速いものだという事は、圭子も知っている。

それなのに、頭から落ちていく零人と目が合った。

初めて会った時の、初めて言葉を交わした時の、つい数分前まで目の前にあった微笑。

コーヒーを持って戻って来るはずの零人は、感情があるとは思えな
いただの微笑のまま、窓ガラスの向こうにいた。

自殺に直接結びつく遺書はなかった。

けれど、彼が言った通り、全て巧く行った。

遺書は用意してはいなくせに死後の処理は済ませており、弁護士と
数回面接しただけで全ての話が終わった。

零人の遺言は、彼の両親の遺産と彼が残した金品は、双子が二十歳
の誕生日を迎えたら譲渡してくれという事と、十八の誕生日を迎え
たらある人に会わせてやって欲しいというそれだけだ。
裏切った自分への怨恨の痕跡は欠片も無い。

「パパは？」

零人と似た顔で、同じ顔が二つ、そう問いかける。

無垢な光が溢れる四つの灰色の瞳が、「お前が殺したんだろう」と
言っているような気がした。

結局、一度も一郎に双子を会わせないまま施設に預けた。

憔悴した圭子を、一郎は不器用ながらも献身的に慰めてくれた。

彼との間に生まれた赤ん坊は自分に似ていて、余計に圭子を慰めて
くれた。

三年後に引き取った双子は、特に詩音は圭子を毛嫌いした。

幼い頃はどちらかというと歌音の方が零人に似ていて、圭子はそれ
を恐れた。

「レイちゃん」

歌音がふわふわのティディベアにそう話しかけている光景にぞっとした。

四つの灰色の目は何も言わず、「お前がパパを殺したんだろう」と言っているような気がした。

愛した人の子。

それは違う。ただ恋をしていたのだ。

恋で終わってしまったのだ。

愛そうという努力を、不便な現実を前に放棄した。

裁かれるべきは自分なのだ。

零人が死んだ原因は明らかに自分なのだ。

どうして誰もそれを責めてくれなかった。

歌音が酷い方法で心を失くしても、一度の見舞いだけで会いに行く
勇氣はなかった。

「どうしてお姉ちゃんのお見舞い行ってあげないの？」

花菜までそんな事を言わないで。

双子が花菜と距離を置いている事に、圭子は少なからず安堵していた。

酷い母親だ。死ねば良かったのは自分の方なのだ。

十五を超えた頃から詩音は零人に瓜二つになり、彼が浮かべていた心の無い微笑を浮かべるようになった。

それを見る度、思うのだ。

「パパじゃなくて、あんたが死ねば良かったのに」

そう言われているような気がするのだ。

「パパがいるだけで、俺達は幸せだったのに」

彼らから唯一本当の親愛を与えてくれる人間を殺した。

見えない形で、この贖罪は一生着いて回る。

零人の遺した双子が持つ彼の面影に怯えながら、悔いても改められない懺悔を抱えながら。

ガタン、という物音に、圭子は悪夢から目覚めた。

「裏切り者」

幼い双子の唇から飛び出した零人の声が、ガンガンと頭の中で響いている。

カタカタという小さな物音はさっきの大きな物音の後も続いていた。夫は堪った仕事を片づけているのか未だ帰宅していないようだ。

そろそろと廊下を移動する内に、音の根源が歌音の部屋だという事に気づいた。

物取りかもしれないと震える手でノブを回す。

「…何」

そこにいたのは、最も顔を合わせたくない詩音だった。

思わず固まり、震える声で漸く「何してるの」と問う。

夜中の一時を過ぎた深夜だ。

「見て分かんない？荷物纏めてんだよ」

「ど、どうして」

「言っただけだよ」

俺がこの家出て、誰が歌音を守んだよ。こんなトコで」

圭子が双子を恐れる理由は他にもある。

二人はまるで二人で一つだというように、何をするにも一緒だった。風呂でさえ中学に上がるまで一緒に入っていて、圭子が止めさせなければ今頃の歳に成ってもそれを続けるような気配があった。

「…いつまでもそこにいられちゃ邪魔なんだけど」

「し、詩音…、いつまでも歌音といられるわけじゃないのよ…？」

「……だから？」

「いつか、歌音にもあなたにも好きな人が出来て、離れなきゃならないのに、いつまでもそうやって過保護に」

「そうさせたのは誰だよ」

ビリ、とガムテープを引き伸ばす音が響く。

元々片付いており、私物も少なかった彼女の部屋の物は既に殆どが梱包されている。

バリツとガムテープを千切ると、詩音は視線を母親へ向けた。

「この家の姓を名乗ってるだけで吐気がする」

俺達の名前は早坂じゃない。俺達からパパを奪ったのはあんただ。俺達を守ってくれるはずだった大人を奪ったのはあんただ！

俺がカノを守らなくて、誰がカノを守るんだよ」

被害妄想かもしれないと思っていた圭子の考えは、何一つ外れてい

なかった。

何も言い返せず、ただ押し黙る。

「あんたが死ねばよかったとは思ってない。

あんたに死なれたら、パパは浮ばれない。

カノだって……」

詩音はギツと下唇の内側を噛んで、言葉を飲み込んだ。

黙々と梱包作業を進める。

「私は…、あなた達に、普通の兄妹でいて欲しいの…」

母親の勘と言えるほど、母親らしい愛情を持って接していたわけではない。

歌音は確かに自分に対して怯えを見せていたし、詩音は自分を毛嫌いしている。

それでも、何となく妙な感じがするのだ。

双子とはこうまで密接に同調するものなのかと疑問に思うほど、二人は近い位置にいる。

詩音の献身的な介護も、まるで恋人への態度のように思えてならない。

兄弟のない圭子には兄弟間にある感情自体理解出来ないのだが、歌音がレイプされていたと知った時の詩音の顔は今でも忘れられずにいた。

まるで自分の所有物が奪われたような、蒼白になるまでの冷えた怒り。

人の怒りは熱せられたものである限り大した事は無い。後は怒りが冷えるのを待つだけだからだ。

冷えた怒りというのは、そこから沸々と沸騰していく。大体にして、ゆっくりと時間をかけて沸々と。

圭子は確かに、詩音の表情にそれを感じ取った。

「普通の兄妹って、何」

詩音は低い声で呟き、はっと晒った。
目を合わさないまま。

「普通の、兄妹よ…」

圭子はそう答えるしかなかった。

この一抹の不安がどうか、気のせいであるようにと。
地獄と等しかっただろうこの家から出て行く双子を止める事は出来ない。

静かに扉を閉め、とぼとぼと寝室へ戻る。

どうか全て、気のせいであるように。

世間体や体裁など関係なく、ただ人の道を外れて欲しくない。

双子を愛しているのは事実なのだ。

恐怖の前にそれを素直に表現できないだけで。

自分が広げに広げた溝を、どうしようもできないだけ。

どこからどこまでが、零人の復讐なのだろう。

鍵のついたジュエリーボックスの底、零人の遺言を取り出し、その中にある一枚の紙切れに目をやった。

東京近県の住所と電話番号。

暮野 靖昭

双子の大叔父に当たる男の連絡先を、彼らが十八になった今も渡せ

ないでいる。

きっと零人は解っていた。

自分が双子を一度でも手放す事。

双子が自分を嫌う事。

双子が新たに与えられた環境を拒絶する事。

これを手渡せば、自分の元を離れると解っている双子は、完全に他人になる。

きっともう会う事も無くなるだろう。

憎しみの籠る色の無い微笑を見る事も無くなるだろう。

「ごめんなさい…零人さん…」

謝っても拭えない殺人と同等の過ちは、消えないまま。

全てが自分の手をすり抜けて、何処か遠くへ消えて行く。

手元に苦しみだけを残して。

詩と歌の音―11―

結局、歌音は馬鹿なのだと思う。

彼女が大切にしているものは多くせに種類は少ない。
だから、歌音は馬鹿なのだった。

父親に貰った写真。

友達や友達の親が撮ってくれた二人の写真。

友達と写っている写真。

三年前に死んだ近所の猫の写真。犬の写真。

動物園の動物の写真。

四年前から内容の増えなくなった厚紙のボックスは、大量の写真で埋まっていた。

ひっそりと隠し撮った、母親の写真も共に。

あの子は、学習能力がないのだ。

手を伸ばしても無駄だという事を学ばない。

要領が悪いせいで試験前は目の下に隈を作るほど勉強をする。

良い点数を取るための努力は褒められたいからだ。

期待をするから余計に傷つくのだと教えても納得したふりをするだけで、あの子はまた期待する。

いつか手を取ってくれる。

いつか振り向いてくれる。

いつか笑いかけてくれる。
いつか、褒めてくれる。

「そんなの、期待するだけ無駄だよ」

そう言って何度も何度も嗜めたのに。

結局、歌音は馬鹿なのだ。

「今まで、ありがとう」

三月初旬、詩音は母親を真正面から見つめ、ぽつりと呟いた。

義務であろうと世間体であろうと、彼女が母親として自分達と向き合おうとしていたのは事実だ。

その決意が簡単に折れ、一層淋しい環境を二人に与えただけだとしても。

まだほんの少しだけ肌寒い。ほんの少しだけだけれど。

「もう、あなたの何も脅かさないから」

だから、もう二度とこちらへは来ないで欲しい。

脅かさないで欲しい。

詩音が一番恐れている者。

母親は、きつととても簡単に歌音を奪える。

その笑みを向け、手を伸ばし、少しの声をかけるだけで、歌音の心は歓喜に満ちるだろう。

綺麗に片付いた隣り合う二つの部屋のよう、詩音は綺麗に母親の影を心から追い出した。

父親が生きていた頃に幾度か会った事があるという大叔父は、駄目元で持ちかけた養子縁組の話をあっさりと快諾してくれている。

もう母親の何をも脅かさない。一生彼女の前に立つことはないだろうから。

時折、メディアを通して目に触れる事はあるだろうけれど。

詩音はもう二度と、母親に対して何も言わない。責めもしなければ、貶しもしない。

だから、脅かさないで欲しい。

そう言葉にはせず、静かに背を向けた。

ずっと重かった心が、母親の影を捨てた分だけ軽くなったような気がした。

ほんの少しだけけれど。

——芸能事務所ゼノ、社長室。

基本的にピンク色の配色で目を甚振るそこで、ジェーンは黙々とモニターを見ていた。

その脇には腕を組んだ長身の男が同様にモニターを見つめている。

「…ほんと、そっくりねえ……」

スピーカーから流れていた音が止まり、映像も同時に途切れた。
大きな画面には砂嵐だけが残っている。

「これ、あの子達の父親なの？」

「シオンは双子なんだろう？」

「まあねえ：双子モデルで売り出したから双子だけど」

ふう、と息を吐く。

十年以上も昔、歌音が「パパなの」と写真を見せてくれた時、その男に何となく見覚えはあった。

Oーゼローはインディーズバンドでありながら結成数年で動員数を飛躍的に伸ばし、メジャーデビューを心待ちにされていたバンドだ。彼らのファンは殆どが若年層だったが、それでも動員数を伸ばせたのはボーカルの容姿が大きな理由にあったのだろう。

けれど甘い顔に似合わない歌声、それ以上に強烈な印象を残す荒削りながらも完成されつつある楽曲は、それ以上の理由だったはずだ。全てを憎んでいるような鋭い目と、歌の中に在る痛切な寂哀が同年代の心を掴んだはずだ。

まさか双子の実父が彼だったとは。

確かにゼロのボーカルはデビュー直前に自殺している。

その時期も恭一郎が明かした双子の父親の自殺時期と全く同じだ。

「彰二、今更こんなもの持ってきてどうしようって言うのよ」

「…別に」

「あんた、ホントに嘔吐くの苦手ねえ。」

どーせ詩音を歌手として引っこ抜きたいんでしょ？」

ニンマリと笑うジェーンの一言に、彰二は無言で顎を引いた。

静かな機械音と共にデッキから吐き出された盤を取る。

「途中で破れちゃった夢を追いたいのは分かるけど、詩音には無理よ」

「何で」

「だってあの子、凄い音痴なもの」

「…嘘だろ？ 零人の子供なのに…」

彰二は思わず口元を押さえた。

その目は信じられないと言いたげに愕然と丸まっている。

多少大袈裟にも思える反応にジェーンは肩を震わせた。

「本当よ。」

芸幅広げさせようと思って試みてさ、吃驚したんだから。あれは酷いわ。

歌音は歌音で人前で歌うのが嫌だからって学校で歌のテストがある日はここで一日中サボってたような子だし」

「…マジで？」

「マジマジ。だから諦めた方が良いわよ」

はあ、と重い溜息を吐く彰二に向かって、ジェーンは大きな口で力カカと笑った。

「まあ…良いや、その話は。」

もう一つ商談があるんだ」

「何？ 別の子に曲書いてくれんの？」

「違う」

「即否定！」

「…カノトが復帰してからで良いんだけど…双子モデルをPVに使いたいんだ」

今度はおどけていたジェーンが顎を引く番だった。
怪訝に眉を寄せながらも、ライターを捜している彰二にマッチを投げ渡す。

「…復帰するかどうかかわかないわよ？」

「その時は曲が蔵入りするだけだ」

「勿体無い。他じゃ駄目なワケ？」

あの二人以外にも可愛い子はゴロゴロいるわよ、ウチは」

「駄目だ。アレは、四年前に初めて二人を見て作ったヤツだから」

「って事は、四年前から零人の子供かもしれないって疑ってたのね」

「疑ってはない。確信…かな。」

曲が出来たらカノトは休業してたし。あんたにコレ見せんのもこんな遅くなっただけだ」

ふーむ、と鼻から煙を吐き出し、ジェーンはギツと背凭れに埋まった。

歌音の復帰がこの仕事ならば、彼女の今後はかなり安泰したものになるだろう。

彰二が手がけたバンドは数こそ少ないが全て成功している。

所謂少数精鋭というもので、プロデュースや楽曲提供以外にも、プロモーションビデオまでもが高く評価されているのだ。憎いまでの才能である。

「ま、商談としては悪くないわね」

「荣誉だろ」

「…自分で言わないの。」

まあ、歌音が落ち着いたら二人に言ってみるわ。気長に待って。
あの子、ココの病気だから。あんたが敬愛する零人の責任も多分にあるのよ」

トントンと胸を打つジェーンに彰二は目線を落とす。
何か言いたそうに口を開いたが、すぐに顔を上げた。

「……そう。じゃあ、気長に待つよ」

「そうして。進展あったら連絡するわ」

ひらひらと手を振るジェーンは、彰二が退室すると大きく嘆息した。
時計を見ると、正午近い時間だった。

カチカチと進む秒針を暫く見つめながら今日は何故こんなに暇なの
だろうと考え、ハッと顔色を青くする。

今日は詩音の引越しを手伝うために、一ヶ月前から無理矢理スケジ
ュールを空けていたのだ。

掛けてある派手な帽子の一つを引っ掴むと、ヒールの音も煩く大慌
てで駆けて行った。

――療養所、カウンセリング室。

歌音はほぼ毎日行っているカウンセリングで徐々に錯乱する回数を
減らし、今では恭一郎と対等に話すまでになった。

元々良かったのだろう姿勢は凛と背筋を張ったもので、当初は合わ
せる事のなかった視線もしっかりと合っている。

歌音はやはり強い子だと、恭一郎は嬉しさを滲ませた微笑を浮かべ
た。

優しい笑顔に、歌音は少し照れくさそうな目をして首を傾げている。

「最近、夢はどう？」

「あんまり覚えてません」

「そっか。良いね。よく眠れてるって事だよ。」

じゃあ別の質問。もし詩音と離れる事になったら、歌音はどう思う？」

歌音は考え込むように押し黙り、暫く経ってから顔を上げたが再び眉を寄せて首を傾げる。

「分かりません。」

きつと、絶対、凄く嫌だと思うけど…でも、仕方ないのかもって…思いかもしれない」

「どうして仕方ないの？」

「だって…やっぱり、兄妹だし…。変な事って、ちゃんと解ってるし…。」

私達が、普通じゃないのは、環境のせいもあったのかもしれない。だから、詩音はいつか、本当に好きな人を見つけるかもしれないし、そうなったら、私は要らなくなるでしょう…？

そんなの凄く嫌だし、怖いけど、でも、それは仕方ないから…」

まだ当たり前に雪が降っていた二ヶ月前、詩音は有里に会ったと言った。

例えばカモフラージュだったとしても詩音と有里が付き合っていたのは事実だし、多分身体の関係もあったのだろう。

それを考えると腹の底がむしゃくしゃして気持ち悪くなり、詩音の口から有里という名前を聞くのも嫌で堪らなかった。そんな事を思う自分が一番嫌だから、嫉妬という感情についてなるべく考えないようにしている。

けれどももしかしたら、またそんな事があるのかもしれない。

カモフラージュとして家庭を持つなどと言われたら、気が狂ってしまいそうだ。

大袈裟な妄想だと解っていても、嫌な未来を想像する度に詩音を信じ切れていないような気がして、それもまた嫌だった。

だって、どうしても二人は兄妹なのだ。それも厄介な事に、双子。

「そう、じゃ、次の質問ね」

サラサラつとカルテに文字を書き込む恭一郎の反応はドライだ。

実の兄のように親しみ深い性格をしているが、余程の事で無い限りサラリとしている反応が多いと知ったのは最近の事。

最近までが余程の事ばかりだったのだと思うと、それも何となく恥ずかしい。

「詩音ってさ、怖い？」

「…怖い？詩音が？」

「うーん…何ていうかな、怖いって思う時ある？」

逆らえないわり、みたいなオーラ感じる時とか」

「別に…そんな事はないです。詩音は優しいから。

でも…」

眉を寄せたまま答えていた歌音は言葉を濁し、そのまま口を噤んだ。

怖いと思ったのは一線を越えたその時だけだ。それも今思うと詩音に対する恐怖ではなく、単に経験の無い領域へ踏み込む際に生じる恐怖だったのだと思う。

ただ、詩音は時々暗い目をして囁く事があった。

真剣な眼差しで、その目の中には自分しか映っていない。

『俺にはカノだけで、カノには俺だけだよ。

死ぬ時も一緒だから。絶対に、一緒だから。

だって、一緒に生まれたんだもん。分かれたんだよ、その時に生まれたんだよ』

真剣な目でそう囁くのだ。

何時頃からそれが始まったのか、もう思い出せないが。

歌音はそれを素直に聞き入れ、何時もこくと頷くだけだ。

暗く淀みながら信じて疑わないといった目で、けれどその顔は無表情。歌音だけが知る本当に優しい笑みすら無く、声の調子は機械的だ。

いつだったか、詩音が恭一郎にいった歌音にしか見せない顔。それを見せる時、詩音は呪詛のつもりでそう囁く。信じて言葉にし続けなければ、いつかそれは叶うはずだ。

兄がそんな事を切々と想いながら告げているとは知らない歌音の手には、その時必ず薄っすらと汗が浮かぶ。何が原因かも解らない汗が。

「…でも、うん…やっぱり、怖くはないです」

囁く詩音の顔と声が浮かび上がったが、やはり怖くはなかった。

歌音はそれを素直に聞き入れるだけだからだ。

「ふむ、了解。

んじゃあ、次の質問ね。

今までそれとなくしか聞いてこなかったけど、ちょっと核心に踏み込もうと思うのね。

ご両親の事だけど、大丈夫？」

恭一郎はカルテから顔を上げ、多少気遣う顔色で歌音を見つめる。歌音は僅かに緊張の色を見せたが、小さく頷いた。

両親から生まれた以上、こんな道を生きてきた以上、避けては通れない。

退院の日取りも五月頃と大まかに決まり、そろそろ込み入った話が始まるだろうとは思っていた。

「辛くなったら言ってね。止めるから」

「大丈夫です。止めなくて良いです」

歌音はしっかりとした目で笑った。

恭一郎は微笑いながら息を吐き、よしよしと歌音の頭を撫でる。

「…解った。じゃあ、始めるよ。」

お母さんを恨んでる？」

「恨んでは、ないです」

「じゃあ嫌い？」

「…判らない。でも、ママはきっと私を嫌ってる」

「歌音はママの事、好き？」

「それも、よく判りません。良くしてもらった事、あんまり覚えてないから」

「そっか。じゃあ…、パパは？」

「パパは大好き。凄く、大好きだった」

記憶の中で、母親はよく二人を間違えていた。

『どうしてこんなにそっくりなの…』

始めの頃は面白可笑しそうに。

でもそれは段々疲労の滲んだ声になっていった。

父親だけは詩音と歌音を間違えず、それが子供心に凄く嬉しかった事を覚えている。

二人を間違えた時、母親が絶望に似た目をした事も覚えていた。幼い頃はそれが自分達に対してのものだと思っていたが、今になると我子を幾度も間違える自身に嫌気を感じていたのかもしれない。

「パパが死んだ時、どう思った？」

「：凄く、悲しかった。今でもパパがいない事は、凄く淋しい。」

昔、パパが真っ白いデディーベアをくれて、それにレイちゃんって名前をつけたの。

パパの名前がレイジだっていうのは知ってたから。だから、ママは余計に嫌がったのかな：」

「どうしてさ」

「だって、ママは再婚してたし、昔の夫の名前のついたぬいぐるみなんて、嫌でしょう？」

：パパが死ぬ前の日、パパが言ったの。私達は、パパの代わりだよって。ママを二人で守ってねって。

今なら解るの。きっと、パパの復讐だったんだって」

過去を思い出す声はぼんやりとしていたが、歌音の目はしっかりとしていた。

視線は白い机の上に張りついたまま、けれど取り乱す際に見せる虚ろな色はない。

それでも机に置いた手は微かに震えていて、それに気づいた恭一郎はそっと細い手を握ってやった。

縋りつくように、頼りない力で握り返してくる。

「ママは、浮気してたの。その頃パパは仕事が忙しくなって、家を空ける事がくて：。」

パパが帰って来ない日は、ママも何時の間にかいなくなってた。起きたら誰もいなくて、机の上に置いてあるお弁当を二人で食べる

の。冷たくて、凄く嫌だった。

パパは多分勘の良い人だったと思うから、ママの浮気に大分早くに気づいてたはずだわ。

それに私達、パパにだけ似てる。ママと似てるどころ、本当に少ないの。小さい頃は私の方が似てたけど、最近じゃ詩音は本当にパパに似てるの。

今度先生にも写真を見せてあげる」

歌音は顔を上げ、少し悲しげな笑みを見せた。

今にも涙を落としそうに潤んだ目だ。

「止めようか？」と恭一郎が声を掛ける前に、歌音は握った手にもう少し力を入れて口を開いた。

「大好きな人に裏切られたら、どんなに優しい人だって、その人を恨みたくなる。

私、パパの事何も知らないけど、パパが自殺したのは、そんな自分が嫌だったからだと思うの。ママの事を愛してるのに、おんなじくらいの憎しみを持つのは、辛いもの」

「パパの気持ち解る…？」

「…凄く解る。詩音の気持ちも解るの。

詩音は、カモフラージュだって言って、色んな女の子と付き合ってた。

多分、それは、私がちゃんと感情を見せられないからだと思うの」

予想以上だ。

恭一郎は「びっくらこいた」と言いたいのを内心で抑え、いつになく饒舌な歌音の言葉に耳を傾け続けている。

歌音は予想以上に自身の状態と過去の周囲の状況を捉えていた。彼女が語る父親の内情は、彼の日記が語っていたものと似ている。

「私が一番嫌いな感情は、嫉妬なんです」

「どうして」

「…醜いから。でも、詩音が嫉妬してくれるのは、少し嬉しかった。詩音は、素直に感情を出せるから、羨ましかった。でも詩音は、私が嫉妬を見せないから、不安だったんだと思う。私が感じた嬉しさを、詩音も感じたかったんだと思う。」

想い合ってる間の嫉妬は、愛情を感じられるでしょう？愛されてるって、確信できるでしょう…？

…だから、詩音はそれを感じたかったの。感じて、安心したかったの。

でも、私は怖いから、出来なかった。これからも多分、出来ないと思う。詩音の気持ちは解ってるけど、嫌われたくないから駄目なんです。

本当は、詩音が他の子と仲良くしてるだけで、物凄く苛々するの。私じゃない誰かとキスをして、セックスもしてるのかと思うと、気持ち悪くなって堪らないの。…だから、パパの気持ちがよく解る」

あらあら、と言いたげな面持ちを紙一重のところで押し込め、妙なくすぐったさを感じる恭一郎は空いた手で口元を押さえた。

歌音自身は自分の気持ちを環境が寄越した異常なものかもしれないと思っっているようだが、きちんと普通の恋愛をしているじゃないか。前にジェーンが言っていた「普通の恋愛をしてきた」という言葉に一層の真実味が増し、変に嬉しくなった。

切っ掛けは確かに環境が寄越した異常な関係かもしれないが、育んでいる愛情はその辺りに転がっている多くの恋愛と何ら違いがない。

「…だから、レイプされて、それが詩音にバレた時、心なんて要らないと思ったの？」

酷い質問だな、と思いながらそっと問う。

手を握る歌音の手が微かに震え、それからぎゅうっと強い力で握られた。

「私の心は、詩音のものなの。詩音の心は、私のものなの。」

だから、…された時も、死にたくて堪らなかったけど、大丈夫だって思った。

絶対に詩音以外に触らせないつもりだった身体が、詩音以外に触られても、心は詩音が持つてるから大丈夫だと思ったの。

でも…ああ、そっか…あの時、私、詩音が怖かったんだ…」

胎に芽吹いてしまった命が自分ではない他人のものだと知った詩音は、冷え冷えとした怒りをその目に浮かべていた。

絶望の原因は既に死んでいて居らず、強烈な怒りを吐き出す対象がない。

詩音の手にあった歌音の心は、詩音の手によってピシリと音を立てた。

「詩音は凄く怒ってて、でもそれを態度には出さなかった。

眼だけ、凄く凄く怒ってて、冷たかった。私に向けてる怒りじゃないって、解ってたけど、詩音にそんな怖い怒り方をさせたのは、私だから…。」

その頃、私パパが死んだ原因、何となく解ってた。だから、パパもあんな眼をしたのかって思ったら、同じ想いをさせた、自分が…赦せなくて」

カラリと扉が開いた。

歌音と同じに泣き出しそうな目をした詩音が無言で近寄り、驚きに言葉を呑んだ妹を横から抱き締める。

片手の平で彼女の目元を覆い、眉を寄せたまま頭の天辺に頬を寄せた。

「立ち入り禁止の札、出てたはずだけどー？」

「……ちよつと、黙っててよ……」

寄せた頬を引き、額をそこに押し当てた詩音の顔は完全に見えなくなった。

声が涙の色を滲ませて震えている。

全く、いつから立ち聞きしていたのだろう。恭一郎は呆れた笑みで嘆息した。

机上で握り締められていた震える細い手は呆気なくするすると遠ざかり、肩口に回った詩音の右腕をぎゅうと握り締めている。

「じゃ、今日のカウンセリングはお終い。

気が済んだら病室帰るんだよ」

泣き声を漏らし始めた歌音に声をかけそろそろと退室した恭一郎は、出口でハンカチを噛みながら号泣するジェーンを見つけるとビクリと肩を竦める。

「良い話ねえ」と、自慢のアイメイクをぐちゃぐちゃにして泣きじやくるジェーンの背をぽんぽんと叩きながら医務室へ歩いて行った。

「…俺、カノを怖がらせてた…？」

「違う、違うよ…違うの…」

死ねば良かったのは父親ではなく母親で、傷つけば良かったのは歌音ではなく自分だ。

歌音は本音を言わない。自分を見せようとはしない。それに苛立ちを感じる事もあるが、だからといって傷つけようと思った事は一度としてなかった。

大事で大切に堪らないのだ。

一緒に生まれてきたのだから、死ぬ時も一緒だと信じて疑わない。

「もう、誰とも付き合わない」

「違う…、そんなんじゃない、違うよ」

「良い、違わない。」

カノが、嫉妬とか、そういうの嫌いな事、俺はちゃんと知ってた」

詩音は二人の関係を極一般的で自然なものに見せようと、歌音以外の少女を傷つけてきた。

少女達の傷を詩音がどう思っているかは知らないが、歌音はそれによって詩音が少しでも傷つく事が嫌だった。それは、その少女を想う事になるからだ。

詩音の心を持ち彼の本心を知っている癖にそう思う心の狭い自分が本当に嫌で、こんな苦しい想いを詩音が抱える事が嫌だった。

「私、シノを、傷つけたの…シノは、シノは…っ」

「…俺達に言葉なんて、要らなかったはずなのに…どうして」

いつの間に、言葉がなくては伝わらなくなったんだろう。

手を繋げば、それで良い。言いたい事はそれで伝わって来た。

額を合わせれば、大抵何を考えているのか分かった。

唇を重ねれば、どう想われているのか、痛いほど身に染みた。

別人であり他人である事を確かめる以外に身体を繋げたのは、その全てをより強くするためだ。

摺り寄せた頬の上で涙が混ざり合う。

小さな顔を引き寄せ、神経のない長い髪の毛をくしゃりと掴んだ。
本当は傷つけたとか、傷つけるとか、そんな事はどうでも良い。
離れなければそれで良い。

たとえそれが束縛する事になっても、可能性を踏み潰す事になっても。

詩音はただ、歌音を大切に扱いたいのだ。

これ以上誰にも傷つけられないように、再び自分の手が妹の心を壊さないように。

ただ大切に愛おしく、過保護なまでに守りたいだけ。

歌音は、詩音を傷つけないでただけだ。

傷を押し隠し見せまいとする兄のボロボロに傷ついた心を、これ以上引き裂かないように。

あの時のような、怖ろしく冷えた眼をさせたくないのだ。

この世の中はそれすら赦してくれない。

言葉を棄てた兄妹は沈黙の中で額を重ねる。

落ち始めた陽が、二人を鮮やかなオレンジと黒に染めていた。

詩と歌の音―12―

最近詩音の姿を見ていないな、と恭一郎は唸った。

見舞いに訪れる日数が減ったのは、歌音の病状が安定を見せているからだけではない。

制約のあった仕事量が解禁を迎えた事で急増しているのだ。

ジェーンに命じられた詩音のマネージャーが規模の大小を問わず仕事を請け負うため、四月に入ってからというものの彼の休みは殆ど無い状態にあった。

歌音が退院してしまえば接触の機会は激減するのだから、それまでもう一度カウンセリングを試みたいと思っていたのだが。

机上に散乱したカルテを片付け、ふと手に触れた封筒を広げる。

数ヶ月前に夕実が和訳してくれた暮野零人の日記だ。

暮野零人は出生に関係するのだろうか、自分の家庭というものに強い憧れを抱いていたようだ。

双子が生まれ、そこから妻の浮気に気づくまでは子煩悩で親馬鹿としか言えない日々を綴っていた。

その一方で、手にした自分だけの幸せが壊れる事を酷く恐れていた。そしてそれは哀れな事に、あっさりと壊れたのだ。

歌音は言った。

『ママの事を愛してるのに、おんなじくらいの憎しみを持つのは』と。

暮野零人の日記を読み返す度、彼は本当に双子の母親を愛していたのだろうかという疑問が浮かび上がってくる。

『ママだけなんだ』

そう存在に固執する一方で、

『大嫌いだ』

そんな否定の言葉を使う。

彼は重度の鬱病にかかっていたと同時に、慢性的な人格障害にあったのではないだろうか。

詩音はまるで彼の軌跡を辿るような生き方をしている。

数日前、歌音に「詩音はパパとママをどう思ってると思う？」と聞くと、彼女は、

「パパの事は凄く尊敬して愛してる。

ママの事は、パパを想うのと同じくらい憎んでる」

と答えた。

その答え通りだろう。

連想ゲームの中のキーワードの一つに「動物」があった。

人間以外の動物ほど母性父性本能の強い生物はない。

詩音は動物を汚いときっぱり言い放った。

それだけ親という存在に期待していないし、在るのは恐らく嫌悪感のみ。

母親と和解しろとは言わない。けれど、あの母子は少しの歩みよりも見せないまま一生を終えるのだろうか。

そう思うと、少しだけ可哀想だった。

「先生」

コンコン、と扉を打つ音が二回。
声は歌音のもので、恭一郎は「はいよー」と気の抜ける声を返しながら扉を開けた。

「詩音、来てますよ」

「んあ？ 久しぶりだねー。水入らずしないの？」

「だって、先生、詩音と話したいんでしょ？」

扉口に寄りかかる恭一郎はパチパチと目を瞬かせた。
歌音は妙に確信を持った目で見上げるだけだ。

「どして」

「だって、そんな気がしたから。」

詩音、明日はやつとお休みだって。先生と話さない？ って言ったら、少しなら良いよって」

「マジで？」

「うん」

こくんと頷く歌音に、恭一郎は「盲点だった…！」と額を押さえた。
初めから歌音に頼んでいれば詩音も素直に従っていたのか。

「部屋にいる？」

「はい」

「じゃ、カウンセリング室で話してるから…悪いね」

「あ、パパの写真も持ってきてもらったの。
後で見せてあげます」

「そっかー！ 楽しみにしてるよん」

くしゃくしゃと歌音の頭を撫でた恭一郎は浮き浮きとした足取りで

病室へ向かう。

楽しそうな後姿にくすくすと肩を揺らす歌音は、ふと恭一郎の机に目をやった。

B5サイズの紙が机上に散らばっている。

普段なら何も思わずに立ち去るのだが、歌音は引かれるように医務室へ入った。

——カウンセリング室

「いつまで笑ってんすか」

「そう不機嫌になんないでよ」

歌音の頼みでしょー？」

「：で、今日のカウンセリングは何です？

もう話す事なんて無いと思いますけど」

詩音は不機嫌を露に頬杖をつき、ツンケンとした目で恭一郎を眺めた。

対する恭一郎は上機嫌で、カルテの用意もせずにニコニコとしている。

「カウンセリングっていうかさ、ちょっと話したいだけ。

君が立ち聞きしてた話、何だったか歌音に聞いた？」

あの日は、歌音が「嫉妬が嫌い」と言っている部分から話を聞いて

いた。

詩音は溜息を吐くと、頬杖のまま頷く。父親と母親の事について話していたらしい。

歌音は傷ついた様子もなく、「久しぶりにパパの写真を見たい」とまで言った。

急に彼女が大人になったような気がして、妙な焦りが生まれている。一人でスタスタと歩いて行ってしまいそうな、凜とした空気を纏っていた。

「同じような話、君から聞きたいんだけど…無理そう？」

「…判んねー。あんま、考えないようにしてたから」

「だろうねえ。俺だったら一生考えたくないと思うし」

「だったら何で無理矢理聞き出そうとすんですか。」

「考えたくないから考えないんだし…」

「うん…まあ、君達じゃなかったら別に無理して聞こうとも思わないんだけどね」

妙に引かかる言い方に詩音はぴくりと眉を寄せ、更に鋭く恭一郎を睨んだ。

彼は既にニコニコとした笑みを引っ込め、神妙な顔つきをしている。

「この先一生、歌音と生きて行くんだろ？」

「そのつもりだけど…」

「君が別の誰かを愛して、歌音が別の誰かを愛してるなら、これはそんなに問題じゃないんだ」

「ふざけてんの？」

「違うって。」

詩音が歌音を守って生きたいなら、まずお前が自分の両親と向き合わなくちゃならない。母親を憎んでも良い。でも幾ら憎んでも、彼女はお前の母親なんだ。

歌音はそれをちゃんと理解して、向き合ってるよ。

一度も見舞いに来なくても、一度も可愛がってくれてなくても」

詩音の眉は益々不機嫌に寄った。

雰囲気がどんよりとした禍々しいものになり、本気で苛立っている事が分かった。

母親と聞くだけで虫唾が走る、とでも言いたげな目をしている。

「歌音が本当は母親を欲してる事、詩音は知ってるんだろう？」

詩音は視線を落とし、脚に置いた右手を握り締めた。

小さい頃から、父親が生きていた頃から、歌音は母親に甘えようと必死だった。

母親が自分達を捨てたのだと理解したのも詩音の方が早く、「ママはどうしたの？」と訊く歌音に「ママももういない」と納得させるのは至難だった。

漸く母親がいない事に慣れ、世界に二人だけだと納得させた頃、彼女は再び二人の前に現れた。

歌音は喜んで駆け寄ったのに。

慄いたような目に気づいた歌音は怯え、結局手を繋げなかった。

「……知ってたよ」

絞り出した声で答える。

父親の名前を取ったテディベアが捨てられ、詩音も自分の機関車の玩具を捨てた。

愛されたくて堪らなかった歌音はいつしかそれを諦め、「ママ」と呼ぶ事も止めた。

歌音はただ、花菜のように抱き上げられ抱き締めてられ、頭を撫で

てもらいたかっただけだ。

自分ではない、父親でもない、母親であるあの人に。

だから、あの人は簡単に歌音を奪える。

「先生、俺の事、汚いと思う？」

「何でさ」

「歌音は…俺が洗脳したんだ」

あの人は簡単に奪えるのだ。

努力もなく、少しの気まぐれで、簡単に。

それが腹の底から怖ろしく、自分しか愛せないように言い聞かせた。幼い頃は妹を守ろうと必死で、純粋な気持ちだったのだろう。

年齢を重ね恋という感情を覚えてからは、彼女が離れていかないようにと必死だった。

家族から孤立したのはあの家庭にも要因があったが、自分にも原因があったのだ。

信じられるのも頼れるのも自分だけだと、施設に入れられた日からずっと、純粋を汚穢に変えながら囁き続けた。

「俺以外、見えないように。」

小さい頃からずっと、カノには俺だけだって。

死ぬ時も一緒だから…だって、俺にはカノだけだ…」

真剣な眼だ。

その顔は微笑ってもしないし、残忍な光を滲ませてもいない。ただ無表情で、機械的な声。

いつか詩音が言った、「裏側」だ。

「初めまして、詩音。
やっと会えたねえ…」

僅かに顔を近づける。

灰色の目に映っているのは、彼が会話をしているのは、本当に自分だろうか。

「俺は、汚い…？」

「汚くないよ」

「俺が洗脳しなきゃ、カノは俺を捨ててた」

「捨てないよ」

「俺はカノから全部奪ってきた…。」

母親も、妹も、友達も…」

「怖かったから？」

微かに、詩音の肩が震える。

彼は長い間、見えている敵と未だ見えない敵に怯えている。
殺したいと思うほど、歌音を奪われる事に怯え続けている。

「だって、俺にはカノだけ…。」

カノの世界も俺だけにしないと、俺、オカシクなる。

カノの事殺すかもしれない。何回かあったんだ…本気でそう思った事」

「でも、しなかったでしょ？」

歌音は自分の意思で詩音を愛してるよ。歌音を疑うの？」

「疑ってない…でも、先生。」

俺は、パパと同じだ。パパは“気に食わなかったから”、あの人を殺したくて堪らなかった。

殺せなかったから、自分を殺した。でも俺は多分、殺せる。

殺したくないから：守りたいから、ずっと言い聞かせてるんだ。
先生、それでも俺は汚くない：？」

結局は自分が可愛いのだ。

失う事を恐れ、失うくらいならと妄想する残酷なそれを恐れ、純粋さを失くしていく心を恐れ、父親のようになる事を恐れている。傷つけた事はない。わざと傷つけようと思った事すらない。

大切に大切に、人に傷つけられるくらいなら。

判らない。

どれが自分の本心なのか。

歌音を愛している事すら、愛されている事すら、時々本当に判らなくなる。

まるで互いが一人の人間なのかもしれないと思っていた時のように。

でも、歌音は綺麗だ。

こんな自分と似ても似つかないほど、きれいで。
だからまた、判らなくなる。

――街中の公園

病院の緑スリッパでベンチに座る歌音は目立っていた。

恭一郎のデスクにあったのは父親の日記だろうと思われるもので、その内容は日を追うごとに目を逸らしたくなるような憎しみに溢れ

ていた。

憎しみと、哀しみと、自分達への疑いような愛情。

白いワンピースがひらひらと春風に揺れている。

頭上では枝を伸ばした桜の花弁が風に吹かれて舞っていた。

どうして病院を飛び出してしまったのだろう。

ただ何となく、いつもとは違う場所で泣きたかった。

パパを想って泣きたかった。

どれ程辛かっただろう。

大好きなパパは、愛を識らなかった。

あの大きな温かい手で、泣きたくなるほどの愛情を教えてくれたのに。

可愛い子供を復讐に使うしかなかった“本当のパパ”は、どれほど泣きたかっただろう。

「……歌音？」

ふとかかった声に顔を上げる。

涙が滲んだ視界では誰だか判らなかったが、声は知らないものだった。

慌てて涙を拭いたが、知り合い自体が少ない歌音ですら覚えのない男が目の前に立っている。

長身で、サラサラとしていそうな黒髪が風に揺ら揺らと揺れていた。

歳は三十を過ぎたくらいだろうか。いや、判らない。若々しい外見だ。

「病院は？」

「あの、どなた…ですか…？」

「ああ…抜けて来たのか。その様子じゃ」

男は視線を足元に落とし、ぷはあと煙草の煙を吐き出した。

脇に透明のファイルケースと折りたたみの電子ピアノらしきものを持っている。

さらりと髪が流れ、右耳の赤いピアスがキラリと光った。案外鋭い光に、思わず目を顰める。

「お前、零人の娘だろ？」

俺はアイツの知り合いだ」

「パ、パパを知ってるの?!」

「……嫌になるくらい知ってるよ。

で、そんなカッコでどうすんだ。病院帰んなきゃなんねーだろ」

ジュ、と水に浸かった煙草が小さな音を立てた。

男はベンチに腰を掛けると脚を組み、シラツとした視線を投げてる。

淡々とした雰囲気が苦手だ、と思いながら、歌音は僅かに俯いた。

「帰り道……判らないんです」

「…はあ？」

「わ、私…方向音痴で……それも、慌てて出てきたから靴も履いてなくて…」

もじもじと膝の上で指を絡ませる歌音はボソボソと現状を告白し、情けなさに肩を落とした。

邪魔が入ってしまったから泣くにも泣けない。

しかもそのお邪魔虫は父親の知り合いらしい。

暫く経ってから「くっ」という笑い声が聞こえ、歌音はそろそろと顔を上げた。

ジェーンと同じ年齢不詳の匂いのする男は口元を押さえて肩を震わせている。

「やっぱお前、あの人の子供だな。」

後先考えねえところも方向音痴もそっくりだ」

「あ…はあ、…ごめんなさい」

「で、帰りたいのか帰りたいか、どっちだ」

「あ、う、帰、帰りたいです…できれば、大事になる前に…」

「もうなってんじゃねーの…。ま、良いや。」

病院、何てとこだ」

「ゆ、悠久の森っていう、療養施設なんですけど…」

「あー…？電話帳ねえや…ボックスなくなんのも考えもんだな…。」

山梨さんに電話すつか…」

ボソボソと申し訳なさそうに畏縮する歌音は、男がブツブツと呟く度に肩を落とした。

零人にそっくりだと言われた事は物凄く嬉しかったが、病院を出て既に一時間以上経っている。彼の言った通り、後の事を考えもせず飛び出したから、長閑な病院は今頃大騒ぎになっているかもしれない。

ボソボソと低いトーンで話す男の携帯から「はあーっ?!」というジェーソンの野太い叫び声が聞こえ、歌音はびくりと跳ね上がる。男は眉を顰め、腕を伸ばして携帯を耳から数秒離すと、「送りますから、病院の場所教えて」と元のトーンで会話を再開した。

「行くぞ」

「え？あ、はい」

笑っていた時は柔和な雰囲気が見えて少し安堵したが。

男はクールな態度で出発を促すと、少し離れた駐車場へ足を進めた。

「あの…、お名前…」

会話のない車内の空気は重い。

音楽があればまだ気が楽だったかもしれないが。

「あ？ ああ…言ってなかったか。」

柏井だ。柏井彰二」

「柏井さん…、ご迷惑をおかけして、すみません」

「別に。あの公園は煮詰まった時に行くんだ」

「煮詰まる？」

「仕事。あの公園、人少ないだろ。でも周りの音は適当に聞こえてくる。」

作曲する時の雰囲気合ってたんだ。俺のな」

「作曲…：うわあ、歌手の人ですか？」

どこが心の病気なんだ、と思いつながら窓を開けて煙を追い払う。

ワンピースパジャマという場違いな恰好の野郎がベストプレイスに居座っている、と近づいた彰二は、ホロホロと泣いていた歌音の顔を三度確認している。

何度確認しても、それは古い友人であり仲間であり尊敬していた男の面影を残していた。

こうして話す分にはどこにも異常など感じられない。

「俺は歌手じゃない。今はただの作曲家。」

昔歌ってたのはお前の親父だ」

「パ…：パパ…？」

「聴くか？ お嬢さんが聴くような曲じゃなくて、ウルセーただけだな」

こくこくと頷いた歌音は、スピーカーを割るのではないかという音量にビクツと竦みあがった。

彰二は別段慌てた様子も見せず、「あ…音上げたまんまだった…」と呟きながらのろのろと音量を下げる。

悲鳴のようなギターとそんなに叩くと割れるのではないかと思ってしまうほどの激しいドラムの音に紛れて一番初めに聞こえてきたのは叫び声だ。

髪を振り乱し、姿勢を低くして出しているような気がした。

「パパの声…」

もう忘れてしまったと思っていた父親の声だ。

たった二年しか聞いていなかった声なのに、確かに彼の声だと確信できる。

詩音の声に似ていた。もう少し歳を取れば、詩音も同じ声になるのだろう。

「パパだあ…！」

中学レベルのヒアリング力しかないために、捲くし立てる英詩は部分部分を聞き取るしか出来ない。

はつきりとその意味は分からなかったが、父親の声がこの世に残っている事が単純に嬉しかった。

日本語詩の部分では感動も更に大きくなる。

詩音にも聞かせてあげたい。

「そんなに気に入ったんなら、やろうか？」

「え!?! 良いんですか?!」

「それ、焼いたヤツだし。バカみてーに売れたんだ、そのCD。

ボーカル死んで、遺作になっちゃったからな。まだレンタルして

んじゃねえの」

「あ……そっか…、ちゃんとデビューする前に死んじゃったんだっ
た」

「お前、知ってたのか？」

「さっきまで、忘れてたんですけど…パパの日記見ちゃったから、
大体の事は知ってます。

あ、ショーちゃんって、柏井さんの事なんですネ。

ゆっくり読んでないからあんまり覚えてないけど、パパ、私達以
外にもごめんって書いてたんです。その中に、ショーちゃんってあ
りました」

パラパラと目を通したそれに、「ごめん」という文字は沢山散らば
っていた。

母親への謝罪は、悲しい事に一つもなかった。

「大嫌いだ」という憎しみの滲んだ言葉は幾つもあったけれど。

「…謝るぐらいなら死ぬんじゃねえよ」

「あの…パパの事、怒ってますか…？」

「あ？何で」

「だって、バンドがこれからっていう時に死んじゃったんでしょ
う…？」

おずおずとした歌音の問いに、彰二は暫く口を閉ざし、ふと微笑っ
た。

優しい笑顔だ。

歌音は瞬き、恐る恐る答えを待つ。

「怒っちゃいない。

あの人は生きてた時から俺ん中じゃ神様みたいなもんなんだ。

まあ、人の親に言う言葉じゃねえけど…生きながら死んでるみた

いな人だったからな」

微笑のまま告げられた答えにほっと息を吐く。

それから病院に着くまで会話は無かったが気にもならず、歌音は煩い音楽の中で生きる父親の声を聞いていた。

歌音は帰院して早々、目を丸くした。

まず、ジェーンが一発彰二に拳をお見舞いし、彰二はその後二発お返しを贈った。

どうやらジェーンは彰二が歌音を浚ったと勘違いしていたらしい。おいおいと泣きながら無事を喜ぶ彼の抱擁を、歌音は照れくさそうに瞬きながら受けた。

そして再び彰二に向けて喚き始めたジェーンを放って院内に戻る。出迎え衆の中に詩音と恭一郎の姿がなく、何となく変な感じがした。

ぱたぱたと小走りになりながら通り過ぎる部屋の一つに、恭一郎の姿を見つけて足を止める。

彼は可哀想なくらいにボロボロになっていた。

小言を漏らしながらも手当てをやってやっている紗江子に話を聞くと、零人の日記を出しっ放しにしておいた事が夕実にバレ、それを歌音が見てしまったと推理した彼女が暴れたらしい。

おっとり推理は見事に的中しており、とぼっちりを食らわせてしまった事を詫びてから詩音を探して院内を駆ける。

もしかすると未だ自分を探しているのかもしれない。

そう思って踵を返し、玄関へ向かう。

「カノ！」

ああ、何というか、不謹慎だ。

詩音は器用で要領も良いから、大した努力をしなくても簡単に何かを得られる。

目に見えるものも、目には見えない感情も。

だから、彼は余り焦らない。

放っておいても自分の手に入る事を識っているからだ。

必死になるのはいつも、歌音が絡んだ時だけ。

不謹慎だ。

そう思いながら、抑え切れない笑みを浮かべて両腕を開く。

息を切らす詩音は誰も目に入らないまま、腕に飛び込んだ歌音を抱き締めた。

汗が止まらない。腕が少し震えている。

抱き締めた腕で歌音の無事を実感すると、がくつと膝が折れた。

「シ、シノ?!」

ざらついた石の上に膝をつく詩音につられて姿勢を低くした歌音は、額に強烈な頭突きを喰らった。

「っ、バ、バカ!!!」

「ごっ、ごめ:!!」

耳元で叫ばれ、くらりとした眩暈を感じながら手を合わせる。

「無事で、良かった…」

「ごめんね、ごめんね…」

どうしても、不謹慎だ。

心配させた事を痛切に感じ取った心が涙を流すのに、こんなにも心配される事が嬉しくて堪らない。

「…一人にしないでよ」

耳朶に触れるほんの少しだけ震える声が、歌音の心を強く揺さぶる。こんなに好きなのに、仲の良い兄妹にしか見られず、けれどそうしていいないと生きてはいけない。

ごめんね、と囁き返す歌音は未だ気づいていない。

詩音の言葉を冗談に受け取るつもりはなかったとしても、重いものだとは思わずに。

少女らしい浮かれた心は、微かに震える兄の腕には気づかないまま。

「僕」と「俺」

どうしても溶け合えない、二つの人格。

人の中には善と悪が必然的に在って、成長と共にそれを巧く平衡させて生く。

誰もが当然とそれを為す中で、自分だけがそれを為せない。

平然と悪事を為す大人の中に在って、たった一つ差し伸べられた手。それを掴み取り、捉え続けていくには「俺」を消す必要があった。だから「僕」は「俺」を扉の奥に仕舞いこんだのに。

あいつは、柔らかな暗闇の奥からじっと見つめている。

何をするでもなく。ただ、じっと。薄い嘲笑を浮かべながら。

暮野零人。

彼に関わる人は皆一様に彼を賛美する。

高潔な顔立ち、すらりとした体躯、柔らかな物腰に高い知能と体能。生まれ持ち身につけたそれを鼻にかける素振りも無く、正に完璧な人間。

賛美の中に在りながら、彼は一人微笑う。

当たり前だ。あの人達の手を離したくない。完璧であればあるほど、信頼はついてくる。

「お前、そんなんだから捨てられんだよ」

どうしても忘れられないその言葉を思い出す度、彼は完璧を纏う努力をした。

優しい父と母。血の繋がりのない二人。

国の目が届かず、情勢の定まらない田舎の孤児院は、犯罪に塗れていた。

そこから救い出してくれたたった一つの手。

彼の手を取った瞬間から、捨てられないための努力は始まった。

幸い頭はすこぶるよく出来ていたから、異国の言葉もすんなりと覚え、自分のものにした。

まるで生まれも育ちも日本だというように、小学校の入学にあっさりと間に合った。

テストで満点を取る。当然父母は喜んでくれた。

その時の喜びは、快感に似ていた。

休みの日は家族揃って少しの遠出。母の手作りのお弁当に、父が回すビデオカメラ。

充実した日々。愛を得るために努力し、それが報われていく達成感。

ひっそりと、「僕」を見る「俺」

知らないふり。気づかないふり。

多分、歯車は、ずっと昔に狂っていたのだ。

きっと、生まれてしまったその瞬間から。

不要だから、捨てられたのだ。

娼婦街の真ん中にある孤児院に、要らない子は沢山いたから。

「レイ」

パンツと手の鳴る音が響き、零人ははっと顔を上げた。
白黒ストライプの大布がひらひらと揺れている。

「けーちゃん」

「イッてた、目」

「考え事してたから」

「考えんな。お前バカなんだから」

ふー、と吹かれた息に乗る煙が行過ぎた。

『一緒に行こう』

善悪もない汚い場所から、あの人は連れ出してくれた。
大好きなお父さん。

『あなたは今日からレージよ』

少し太った腕と胸の抱擁。栄養失調で干乾びた身体がふわりと包まれたあの瞬間。

陽だまりのようなお母さん。

「お前が心配だ。レイ」

「大丈夫」

「心配だ」

くしゃりと髪を掴むように頭を撫でる手。

この世でただ二人だけ、零人の異常を識る人間の一人。

敬輔が零人と知り合ったのは、零人が中学生の頃。

その頃から、零人は完璧に出来上がった人間の顔をしていた。

柔和そうな、それでいて中身の無い笑顔。張り付いた鉄仮面と同じだ。色がない。

それでも、遺影の中で笑う初老の夫婦の前でだけは、微かな色が見えていたのに。

「レイ」

「大丈夫だよ、けーちゃん。

僕、そんなに子供じゃない」

「お前がそうやって微笑うと、俺はどうしていいか判らなくなる」

否定ではない微笑。かといって、肯定でもない。

ただ、ここから先へは踏み入るなという、柔らかな拒絶。

零人の背後に揺れる薄暗い影を見つけた人間は、敬輔が一番初めだった。友人とどこことなく似ている雰囲気があったからだ。

時々錯覚しそうになる。誰も彼を救えないのではないかと。

零人は望んでいないのだ。救われる事など、ほんの少しも。だけど。

「大学、どうすんだ」

「：踏ん切りがついたよ。

あの話、ちゃんと受ける。だから、行かない」

「あいつ等は、大喜びするだろうな」

寄り添う棺の前で静かに目を伏せる男と、泣き喚く男、涙を堪える少年が一人。

ちらりとそちらに視線を流し、零人は苦笑した。

「：胸がね、スカスカなんだ。

お父さんとお母さん、ほんとに大事だったから。

歌う事に逃げてるだけかもしれない。それでも、敬ちゃんは許してくれる？」

そこに山が在るから登るのだ。

割と高い確率で見聞きする有名な言葉。

零人にそれは当てはまらない。彼はただ、そこに才能があったから歌うのだ。

歌う事自体にこれといった熱意も感情もなく、ただ本能的に才能を使う。

じつと窺うように見つめるグリーンアイは、敬輔が否と言う理由がない事を知っている。

仮メンバーとして時々ライブハウスに立つだけのヴォーカルは、客の入りを左右するのだ。

不可思議な声と、容姿と、本能の歌様に、客は惹かれていく。

「レイの気がそれで紛れるなら」

ただのミーハーと言っているいいほど、暮野邸には音楽が溢れていた。

クラシックからジャズ、ロックにポップス、演歌に歌謡、果てはヘビメタまである始末。

週に一度は家族と周辺の仲間を巻き込んだのカラオケ大会。

当時高校三年だった敬輔は親に誘われ参加し、その場で零人の歌声に惚れた。

声変わりを済ませてその魅力は健在で、彼が高二の頃バンドに誘った。

自慢の息子がステージに立つと知った時の暮野夫妻の興奮といったら。

恐らく彼らは完璧でありすぎる零人に少しの悲しみを抱いていて、彼が本当に熱中できるものを探していたのだろう。確かに、音楽は零人にとって良い意味での逃避に成った。今も、昔も。

「けーちゃん、子供が出来た」

「…んあ？」

「ほら、実南っちの友達の子が一回楽屋来たでしょ」

そういえば、二ヶ月だか三ヶ月だか前に一度だけ。場に似合わない女だな、その程度の薄い印象しか持たなかった少女か？

記憶を手繰り寄せながら首を捻る敬輔の横で、零人は肩を震わせた。むっとした目で零人を見る。

「喰ったのか？」

「今までのタイプと違ってたから、つい」

「……実南のダチつつたら、大抵お嬢だろ。」

やめとけ。堕ろさせたがマシだ」

「やだ」

「どうせ長続きしない」

「そうかもね。それにあの子、僕の嫌いなタイプだし」

「じゃあ何で意味深な報告？」

微笑う。

肯定でもない否定でもない。

「捨てられないんだ。勿体無くて。」

圭子ちゃんも、子供も、勿体無くて」

「後悔するぞ」

「長続きしないから？」

「犬猫拾うのとは違うんだ。でかくなりゃあ人格が出来る。

人間養うってのは、面倒だ」

「正論だね」

敬輔はいつも正しい事を言う。

それは零人を束縛するし、解放もする。

今回もきつと、敬輔の言う通りにすれば後々は楽だ。

救いを求めているくせに、零人はどこかで期待している。

いつか、二つの自分が融合する事。誰かがその切っ掛けを与えてくれる事。

良い機会だと思った。

甘える事を決意する前に断絶されてしまった、父母が生きていた頃の、彼らが作っていたあの暖かい世界にもう一度触れられれば。

他の誰でもない、自分の子供を使って。

「零人さん！結婚するってホントですか？！」

「うん、ほんとほんとー。来年には子供も生まれるよん」

「何っだよ！！俺越されたじゃん！」

「涼太は新婚ホヤホヤだからねえ。」

でもまあ、敬輔がよく許したね」

「けーちゃんは結局、僕に甘いから」

ショックを顔面全体で表現するバンド最年少ギタリストの彰二、ベীシストの彩、ドラムの涼太は、突然の入籍報告に各々の反応を見せた。

特に、零人を敬愛する彰二は顔を青くさせてブツブツと不平を漏ら

している。

「しょーちゃんは僕が結婚するの反対？」

「女は男を腑抜けにさせます！」

真剣な顔の表情は怖ろしいなもの。

ピチピチの十六歳男子の発言とは思えないそれに三人は瞬き、唐突に吹き出した。

「お前武士かよ！ 武士か！！ よう野武士！」

「ちよっ、やめて下さいよ！ 涼さん！」

「やだねえ、シヨーは純情なんだか老けてんだか。

心配しなくてもレイは腑抜けないよ。女じゃ。ねえ？ レイ」

敬輔の他に、零人の本質を見抜いているのは彩だけだ。

意味深な笑みと問いを、零人は笑って流す。

彼の言う通り、腑抜けはしないだろう。

敬輔も彩も、そんな事は欠片も心配していない。

もっと先の、奥の、深い、別のものを。

愛らしい二つの命を抱いた瞬間、流れた涙は贗物ではないはずなのに。

「双子ちゃん元気？」

「元気だよ。パパって言えるようになった」

「…どうしてそんなに浮かない顔？」

「さーちゃん、人間の情って怖いね」

妻として母親として、そんなものを圭子に望んではない。

過程がどうであれ、彼女は自分にとって大切な家族を産み落としてくれた大切な人だ。

それを想うと、愛おしくて堪らなくなる。

あの頃は、そんな感情を持つなんて思ってもいなかったのに。

圭子はただ、自分勝手に求める温暖を与えてくれる道具に過ぎなかったはずだった。

「辛いのか？」

「…圭子はね、多分、僕を捨てるよ。」

でも、それは辛いのか。けーちゃんも長続きしないって言ったし、僕もそう思ってたから」

「じゃあ、何が辛いのか？」

「……判らない。何が辛いんだろう。」

だって圭子は僕を好きだけど、愛してはいない。

でも自分が腹痛めて産んだ子だから、双子の事は愛そうとしてる。

…圭子がね、時々、怯えた目で僕を見るんだ」

まるで、「俺」を知っているかのような目で。

敬輔と彩は、「俺」を見抜いた上で、無視をした。

「俺」が引き摺り出されたくない事を知っていたし、プラスになるはずもない事を解っていたから。

だけど、何も知らない圭子は、零人を見ているようで見ていない。完璧に作り上げた「僕」を通り越し、卑怯で凶暴な「俺」を見ている。

「圭子、婚約者がいたんだよ。最近、その男と会ってるみたいだ」

「気に食わないの」

「だから、情って、怖いね。」

別れてって言われたら、僕はあっさり別れるんだろうけど。

俺、を見抜かれ始めて、僕を無視して、俺は時々圭子をどうにかしてやりたいくなるよ」

零人は敬輔の前で「俺」を出さない。

敬輔も彩も同じくらい好きだけれど、同類の匂いを持つ彩は敬輔とはまた違う安堵感を得られる。

彩は穏やかに微笑い、零人の肩を抱いて軽く叩いた。

「怖いんだね」

「うん：怖い。」

俺が前へ前へ、来てる。

圭子を傷つける事も怖い。双子を、俺のせいで失う事も怖い。

愛してるんだ。あの子達、二人は、俺も僕も愛してくれるから」

「レイはもっと我儘になればいいよ」

「もう、良いんだ。シノとカノが生きてれば、もう良いんだよ」

可愛くて可愛くて堪らない双子。

掛け値なしの愛情を与えてくれる、たった二つの存在。

でももうきつと手遅れだ。

零人はぼんやりとそんな事を考えるようになった。

零人は簡単に諦める事がどんなに楽かを知りすぎている。

きつと、この手で不幸にしてしまう。誰にも渡したくなくて、見せたくなくて。

可愛い可愛い自分の分身達。

愛して愛して止まない、二つの命。

辛うじて正常を保っていた琴線が切れたのは、双子が二つに成って数日後の朝。

予定よりも早く打ち合わせが終わり、それでも家に帰りついたのは

早朝だった。

一組の布団で丸まって眠る幼子の隣に、彼らの母親がいるはずだった。

零人は、知らなかったのだ。圭子が他の男に気を揺るがせている事は知っていても。

食卓も兼用した小さなテーブルにあるのは冷えた一つの弁当。

「パパ！」

物音に起き出した双子は嬉しそうな声を上げ、頼りない足取りで駆け寄って来た。

抱き上げて、抱き締める。

「：ママは」

「いないよ」

「いないの」

「パパがいない日は、いつもこう？」

「うん」

「そうなの」

知らなかった。

浮気でも不倫でも、彼女が子供を愛そうとしてさえいればそれで良かった。

妻として母親として、そんな事は望んでいなかったはずなのに。

ゆらりと怒りが揺れた。何に対しての怒りかも判らない。

「シノ、カノ、お出かけしよう」

愕然とした表情を即座に隠し、零人は微笑った。

双子は突然の申し出に歓喜の悲鳴を上げ、大慌てで筆筒へと駆けて

行く。

弁当を無造作にゴミ箱へ捨て、淡々と冷えた眼でペンを走らせた。

死のうと思うのは簡単な事だ。

それを実行する事も、零人には簡単だった。

圭子への情と、双子への強い愛情と、二つに分かれた人格と。

元々長く生きる自信がなかったのだ。

双子を愛しく思えば思うほどに、柔らかな闇の中で嘲笑っている「俺」は着実に前進する。

その恐怖は、零人にしか解らない。

「俺」が鎮座している闇が、どんなに心地いい場所か、零人は識っている。

だからこそ、恐怖は肥大していくのだ。

『後悔するぞ』

彩はそう言わなかったけれど、きっと敬輔と同じ危惧を持っていただろう。

溜まった闇と膿が、予想以上に深刻で深いものだと思っていたから。

「けーちゃんとさーちゃんには、ちゃんと言わなくちゃって」

遊びつかれていた歌音はファミレスでの夕食を終え、零人の腕で眠っている。詩音も腕に寄りかかり、うつらうつらと船を漕いでいた。呼び出された理由は、零人の一言で何となく判った。

「逃げるの」

「ごめんね」

「だから、後悔するって言ったんだ。

俺は許さねえぞ。そいつらどうなるんだ」

「無責任だよ。この子達には僕しかないのに」

「解ってんなら!!」

「ケイ」

「彩! レイは死ぬつもりなんだぞ!!」

「: ゴめんね」

生まれたばかりの双子を抱いた時、温かさと重みに涙が溢れた。

あれは純粹な感動のもので、それは贗物ではなかったはずなのに。

双子が成長する度にどんどん溢れる執着と独占欲。

長続きしないと判った上での結婚なのに、何故か溢れていく「裏切られた」という感情。

「もう、駄目なんだ。

判るんだ、自分で。判るんだよ。

お父さんとお母さんが死んだ時、胸がスカスカになった。

シノとカノがそこを満たしてくれる度に、俺の異常さが膨れ上がるんだ。

それを誇示したくなってる。このままだと、俺は、圭子もこの子達も殺して、満足して、」

怖い。

無理矢理押し隠した「俺」の長年の鬱憤はもう抑えられない。

圭子の行動の全てを識った今、そうしてしまいう自分が簡単に想像できた。

それはただの小さな切っ掛け。

殺して、誰の目にも届かない場所に隠して、生活をしているつもりで生きるのだろう。

心から笑い、話しかけ、おやすみとおはようのキスをする。

幸福に浸れる。養父母の与えてくれた環境をコピーした、けれど時

を止めた生活を。

満たしては乾き、乾いては妄想で満たし。

「これ以上壊れたくない、壊したくない。

僕は思うんだ。それなら、この子達には綺麗な記憶のままの僕で、圭子にはささやかな復讐を。

許せないんだよ。俺も圭子も、どうしてもシノとカノを不幸にする。

僕がいれば良かったのにつて、そんな記憶と渴望を与えて、逃げたいんだ。

怖いから。俺は、醜いから。最初から、捨てておけば、楽だったけど」

圭子に捨てられるのは辛くない。

なのにどうしてこんなにも苛立つのか。

辛いのは、双子に見限られる事。

今は自我らしい自我も薄い年頃で、けれど彼らは確実に成長する。

二人が自分の意思で行動し始めた時、ただでさえ此方に近づいている「俺」は迷いもなく二人を永遠のものにするだろう。

『お前、そんなんだから捨てられんだよ』

あれはもう記憶も殆ど残っていない、母国での一言。

細くて小さく、鈍間で臆病。

犯罪組織と殆ど変わらない孤児院の中で、使えない子供はお荷物だった。

当然食事も真っ当なものは与えられない。

光と共に差し出された手に縋り、その光の中で安穩と過したいがために自我の一つを封印した。

これはそのツケ。ニヤケて「僕」を軽蔑している本当の自分の自分

への周囲を巻き込んだ復讐。

「ケイ、ケイには理解できないかもしれないね。

レイは、レイの苦しみは、レイにしか解らない。

止められるなら止めたいけど、それをしない俺もまた逃げた事になるんだろうね」

「…どうして、お前はそんなに冷静なんだ」

「…冷静だと思う？レイは、俺の仲間だよ。

ケイの愛情は護ろうとするもので、俺の愛情は認めようとする事。質の違いで、俺は今、冷静じゃない」

子供が生まれた半年後から、零人は死後の準備をしていたと言った。実の親に捨てられたという事実は、感情になって残らなくても、零人の中に確かな疵を残した。

愛されたいと望みながら完璧でないと愛されないと思い込み、遠慮の中で育てた愛情は不完全なまま成長を止めた。

歪んだまま、救いの手を望んでいないのに、無意識の内に自覚し、己の中の欲望に気づいて愕然とする。

零人は宣言通り、翌日自ら命を絶った。

遺書は無い。

デビューを目前にしたバンドのヴォーカルの自殺は時代を少しだけ彩り、やがて風化する。

全てを呪っているような歌詞は、全て自分自身への鬱憤。

「俺」の微かな自己主張。

零人は圭子を愛していたのだ。

父母と友人への親愛しか識らなかったから、自ら複雑にして明らかにしない内に閉じ込めた。

可哀想に。裏切られる事を怖れて悲しい先手を打つしかなかった。
愛して止まない己の化身とも言える双児に、柔らかで悲しい記憶を
刻みつけ。

彼らは零人の死後程なくどこかの施設へ入れられたと風の噂で聞き、
消息を探しても見つからなかった。

そうして十六年の時が流れ、彩はふらりと悠久の森を訪れた。
彰二から、「直接双子に会った」という連絡を受けたからだ。
敬輔と涼太は突然の事に戸惑い、会う事を拒んでいる。

「レ……詩音、何て顔してるの」

第一診察室と書かれた部屋の前、座り心地の良さそうなソファ―。
零人が生き返ったかと思うほど瓜二つの少年は、焦燥を眼に宿し、
呆然と座っていた。

詩と歌の音―14―

判っていたんだ。

識っていた。

父親の駄目な部分は、全て自分が継いでいる事。

自分達を護る大人がいなくなった事を理解してから、考える事は常に「どう巧く生きるか」

それだけ。それだけが頭を占めている。

妹の手を引いて、彼女を護って、それは自分の義務でもあり使命でもあり、生き甲斐だから。

そこだけ聞けば親のいない兄妹の美談だけれど。

グネグネに歪んだその感情は、綻んだ隙間から色々な貌を生み出しただけだ。

だって、歌音には自分しかない。

二人で産み落とされたこの世界は穢くて、冷たい。

歌音を護れる者は、自分以外にいない。

妹を護るためには幾つもの貌が必要だった。

『だから、僕を産んだんでしょ？

君達は』

瞼を開け、布団を剥いだのはほぼ同時。

上半身を起こして初めて起床を自覚した。

嫌な夢を見たような気がする。
胸焼けが酷い。こめかみの辺りがビリビリと痺れている。

誰かが、俺に話しかけた。

誰なのかは判らない。眠った気がしない。

頭が痛い。気持ちが悪い。

そういえば、昨日歌音がふらりといなくなり、捜しに出てからどうやって家に帰ったのかもあやふやだ。

あやふやと言うよりは、覚えていない。

「：何だ、コレ」

恭一郎と内容の濃い話をしていた事は覚えている。

言いたくなかった言葉を、彼に吐露した。

酷く不安になった。

酒を飲んでいたわけではないし、酔い潰れられるほど弱いわけでもない。

まるで、自分ではない誰かが自分を内から操作しているような。

不安だ。こんな事は初めてだ。

心の奥底に住まう彼らは、自分が操作しているはずなのに。

そうだ、そもそも、彼らは自ら好んで表に出ようとはしない。

表の世界がどれだけ苦しいかを識っているから。

だから詩音は、その失陥を大したものと受け止めていなかった。

出てくるなと強く制していたし、彼らはそれに従順だった。

正常な、極普通の、人間で。

だから今まで、平気でいられたのに。

こんな不安。

——悠久の森、療養棟。

「…どしたの？歌音の部屋忘れた？」

ノックも無しに扉を開けたのは、双子の片割れ。

普段なら寄り付きもしない診察室の扉を開けた詩音は、扉口に寄りかかって少し俯いている。

冗談に答えない詩音を不審に思い眉を顰めて近づくと、彼は酷く陰気な顔色をしていた。

「どうしたのさ」

「先生…、俺、昨日、どうやって帰った…？」

ベロンベロンに酔った同僚からよく聞く言葉。

恭一郎は少し笑い、けれど彼の様子に顔を引き締める。

「どうって、歌音見つかったっていうか帰って来たから、普通に帰ったよ」

「普通…普通に…？」

「うん…そだけど…」

「それ、本当に、俺だった…？」

白衣の胸元をくしゃりと掴み、搾り出した声で問う。

掠れた声の言葉が流れる度にゆっくりと持ち上がる顔の色が。

「し、詩音、どうした？」

「記憶が無い！」

いなくなっただって聞いて、捜しに行つて、歸つて来たなんて知らない!!」

「しの」

「先生、俺は普通だろ?! 普通にしてきただろ!

異常おかしい事バレないように、努力してきたのに!!」

「…っ、詩音! コレ見て!」

ダンツと壁に背を打ち付けられ、恭一郎は咄嗟にライターを擦った。恐怖の真髄を見たように蒼白とした顔が一瞬怯み、弾かれたように後退する。

愕然としていた眼は、ゆらゆらと揺れる炎を力なく凝視した。

「見て。ずーっと見て。

はい見てー…そうそう、じゃあ、次はゆっくり目を閉じてー…」

眩きながら、空いた手で詩音の臉にそっと手を翳した。

手の平に触れる睫毛の感触で閉眼した事を認め、翳した時と同様に手を退ける。

気を失った詩音はがくりと膝を崩し、恭一郎は「よっこらしよ」つと椅子に掛けさせた。

力の抜けた身体は意思を持っているように、不自然にしっかりと座っている。

「どっち?」

問いかけた。

取り乱していた本来の詩音は眠っている。

ふふ、と小さな笑い声が漏れた。声と同時に両肩が微かに揺れている。

「僕です」

詩音は擡げていた頭をゆっくりと上げ、にこりと穏やかに笑みながら答えた。

「誰？」

「詩音ですよ。知ってるでしょう？」

「俺の知ってる詩音は僕なんて可愛らしい言葉は使わないよ」

「先生の知らないところじゃ使ってますよ」

「そうでしょうね。君達は本性を隠したがるから。」

でも、君達の基本的な本性はさっきの詩音でしょ？」

この子は一体、何人心の中に住まわせているのだろう。

明確な意思と行動権を持っているのは、今出てきている“彼”だけかもしれない。

「基本的なものは、ね。でも、僕は違いますよ。彼に従事していない。」

他のは、僕や彼とは違って、ふわふわ漂ってるただの意思に過ぎないから」

「こうやって応えてくれたって事は、俺を信用してくれたって事？」

詩音はまた小さく笑った。

殆どと息だけの微かな笑い声。

「僕も詩音も、誰も信用してない。」

歌音の事だって、本当は信用してない」

「どうしてさ」

「その理由を言って、あなたは信じる？」

「職業柄、信じるんじゃないのかな」

「先生って、お気楽ですよ。向いてないんじゃないですか、この仕事」

「…知ってるヨ」

穏やかで穏やかなだけの笑顔。

恭一郎は妙な突っ掛かりを胸に覚え、ふと眉を寄せた。

自分は、彼を知っているのではないか。

彼とは、幾度か会っているような。

冷静さを装う恭一郎は、詩音の強烈なキャラクターを再意識した。

精神科にいた頃から、様々な症状の人間を見てきたけれど、ここまですら強烈な印象を与える人間は珍しい。

「昨日、あなたに告白した人格。アレは、僕が「行け」と言ったんです。

あれは子供の時の詩音。今の詩音のコアになってる、独占欲だけの子供。

一度目のカウンセリングで出てきた好戦的な詩音は、それが少しだけ成長した人格。

精神的な安堵と快楽を求める人格と、肉体的な安堵と快楽を覚えた後の人格ですよ」

「じゃあ、君は？」

「僕…？僕はね」

また微笑う。

豊かな笑みだ。

見ていると安堵するものとは掛け離れた、恐怖すら覚えるそれ。でもやはり知っている。

「僕を創ったのは、歌音。産んだのは詩音。歌音に嫌われたくないから、僕を生んだ。

人間って、誰でも小さい人格を幾つも持っているでしょう？そんなもんでしょ？

それは所謂処世術と同じもので、TPOで顔を使い分ける。

でもね、詩音はそれが出来なかったんだ。

詩音は僕と共存しているつもりだったみたいですけど、実際は僕がコントロールしていたにすぎない。

昨日は、今まで与えていた記憶という情報を与えなかっただけ」

「どうして」

「先生、言ったでしょう。」

僕は誰も信用していません。

詩音も、歌音も」

『しの、怒っちゃ嫌だよ…笑ってて、しの…』

十三年前、突然迎えに現れた母親に食って掛かった兄を、妹はそう言って縛り付けた。

彼女に嫌われては何も残らない兄は、従順に頷いた。

何もない心で生きていけない事は、本能が知っているから。

だから、そうして、僕は生まれた。

下らない兄妹だ。馬鹿で下等で仕様がなければ、見ている分には飽きない環境。

内から見る二人の焦りや葛藤は最高に笑えて、最高に虚しい。

「…笑える」

「…ん？」

「歌音は大好きな母親と兄がいがみ合わないように、僕を創り出した。

僕が生み出される切っ掛けを創った。

歌音は詩音が心底母親を嫌ってる事を知っていて、残酷にも母親

を取ったんだ。

捨てられたくない詩音はそれに従うしかない。

歌音の世界には初めからママだけだった。パパもシノも、付属品でしかない」

「それは、違うよ」

「そうかな？ 僕はあなたと違って付き合いも長いし、何より中から全部見てきたんですよ。」

昨日の彼はあなたに自分が穢いと告白しながら、それでも母親が少しでも妹に目を向けると、彼女が簡単に母親へ転ぶ事に怯えていた。子供だからね。

僕以外の二人の少しだけ他より強い人格は、いつも同じ事だけを考えている。

どうすれば歌音から母親を排除出来るか。どうすれば歌音を縛り付けておけるか」

見てきたのだから、全部知っている。

歌音がひっそりと心を閉ざした夜、まだそれを知らない詩音は寝静まった家の中、包丁を握り締めて小一時間佇んでいた。

殺して消してしまえば詩音の心は楽になったのに、歌音の事を考えると実行できなかった。

花菜が見舞いに訪れた時、歌音があまりにも泣くから、腹の底から湧き出る罵倒を声に乗せられなかった。

馬鹿馬鹿しい。

「君、重要な事を忘れてない？」

君も、所詮詩音の人格の一部でしかないんだよ？」

「そうですね。自由に動き回る事も許されていない身分ですね。

許してないつもりで、僕は出来るんだけど」

「だったらどうしてそうしないの」

「…本当に、笑えるでしょう？」

先生、僕は歌音を信用していませんけど、結局、愛してはいるんですよ」

嫌われたくないのは同じ。

だからこそ滑稽だ。

縛れているのは自分も同じなのだと、出て来る度に自覚する。させられる。

虚しい。

昨日、歌音を連れ帰ったという男に、詩音は軽い会釈と黙礼を返した。

本来の詩音ならば、有無を言わず殴りかかっただろう。

争いと暴力を極端に嫌う歌音が傍にいたから、咄嗟に「僕」が出た。黙礼の後に「ありがとうございます」と言って歌音を安心させ、そのまま帰った。

「今まで巧く操作していたんなら、どうして昨日記憶を渡さなかったの」

「癪だったから、ですよ」

「癪？」

「コントロールは出来るのに、どうしても抗えない。僕は笑って見ているしかない。

本当の意味で歌音に触れられるのは、詩音が操作している人格だけ。

詩音と本当に共存して、年々彼に溶け込もうとしている彼らだけ。処世術の道具としては使えないのに、彼らはもうすぐ詩音と一つになる。

そうしたら、バランスが取れなくなつて、僕はきつと消えてしまふ。

僕が出来るはずの事をわざとしないのは、結局、妹が妹でなかったから」

「それは、自由に動き回る事？」

それとも詩音を飲み込んで、彼に成り代わろうとする事？」

「：やだな。僕は所詮詩音の一部だから、成り代わるも何も。」

でも：そうだね。二人は歌音が愛してるのは元の詩音だって事を認めているから、溶け込もうとしている。

僕は中途半端に意思を確立してしまったから、歌音に僕だけを見て欲しいと思ってる。

でもそれじゃあ、ダメなんですよ」

何だ。案外良識的な人格ではないか。

恭一郎はほっと安堵の息を吐こうと空気を飲み込んだ。それを見透かしたように、詩音の眼は微笑いに歪んだ。

「僕だと、見ていてほしくてどうしようもなく、簡単に歌音を殺してしまう。」

本気でそう思えるのは僕ら皆同じだけど、彼らは到底実行できない。躊躇うから。

僕は躊躇わない。他の誰かに見られたり、他の誰かを見る事も許せないから。

だから僕は今まで意識的に、極力表に出ないようにしていたんですよ」

「でも機会はあったでしょう。どうしてそれをしなかったの？」

「先生、馬鹿だね。それともこう言って欲しいんですか？」

僕は所詮跡付けの人格だから、マスターである人格の隋には逆らえない。

そう、確かに、機会は腐るほどあったよ。詩音が眠っている時は、自由に起き出せたし。

でも：さっきも言ったけど、結局は僕も歌音に縛られてるだけだ。

詩音を殺さない、歌音を殺そうとした時点で詩音に無理矢理引き摺り下ろされる。

だからって詩音を殺せば、歌音はすぐに違いに気づいて、僕に「返して」って言う。

そんな事耐えられない。歌音が望んだから僕は生まれたのに、彼女に否定されたら、」

心だけの詩音は呟きながら俯いて言葉を切ると、微笑と共に顔を上げた。

『それ、地の俺だ。裏じゃない』

目を見張らせていないと気づかないような、ほんの僅かな狂気。それを覆い隠せる空虚な微笑で、あの日詩音は微笑った。

俺、と言っていたけれど、あの日の詩音はきつと彼だ。

「君は、もう気づいてるんじゃないの？」

恭一郎は詩音の目を覗き込んだ。

そこに、初めて感情の色が滲んだからだ。

「君も、もうすぐ飲み込まれるんでしょう」

だから、「此処にいるんだ」と言うように記憶を渡さなかった。

身勝手に創られた人格はいつも、身勝手に捨てられるのだ。

もう不要だと。

「今は、飲み込まれるかもしれない。でも、先生はよく知ってるでしょう。」

詩音は不安定だ。神経質で、被害者思想で、自虐的。物凄く不安

定だ。

今は飲み込まれても、またいつか出てくるかもしれない。
僕が飲み込まれるのは、あの子に、少しでも望んでしまったから」

『ごめんね、ごめんね…』

泣きながら言ったあの子は識らない。

綺麗な目で、綺麗な涙だった。同じ顔、とは思えないほど。
魂ではないただの心は何処へ行けば良いのか。

『：一人にしないでよ』

独りになりたくなかった。

詩音ではなく、「僕」を見て欲しいのに。

無垢な目で、綺麗な目で涙で、繊細な声は、詩音だけを呼ぶ。
欲しいものは全て、詩音に向けられる。

「辛いんです。だから、僕も飲まれようかと思って。

元々、もう、限界だったんだ。

四年前の、あの時から。あの時、それでも繋がってた僕と詩音の
間には、確かな亀裂が出来た。

自分で生んだくせに、世渡り上手で善い人の「僕」がいるから殺
せなかったって、詩音は確かにそう言った。彼がそう意識していな
くても、詩音が詩音を否定する事は、僕を否定する事に繋がるから。
だからもう、限界は近かったんです」

ふう、と溜息を吐きながら背当てに凭れ、詩音は浮かべている微笑
を僅かに濃くした。

それは穏やかなものではなくて、少しの凶暴さを滲ませた、限りな
く詩音に近い貌。

「さよなら先生。

最後に良い事を教えてあげる。

詩音は、今、起きてるよ。

詩音に、今、良いものをあげたよ……」

僅かに濃くなっていた微笑はどんどんその色を増し、恭一郎は二つのアッシュカラーの眼玉がこちらへ迫り来ているような錯覚を覚えた。

思わず上半身を引いたと同時に、詩音の頭ががくりと背凭れに落ちる。

落ちた頭がゆっくりと持ち上がり、開いた目は怯えたように揺れていた。

『ねえ、シノ。

パパはねえ、ママの事、ほんとは大嫌いなんだよ。

シノだって嫌いでしょう。ママは、カノを取るもんね』

壊れたグリーンズの眼。

ふわふわと微笑いながら、その実泣いているような掠れた声で。

頭と頬撫でる手は大きく温かく、こんなにも柔らかな愛情を伝えているのに。

『カノはシノの半分だから、誰にも渡しちゃ駄目だよ。

シノとカノはパパの全部だから、誰にもあげない。

ママにもあげない。絶対あげない。シノとカノはパパの全部なんだよ』

パパはいつだって優しくて、いつだって詩音と歌音を間違えなかった。

怒られる年頃まで一緒にいなかったから、怒られた事などない。

パパはいつだって優しくて、ママを愛していて、双子を愛していた。

「せんせい」

瞳が愕然と揺れている。

手は、注意深く見なくとも微震していた。声もまた同様に。

「アイツが生まれたのは、五歳ん時、のはずだよ。

何で、アイツが、パパの記憶、」

「詩音？」

『ねえ、シノ。』

パパはアタマがオカシイみたいなんだけど。

シノはそれでもパパを愛してくれるかなあ……？』

壊れた、ロボットみたいだ。精巧に出来た人形みたいに綺麗だ。

眼の際に溜まっている涙は不思議と零れず、声は何処か機械的で、それでも人間の熱を持っている。

頬と頭を撫でる手は、それだけは、子供の心に滲む愛情を持っていた、だから、膝に抱かれている詩音は歪な父親に怯えなかった。

でも、識らない。

パパはまるで、今の自分のように。

歪んでいて異常で、怖ろしい事を平気で口にした。

そんなパパは、識らない。

『あげるよ。』

多分、君と僕が入れ替わるのは、これで最後だから』

僕、と言う人格が、初めて自分の手を離れ、他人と喋っていた。

それだけでもショックが大きかったのに、彼は溶ける前に大層な土産をくれた。

識らないパパの記憶。

壊れる事を怖れて、でも壊れてしまっていたパパの本当の姿。

「詩音、落ち着いたら話して」

感情がついて行かない涙はただ生理的に零れるだけ。

混乱してしまった詩音を、恭一郎は優しい声色で遠ざけた。

今、彼の混乱を問い質せば、きっと詩音の線は切れてしまう。

簡単に、あっさりと自ら命を絶った彼の父親のように。

ボロボロと溢れ零れる涙を両手で拭いながら、詩音は頷いた。

心の中は何故かすっきりしていた。

何も解決していないのに、荷物を纏めた自室のようにすっきりと。

幾つもの人格を無造作に創り続けて、彼らはあっさりと自分の中へ溶け込んだ。

それは、考えてみると、当たり前前の事なのだ。

所詮は弱い自分が生み出した人格なのだから、我慢の限界がくれば躊躇いなく退く。

自分では歌音に触れる事さえ出来ないのだと、彼らは理解したのだ。自分にさえ捨てられた。

独りだ。

「レ……詩音、何て顔してるの」

孤独に気づいた瞬間、焦りを感じた。

“どう取り繕えば良い？”

擦れて赤くなった目元を、流れては溢れる涙がしつこく通っている。それを拭う気力もはや無かった。ただ、呆然とソファーに座っている。

歌音に会いたかった。自分で会いに行く勇気が無いから、ここで座って待っている。

姑息な手に引っかけたのは目当ての人ではなく、見知らぬ男。

ぼやけた視界で声の方向へ顔を向け、再び視線を前に戻すと呆然と壁を見つめる。

「詩音、俺はね、君のパパの友達なんだ」

「……パパ……」

優しくて、愛してくれていて、繊細だった人。

それとも、気が狂っていて、頭の異常しかった人？

「どっちの、パパの、友達……？」

「両方、かな」

詩音は強く瞼を閉じた。

ブツブツと涙が切れ、一瞬だけ視界が鮮明になる。

初めてきちんと向けた視界の中、背の高い男は目の前で、何故だか安心する笑顔を浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0464c/>

詩と歌の音

2010年10月21日23時38分発行